井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義—解説と翻刻—(1)

磯前順一・高橋原

一・本史料の意義

ここに紹介するのは、明治期を代表する哲学者、井上哲次郎の東京帝国大学での講義「比較宗教及東洋哲学」のノートである。これまで井上(一八五五—一九四四)は、明治期におけるドイツ国家哲学の導入者として、あるいは内村鑑三不敬事件にみられるキリスト教排撃者として、国家主義的な講壇哲学者と評されてきた(2)。所詮、その学問にしても哲学以前の「折衷主義」の域を出るものではないとされ(3)、政治的文脈はともあれ、彼の言説が学問として本格的に論及されることはほとんど無かった。

たしかに、井上の学問を時代主潮との緊張関係から測ってみるならば、多くの論者たちが指摘するように、それは思想的な深みを欠いたものと言わざるをえない。しかし一方で、日本の社会が西欧世界に組み込まれてゆく過程のなかで、それに呼応するような学問的言説を、東京帝国大学という社会制度をつうじて編成していった先駆的人物として井上を捉えてみるならば、その言動は明治という時代の知識社会の支配的言説を満腔をもって現わしていることになる。とくに、明治二〇年代から三〇年代にかけては、東大哲学科はじめての日本人教師として、またドイツ帰りの気鋭として、社会制度的な影響力の大きさは勿論のことだが、学問的にも井上が日本の知識社会を牽引していた時期であった。そして、本稿で翻刻する彼の「比較宗教及東洋哲学」講義こそが、それまでドイツに留学していた井上が、帰国直後の明治二四(一八九一)年春から同三一(一八九八)年七月までおこなったものであり、彼が学問的に一際輝いていた時期の所産であるといえよう。

そして、本稿で翻刻する講義ノートは、明治二三(一八九〇)年度から同三〇(一八九七)年度までの八年間の講義のうち(4)、明治二六・二七(一八九三・一八九四)年の二年度分にあたると思われるもので、おもにインド哲学の六派哲学を主題にしている。井上はインド哲学を仏教と仏教以外のものに二大別しており、六派哲学とは後

者の中心をなすものとされる。本講義のなかで井上自身は、「印度ニ於ケル仏教外ノ哲学ハ或ハ九十五種ト称シ、或ハ九十六種ト称ス。然レドモ其中ニ肝要ナルハ六派ナリ。「ミマンサ」、「ベタンダ」、「サンクヤ」、「ヨガ」、「ニヤヽ」、「ヴイセシカ」、是ナリ」と説明している。また、井上はそれらをしばしば「婆羅門教」と呼んでいるが、これは明確な統一組織体をなすというよりも、ヴェーダ崇拝を中心とするインド・エリート層の思弁的哲学という意味合いが強いものである。

原稿は井上自身の手によるものではなく、当時東大哲学科学生であった姉崎正治によって筆記されたものであり、東京大学文学部宗教学研究室所蔵の姉崎正治関係資料として保管されていたものである。資料番号は41-0-0-11、目録番号は文16が充てられている(5)。ノートは市井で販売されていた和綴本で、明朝綴、寸法は縦23・5×横16・5糎、模様は草の丸散らし（型押）である。姉崎自身の手によって、内題には講義名に相当する「東洋哲学比較宗教」が、外題には当該年度の内容をしめす「印度仏教前哲学」が書かれている。白丁をふくむ総計一二五丁からなるが、そのうち一二〇丁の部分に姉崎による毛筆で墨書きがなされている。

この講義は日本の宗教学の濫觴として、以前より言及されてきた。たとえば、日本宗教学会の会長もつとめた田丸徳善は、本講義を以下のように位置づけている。

ここで宗教学の本質について考えるにあたり、…まず「宗教学」というその学名を手がかりにすることにしよう。大まかに言って、わが国では、この学問はすでに数十年の歴史をもっている。一八九〇年、井上哲次郎が東京大学で「比較宗教学」と題する講義を行なったのが、その端緒をなしたと考えられる(6)

田丸をはじめ、従来、この講義に言及してきた研究者はその題名や井上自身の回顧録に触れるものの、この講義内容を直接伝える史料の存在については一切言及されることがなかった。しかし、一九九〇年代になって、井上直筆による本講義のうち、バラモン教に関する原稿の一部分が東京都立図書館に現存していたことが今西順吉によって報告され、その翻刻が解説とともに公表されるようになった(7)。だが、それは一部分にとどまるもので、この史料をもちいて本講義の性格を明らかにするという試みはその後なされずにきた。そのためもあって、結局のところ、井上の比較宗教及東洋哲学講義が当時の比較宗教学の言説のなかで具体的にどのような位置をしめるものなのか、そして比較宗教学が後出する姉崎らの宗教学とどのような関係にあるものなのか、いずれも吟味されることのないままに、なかば先入見のもとに、宗教学の先駆けをなすものと、今日にいたるまで信じられたままになったのであった。

だが、今回幸いなことに本講義ノートが発見され、六派哲学を主とする「仏教前哲学」の部分のみとはいえ、既に発表されている井上の自筆原稿を併せることで、長いあいだ幻となっていた井上の講義の具体的内容をかなりはっきりと把握することができるようになった。本稿では、学史的に貴重なこの講義録を翻刻するとともに、井上の比較宗教学の構想を、彼自身の思想経歴、および日本の宗

教・思想状況のなかに位置づけてゆきたいと思う。

二、講義の大綱

講義の期間

さて、八年間に及んだこの講義の内容について、井上は次のように回顧している。

先づ仏教以外の諸種の哲学、即ち六派哲学は勿論、それ以外の諸派哲学に亘り、内外の著書を参考として講じ、最後に仏教に及んだのである。そして、仏教を講ずるに当っては、先づ仏陀の伝記を明らかにしなければならぬとの考へから、仏陀の伝記を講じた。(8)

ここに、講義実施中の明治二八年に『哲学雑誌』に掲載された雑報「井上博士の仏教起源史講義」などの記述を重ね合わせるならば、講義の内訳は以下のようなものになる。この講義は明治二七年度までは「仏教前哲学」を、同二八年度から最終年の同二九年度までは「仏教起源史の講義」をおこなっている。ただし、井上は明治二八年の秋および二九年の春から秋にかけて体調を崩し、長期の休講を余儀なくされていたようではある(9)。

なお、ここで注意を要するのは本講義の開始年である。旧来は、それぞれ井上の異なる発言に依拠するかたちで、明治二三年（田丸徳善説）、同二四年（鈴木範久説）、同二五年（今西順吉説）の三説があげられてきた(10)。だが、当時、東大が年度毎に刊行していた『帝国大学一覧』を調べてみれば、本講義は明治二三年度から開始されていたことが確認される(11)。ただ、井上自身が「明治二十三年十月に帰朝致したのである。帰朝後間も無く帝国大学教授と成ったのであるけれども、講義は其の翌年即ち明治二十四年の春より始めたのである」(12)と述懐しているように、明治二三年一〇月にドイツ留学から帰国したばかりの彼は、当時の新年度の開始月である九月から教鞭をとることはできず、実際に講義を開始したのは明治二四年春、すなわち明治二三年度の後半期頃からであったと考えられる(13)。

これによって、明治二三年と明治二四年の説の違いが開始年度と開始年という表現上の違いにすぎず、実際は同一のものを指すことが理解される。井上は二つの回顧録のなかで、この講義を「約七年間」にわたりおこなったと述べているが(14)、それはまさにこの実施期間に合致する数字となっている。その点で言えば、井上自身が『釈迦牟尼伝』のなかで回顧した明治二五年の開講というのは、記憶違いであるか、そうでなければ、「比較宗教及東洋哲学」の講義が印度哲学を扱うようになった時期を指しているということであろう。上記今西説もこの線で理解できる。

だがいずれにせよ、講義題目は「比較宗教及東洋哲学」と銘打たれているものの、実際にはもっぱら「印度哲学」を扱ったものであることは明らかである。しかも、この講義は学生のあいだで評判を呼び、大講堂で百人以上の出席者が集まり、「聴講者常に教室に溢る、程」であったという(15)。本講義ノートを筆記した姉崎もそのひ

とりであるが、そのほかに著名人としては、明治二五年度に夏目漱石、明治二五・二六年度の頃に選科生であった西田幾多郎が受講していた[16]。東京帝国大学宗教学科の設立に関与した姉崎と、京都帝国大学宗教哲学科の設立にかかわった西田の両名が、ほぼ同じ時期に、井上のこの講義を強い関心をもって聴いていたのは興味深いことである。

仏教前哲学

さて、ここに紹介する姉崎の講義ノートは年次の記載を欠いているが、彼の自伝によれば、姉崎が哲学科一・二年次の二年間、明治二六・二七(一八九三・一八九四)年度に出席したときのものである[17]。姉崎の講義ノートからその項目立てを拾ってみると、表記に一部混乱がみられるものの、明治二六・二七年度の講義が以下のような順序で進められていたことがわかる。

印度諸外道／尼夜耶学派(Nyaya)／勝論派／瑜珈(Yoga)／弭曼薩派即思惟派(Mimansa)／ベダンタ派（第一章 立宗、第二章 教義、第三 宇宙論、第四 心理論、第五 輪廻論、第六 解脱、第三[ママ] 批評）／第十三章闍伊那学派（第一項 立宗、第二 教義）

なかでも、項目の詳細さとそこに充てられた紙幅からみて、「ベダンタ派」が講義の白眉をなすものであった。それは、井上が「破羅門教ノ中心ハ実ニベタンタノ哲学ニアリ」と、六派哲学のなかでもベダンタ派をもっとも高く評価していたためと思われる。

ただし、姉崎ノートの最後の部分、「闍伊那学派」（ジャイナ教）は「六種哲学ノ外」であるため、ここでは六派哲学のうち五派しか扱われていないことになる。事実、この講義ノートの表紙見返しには、「尼夜耶派」「衛世師派」（勝論派）「瑜伽派」「弭曼薩派」「吠檀多派」（ベダンタ派）「闍伊那派」と、各派の名前が講義順に列挙されているのだが、闍伊那派を除けばやはり五派にしかならず、六派のうちの一つ、数論派（僧佉派）の名前が抜け落ちている。数論派は、「其價のあるのはどれであるかと云ふと、其数論派と云ふのと、其勝論派と云ふのと、其ベルンダ派と云ふ三つであります」[18]として、井上がベダンタ派に次いで重視する学派であり、姉崎ノートでも自筆原稿でもその存在に言及はなされている。

ここで、井上自筆の講義原稿との比較をおこない、両史料の関係性の把握をふくめて、この「仏教前哲学」講義の全体構成を推察しておこう。この自筆原稿は、明治二七年までの講義原稿と考えられており、本来は全七冊、全十五章から構成されていたと考えられている。しかし、現存するのは第四冊と第七冊のみであり、章立てでいえば、「第八章 尼夜耶派」「第九章 衛世師派則チ勝論派」（以上、第四冊）、「第十四章 各種ノ哲学派」「第十五章 印度哲学ノ総評」（以上、第七冊）である[19]。そこに、さきの姉崎の講義ノートの項目を重ね合わせ、「尼夜耶学派(Nyaya)」を第八章として置いてみると、続く「勝論派」が第九章となり、井上の自筆原稿の講義順と一致する。そのまま姉崎ノートの項目に章番号を振り充てるならば、第十章が「瑜珈(Yoga)」、第十一章が「弭曼薩派即思惟派(Mimansa)」、第十二章が「ベダンタ派」と続き、姉崎ノートで章番号を唯一持つ

「第十三章 闍伊那学派」もその数字の流れに合致するものとなる。その記載内容についても、自筆原稿と姉崎ノートの双方に存在する「第八章 尼夜耶派」と「第九章 衛世師派」は、自筆原稿にみられる節番号を姉崎ノートのほうが欠くものの、ほぼ照応する記述となっている。

姉崎の講義ノートは第十三章の途中で終っているが、それは、井上の直筆原稿の空白部分にあたる第十章から第十三章を埋める史料となっている。その後に接続するのが、井上の原稿の第七冊目にあたる「第十四章 各種ノ哲学派」「第十五章 印度哲学ノ総評」であり、以上をもって、井上の構想していた「仏教前哲学」の講義は幕を閉じることになる。ただし、姉崎の講義ノートが第十三章で途切れていることもあり、明治二七年中に第十五章までの部分がすべて講義されたかどうかは明らかではない。場合によっては、翌二八年の冒頭部まで持ち越された可能性も考えられよう。

このようにみると、姉崎ノートと井上の直筆原稿は整合的な関係のもとに理解することができる。テクスト批判の結果として述べるならば、第八章から第十五章のうち、第八・九章と第十四・十五章は井上の直筆原稿を正本とすべきであり、のこりの第十章から第十三章を姉崎ノートをもって補うべきであろう。以上の結論にもとづき、本稿では姉崎ノートのうち、井上自筆原稿として存在する第八・九章を除いた、第十章から第十三章まで、および八章の前におかれた「印度諸外道」の部分を翻刻することにする。

だが、両史料が対応する関係にあることを認めたうえで、少なくとも二つの問題点が浮かび上がる。第一に、姉崎ノートに欠けている六派哲学のひとつ、数論派の部分が実際の井上の講義の中にそもそも存在していたのか、そうであるとすれば、第何章に割り当てられていたかということがある。既述のように、数論派にたいする井上の高い評価からみて、その部分の講義がおこなわれなかったとは思われない。両史料の章番号が対応している点を考え入れれば、「第八章 尼夜耶派」の直前にあたる第七章、つまりに姉崎ノートに存在しない明治二五年度講義の部分に置かれていたとするのが、もっとも蓋然性が高いのではないだろうか。ちなみに姉崎ノートでは、「尼夜耶派」の前の部分には「印度諸外道」という章が置かれているが、それは三行たらずの導入的なものにすぎない。

第二に、より根本的な問題として、「仏教前哲学」講義は全体で十五章の構成をとるはずだが、自筆原稿の現存部分にしても姉崎ノートにしても、その後半にあたる第八章から第十五章しか残されておらず、第一章から第七章の各題目はまったく把握することができない。そこに数論派の章を割り当てたにせよ、わずか一章分にすぎず、六章分が宙に浮くことになる。それらは、姉崎の講義ノートに先行することから、明治二三年度から二五年度にかけてのものであることは確かである。明治二三年度の講義が実際には明治二四年春から始まったことを考えるならば、それは約二年半の期間に相当するものであり、明治二六・二七年度の約二年間に第八章から第一三章までの六章分が講じられたとみるならば、この二年半に第一章から第七章までの七章分が論じられたと考えるのは不自然なことでは

あるまい。

そのなかで、少なくとも明治二五年度の講義内容については、短い断簡ではあるものの、夏目漱石の覚書が残されており[20]、この年にヴェーダが論じられていたことが確認される。当時の印度哲学論においては、六派哲学をはじめとするバラモン教が明確な形をとる前には、素朴なヴェーダ崇拝の時代が存在していたと考えられており[21]、おそらく井上の講義も、バラモン教前史としてヴェーダを論じる時間を割いていたことは想定される。また、井上自身の、「先づ仏教以外の諸種の哲学、即ち六派哲学は勿論、それ以外の諸派哲学に亘り」という述懐、あるいは姉崎ノートの冒頭にある、「印度ニ於ケル仏教外ノ哲学ハ或ハ九十五種ト称シ、或ハ九十六種ト称ス」という言葉からしても、ジャイナ教論と同様に、六派哲学以外のインド諸思想を論じたことは当然予想される。このように、第一章から第七章もおそらくは第八章以降と同様に「仏教前哲学」を扱ったものと考えられるが、明治二六年一月に「宗教の研究法に就て」[22]という比較宗教の方法をめぐる論文が発表されているので、明治二五年度までの講義のなかで比較宗教・思想の方法論を扱った章を立てていた可能性も考慮しておく必要もあろう。

いずれにせよ、この「仏教前哲学」論は、インド思想を総論的に述べた明治二七年四月の短篇「東洋の哲学思想に就て」、六派哲学とジャイナ教の混同を誡めた同年六月の小品「尼夜耶ト尼犍子ノ別」[23]を発表したのみで、他に活字にされることはなかった。その意味で、本講義ノートは、数論派を欠くものの、井上の「仏教前哲学」論の後半部の模様を伝える貴重な史料となっている。

仏教起源史

この明治二七年度をもって「仏教外の哲学」に関する講義は終わり、翌二八年度からは新たに「仏教起源史」講義がはじまる。「「井上」博士は、今より原初の仏教に溯りて釈迦の自説を推究し、以て仏教々理の真相を看破せられんとす」[24]という当時の『哲学雑誌』の記事から、その目的が、仏教の原初形態としての釈迦自身の思想を明らかにすることにあったことが理解される。

さきの「仏教前哲学」論とは対照的に、この仏教論に関しては、やはり部分的なものとはいえ、講義に先立つ明治二七年に研究方法をあつかった論文「仏教の研究に就て[25]」を、さらに講義中の明治二八年に論文「印度歴史上に於ける釈迦の位地」と「釈迦は如何なる種族か」を発表し、那珂通世と釈迦の種族をめぐる論争もおこなわれている。そして、明治三〇年には先行論文を収めた小冊子『釈迦種族論』を刊行するにいたる[26]。

しかし、井上自身は、「仏教前哲学」の部分は勿論のこと、この釈迦論もふくめ、比較宗教及東洋哲学の講義全体を世に問おうとは考えていなかったようである。後年、その心中を「尚ほ未だ完備せざるを以て悉く之を筐底に投じ置けり」[27]と説明している。だが、釈迦論の講義が好評を博し、ノートが広く謄写されるようになったため、訛伝をふせぐべく、すでに講義の終了した明治三五(一九〇二)年の段階になって、『釈迦牟尼伝』(文明堂)として出版すること

になったのだという[28]。今回紹介する「仏教外の哲学」部分とは異なり、釈迦論に該当する講義ノートそのものは未だ見つかっていない。そのため、この書物の目次部分を、当時の講義内容を推察する手がかりとして挙げておきたい。

序章／第一章 歴史上に於ける釈迦の位置／第二章 釈迦は如何なる種族か（闕之）／第三章 釈迦の誕生地及び其景況／第四章 釈迦の誕生地及び少時／第五章 釈迦の結婚及び出家／第六章 釈迦の苦学及び苦行／第七章 釈迦の成道／第八章 釈迦初発の説法／第九章 杖林に於ける釈迦の説法／第十章 故郷に於ける釈迦／第十一章 釈迦帰郷後の誘化及び説法／第十二章 釈迦入滅の状況

この本の内容が講義に対応したものであることは、当時の学生が講義の様子を、「釈迦が一麻一米の難行苦行を為し、諸種の外道を歴訪して問答し、遂に大覚に達する辺を雄弁を以って講述された」[29]、と述懐しているところからも裏付けられる。ちなみに、この書物の第二章が「闕之」として本文を欠いているのは、すでに明治三〇年にその相当部分である単行本の『釈迦種族論』が上梓されていたためである[30]。それにもかかわらず、敢えてこの欠章をふくむ章立てを『釈迦牟尼伝』の目次として採用したのは、それが明治二八―三〇年度の「仏教起源史」講義の章立てであり、それを正確に記録しておきたいという意図からでたものと考えられる。そうであるとすれば、ここで私たちは、さきの「仏教外の哲学」講義の明治二六・二七年度分に加えて、「仏教起源史」講義の明治二八年度から同三〇年度分の章立てを入手したことになり、明治二三―二五年度をのぞく、明治二六年度から三〇年度の五年間におよぶ「比較宗教及東洋哲学」講義の進行過程及びその内容を具体的に把握したことになる。左に確認できた範囲で、この講義の章立てと典拠をあげておこう。

比較宗教及東洋哲学講義（明治二三―三〇年度）

仏教外哲学（明治二三―二七年度）

第一章―第七章（欠）

第八章 尼夜耶学派……自筆原稿／姉崎ノート

第九章 勝論派……同　右／同　右

第十章 瑜珈派……姉崎ノート

第十一章 弭曼薩派……同　右

第十二章 吠檀多派……同　右

第十三章 闍伊那学派……同　右

第十四章 各種ノ哲学派……自筆原稿

第十五章 印度哲学ノ総評……同　右

仏教起源史（明治二八―三〇年度）

序章……『釈迦牟尼伝』

第一章　歴史上に於ける釈迦の位置……『同　右』

第二章　釈迦は如何なる種族か……『釈迦種族論』

第三章　釈迦の誕生地及び其景況……『釈迦牟尼伝』

第四章　釈迦の誕生地及び少時……『同　右』

第五章　釈迦の結婚及び出家……『同　右』
第六章　釈迦の苦学及び苦行……『同　右』
第七章　釈迦の成道……『同　右』
第八章　釈迦初発の説法……『同　右』
第九章　杖林に於ける釈迦の説法……『同　右』
第十章　故郷に於ける釈迦……『同　右』
第十一章　釈迦帰郷後の誘化及び説法……『同　右』
第十二章　釈迦入滅の状況……『同　右』

ちなみに、毎年の講義が終わると、受講した学生は成績評価を受けるために、課題論文を書いて提出するか、筆記試験を受けることになっていた。課題論文の題目は、井上が複数提示したものから学生が選ぶことになっており、今日確認できるものとしては、明治二八(一八九五)年度が「仏教の唯心論」「仏教と老荘との比較」「法華経の真實」の三題、明治二九年度が「仏耶両教の歴史的関係」「涅槃の教義」「仏教の難点」「大小二乗の比較論」「法華経の本文批評」の五題であったことである[31]。いずれも仏教に関連した論題になっているのは、この二年度が仏教論をめぐる講義であったためであろう。それ以前の年度の論題は明らかでないが、明治二七年度については、受講生であった姉崎がバガヴァット・ギータに関する論文「薄伽梵歌の哲学及び宗教」を提出しており、「印度前哲学」の講義年度にはやはりそれに相応しい題目が出されていたことが推察される[32]。

さて、明治三〇年度をもって、この比較宗教及東洋哲学講義は終りを告げることになるが、その事情について井上は次のように語っている。

その裡、自分の講義は段々多くなって、印度哲学に手を伸ばすことは容易でなくなった。…殊に比較宗教学の立場から仏教を講ずることは、姉崎正治博士に譲った。[33]

姉崎とはもちろん、本講義ノートの筆録者のことである。姉崎は自伝のなかでも「井上教授の東洋哲学は印度の六派哲学であったが、チハンドギャウパニシャドなどという名が続々出て物珍らしかった」と述懐しており、この講義が契機となり、「自分は印度宗教に指を染めたい」と決心したようである[34]。その姉崎が明治三一(一八九八)年度からこの講義を引き継いだわけである。井上はかれを自分の後継者のひとりとして期待し、明治三〇年には『印度宗教史』(金港堂)、姉妹編として内容を補うものとなる『印度宗教史考』を井上校閲のもとに出版させ、翌三一年には姪の井上マスを養女としてから姉崎のもとに嫁がせている。

この『印度宗教史』は「印度の宗教史に就きて貫通したる大体の知識を普及せん為、各宗学林の教科書並に自修用に供するを目的とした」(序言)ものである。東大では、対応する題目の講義は行なっておらず、この本がテキストとして使用されたのは、姉崎が出講していた浄土宗高等学院(現大正大学)、日蓮宗大学(現立正大学)、哲学館(現東洋大学)であったと考えられる。『印度宗教史』は師井上の講義内容をそのまま踏襲ないし祖述したものではないかとい

う関心に立って比較してみると、むしろ一致点は少ない。まず、扱っている範囲が大きく異なる。姉崎の『印度宗教史』は印度の国土から書き起こし、ヴェーダ神話時代から仏教時代を経て、イスラム教、キリスト教の移入以降、一九世紀英領印度の宗教運動にまでわたる幅広いものである。当然、釈迦伝（紀元前五世紀前後）を時代の下限とする井上講義の範囲を包括することになるが、印度哲学を扱った部分において形式的な一致はあるものの、構成や記述の重点の置き方は大きく異なっている。たとえば「瑜珈派」（『印度宗教史』の用字では「瑜伽」）についての記述に、井上講義では原稿用紙七枚（約五〇〇〇字）が費やされているのに対して、姉崎は四頁あまり（約一五〇〇字）と少ない[35]。姉崎は、瑜珈の八段階の実修法に、耐持、勤労、容止、圧息、禁忌、内察、禅定、三昧と、師の訳語をまったく踏襲しているが、その結果得られる瑜珈行者の「不思議力」について詳述する井上とは対照的に、不思議力の獲得が瑜珈の目的ではないことを強調している（一七八―一七九頁）。また「ベダンタ派」の部分は、井上講義では原稿用紙五〇枚（一枚約七五〇字）を超える長大なものであるが、『印度宗教史』においては一頁分にも満たない[36]。もっとも、姉妹編の『印度宗教史考』においては、二〇頁ほどを充てており（四八―六七頁、一頁約五〇〇字）、「緒論、最上実在論、宇宙論、心理論、輪廻論、解脱論」という構成は、井上講義の「立宗、本体論、宇宙論、心理論、輪廻論、解脱論」と対応するものである。両者を読み比べれば、井上講義の記述の厚み、原典参照・引用の数の多さは歴然としているが、姉崎は、原典参照の際に、あえて井上講義と同一箇所に言及することを避けているふしもある。

また、論述のスタイルにも大きな相違がある。井上の講義録においては、瑜珈派の記述の冒頭に見られるとおり、複数の学説を併記するなど、頻繁に印度学の先行研究に言及があり、それらへの依存度を知ることができるのだが、姉崎の『印度宗教史』においては、参考文献等がほとんど明らかにされておらず、欧米の研究史との位置関係は評価しにくい。しかし、姉崎が仏教以前の印度哲学、また原始仏教の原典研究をするようになるのは、留学時代にパウル・ドイッセンの指導を受けて以降であり、『印度宗教史』は欧米の二次資料を用いて先行研究を総合したものであったと推測される。

もうひとつの相違は、「比較」という視点である。すなわち、井上は印度哲学上の概念を説明するときに、頻繁に西洋哲学等に言及する。具体的には、プラトン、ショーペンハウエル、カント、ヘーゲル、キリスト教、列子、抱朴子等々への言及がある。方法論的反省に基づいた本格的な比較ではなく、名前に言及する程度のことではあるが、しかし、西洋哲学の概念を参照しながら東洋思想を理解するというこの時期の井上のスタイル、また、当時の日本の印度哲学の受容状況がここに反映されていると言えよう。一方、『印度宗教史』はスタンダードな通史を目指したものであり、インド以外の思想、宗教への言及はなく、記述も最小限に抑えて、必要な補足は『印度宗教史考』に譲っている。宗門大学で用いられた教科書が、帝大生を対象とした井上講義と趣を異にするのは当然であろう。

姉崎ノートに見られる井上の「比較宗教」は、事実上「印度哲学史」であり、宗教学史上、マックス・ミュラーに始まるとされるいわゆる比較宗教学とは直接の関係は無いものであった。一方、姉崎が哲学館で明治三〇（一八九七）年度に講義した「言語学的宗教学」においては、ミュラー流の、神名の語源に立脚した比較宗教学が試みられている。さらに、姉崎は明治三一（一八九八）年度、浄土宗高等学院における講義録を『比較宗教学』として出版しているが、この題目は米国の慣例に合わせて便宜的に付けたものにすぎなかったと述べており[37]、実質はすでに比較宗教学を超えるものであった。つまり、宗教を「人類文化の産物にして人文発達の中に重要なる位置と意義を有するし、又人文の発達と共に発達変遷する現象[38]」と位置づける姉崎にとって、「比較」は、宗教の歴史的発達の実相をとらえるための不可欠な手段ではあったが、「宗教学の組織は今日尚未だ幼稚の域に止まりて材料蒐集の最中にある事なれば……今日の組織的宗教学は幼稚にして比較宗教の外に出でざるに似たり…」[39]という一節に見られるように、「比較宗教学」そのものは、宗教学の組織においては限定的な一部門に過ぎないということになる。結局、姉崎は『比較宗教学』を拡充した書である『宗教学概論』（一九〇〇年）において、ミュラーらの比較宗教学を、諸宗教の起源探求にとらわれているという点において批判することになる。姉崎が想定するのは、「起源」ではなく「人性」の一致であり、その人性の産物としての宗教現象の歴史的発達へと関心が向かっていったのである[40]。

姉崎が井上の後継として明治三一年度に開講した講義は、「宗教学緒論」と銘打たれたもので、後に『宗教学概論』の緒論へと結実するものであった。そこでは、「井上の比較宗教及東洋哲学」はもちろんのこと、比較宗教学自体とも目的を異にする、新たな学問としての宗教学が構想されていた。そのため、明治三〇年代には井上の比較宗教及東洋哲学講義はすでに古びたものになり、今日にいたるまで学問的に忘れ去られることになる。しかし、姉崎の確立した宗教学もまた時代的意義を失いかけている現在となっては、井上の講義に対する評価を今日的な有効性から論じても意味はあるまい。そうではなくて、それが明治二〇年代という時代に、当時の知識社会に対してどのような宗教や哲学理解をめぐる言説空間の可能性をもたらしたのか、その歴史的意味を吟味する時期に来ていると言えよう。

［注］

（1）本解説は、別に発表した、磯前順一「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義—明治二〇年代の宗教と哲学—」（『思想』九四二、二〇〇二年）に手を加えたものである。

（2）その伝記、著作および関連研究を網羅した基本研究書としては、平井法「井上哲次郎」『近代文学研究叢書54』昭和女子大学近代文化研究所、一九八三年、がある。

（3）大島康正「井上哲次郎《知識と思索の分離》」朝日ジャーナル編『新版 日本の思想家 中』朝日新聞社、一九七五年、六五頁。

(4)『帝国大学一覧』明治二三―三〇年度、東京大学総合図書館所蔵。

(5)資料番号は東大での保管のための番号を指し、目録番号は、磯前・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教―姉崎正治の軌跡―』(東京堂出版、二〇〇二年)中の「姉崎正治関係資料目録」に対応する。

(6)田丸徳善『宗教学の歴史と課題』山本書店、一九八七年、一二頁。

(7)今西順吉「わが国最初のインド哲学史講義(一)~(三)―井上哲次郎の未公刊草稿―」『北海道大学文学部紀要』三九―一・二、四二―一、一九九〇、一九九三年。

(8)井上哲次郎『井上哲次郎自伝』一九七三年、冨山房、四四頁。

(9)高瀬武次郎「所感」巽軒会編『井上先生喜寿記念文集』冨山房、一九三一年、五六八頁、「雑報 文科大学の新学年」『哲学雑誌』一一六、一八九六年、八四六頁、姉崎正治『わが生涯』一九五一年(新版、姉崎正治先生生誕百年記念会、一九七四年、六一頁)。

(10)田丸前掲『宗教学の歴史と課題』一二頁。鈴木範久『明治宗教思潮の研究―宗教学事始―』東京大学出版会、一九七九年、一〇三頁、藤井健志「東京大学宗教学科年譜資料(明治時代)」田丸徳善編『日本の宗教学説』東京大学宗教学研究室、一九八二年、一〇頁。今西前掲「わが国最初のインド哲学史講義(三)」四―五頁。

(11)『帝国大学一覧』明治二三―三〇年度、東京大学総合図書館所蔵。

(12)井上哲次郎「祝辞」『宗教学紀要―東京帝国大学宗教学講座創設廿五年記念号』一九三一年、三〇〇頁。

(13)当時の一年間のスケジュールは、前掲『帝国大学一覧』によれば、新年度が九月一一日に始まり、翌年の七月一〇日でその年度が終了するというものであった。なお、長期の休暇として一二月二五日から一月七日までが冬休み、四月一日から七日までが春休みであった。

(14)井上前掲「祝辞」三〇一頁、前掲『井上哲次郎自伝』四四頁。

(15)高瀬前掲「所感」五六八頁、「雑報 印度宗教に関する二箇新着」『哲学雑誌』一一七、一八九六年、九三一頁。

(16)西田幾多郎「井上先生」前掲『井上先生喜寿記念文集』六六〇頁。今西順吉「漱石と井上哲次郎の「印度哲学史」」『松ヶ岡文庫研究年報』4、一九九〇年、同前掲「わが国最初のインド哲学史講義(三)」六―一〇頁。

(17)姉崎前掲『わが生涯』五五―六〇頁。ただし、前掲『帝国大学一覧』によれば、比較宗教及東洋哲学講義は、哲学科の学生は二・三年次に受講することになっており、姉崎が言うような一年次での受講は認められていない。ただ、姉崎ノートにあるような仏教前哲学は明治二七年度すなわち姉崎の二年次までなので、三年次の講義ではないことは明らかである。また、明治二三年度から同二七年度の、おおよそ四年間かけて講義された全

十五章のうち、半数に近い六章分の筆録がされていることからすれば、やはり姉崎自身が回顧するように、明治二六・二七年度、つまり姉崎が一・二年次の二年間に筆録したものとみるのが妥当であろう。

(18) 井上哲次郎「東洋の哲学思想に就て」『日本大家論集』六―四、一九〇四年、一九頁。

(19) 今西前掲「わが国最初のインド哲学史講義（一）」二頁。

(20) 同右、七二―七七頁。

(21) 「雑報 印度の宗教」『哲学雑誌』三五、一八九〇年、六五三頁。

(22) 井上哲次郎「宗教の研究法に就て」『宗教』一五、一八九三年。

(23) 井上哲次郎「尼夜耶ト尼犍子ノ別」『仏教史林』三、一八九五年。

(24) 「雑報 井上博士の仏教起源史講義」『哲学雑誌』九六、一八九五年、一五六頁。

(25) 井上哲次郎「仏教の研究に就て」『仏教』八五、八六、一八九四年

(26) 井上哲次郎「印度歴史上に於ける釈迦の位地」『東洋哲学』二―七、一八九五年、「釈迦は如何なる種族か」『学士会院雑誌』一七―八、一八九五年、『釈迦種族論』哲学書院、一八九七年。那珂通世「釈迦種の説に付きて井上文学博士に質す」『史学雑誌』六―一一、一八九五年。

(27) 井上哲次郎『釈迦牟尼伝』文明堂、一九〇二年、序文一頁。

(28) 同右、序文一頁。前掲『井上哲次郎自伝』四四―四五頁。

(29) 高瀬前掲「所感」五六八頁。

(30) 井上前掲『釈迦牟尼伝』序文六頁。

(31) 「雑報 文科大学比較宗教に関する世間の誤伝」『哲学雑誌』一一、一八九六年、四二五頁、「文科大学の比較宗教学課題と仏教図書館」『反省雑誌』一二―一、一八九七年、八九頁。

(32) 姉崎前掲『新版わが生涯』六〇頁。後に、姉崎正治「薄伽梵歌の哲学及宗教」『六合雑誌』一七九―一八一・一八三・一八五、一八九五―九六年（同『已弁集』大東出版社、一九三四年）、として公表されている。

(33) 前掲『井上哲次郎自伝』四五頁。

(34) 姉崎前掲『新版わが生涯』五五、六〇頁。

(35) 姉崎正治『印度宗教史』金港堂、一八九七年、一七六―一七九頁。

(36) 同右、七四頁―七五頁

(37) 姉崎前掲『新版わが生涯』七頁。

(38) 姉崎正治『比較宗教学』東京専門学校、一八九八年、二頁。

(39) 同右、四頁。

(40) 姉崎正治『宗教学概論』一九〇〇年、東京専門学校、二〇―二一頁。

凡例

一、表記については、基本的には常用漢字に統一した。簡略異体字の「冂」「𠂉」「匕」も、「コト」「トキ」「トモ」というカタカナ表記に統一した。また、明らかな誤記には「ママ」と傍書した場合があるが、基本的には姉崎の筆録のままとした。

一、原文に句読点はないが、読みやすさを考えて、翻刻者が適宜加えた。

一、講義の筆録を明らかに省いたと思われる文章中の空白箇所は「 」によって囲み、省略された文章や文字のあることを示した。解読不能な文字については「□」を充てた。

一、改段冒頭の一字下げ、章節などを区切る行間スペースなどは、本講義全体の構成が把握できるように、翻刻者が適宜処理を加えた。

一、欄外注については、対応すると考えられる段落の直後に、「＊」をもって掲げた。

一、サンスクリット語のデーヴァ・ナーガリー文字はローマ字転写に書き改め、［ ］で表示した。

印度仏教前哲学

尼夜耶派

衛世師派

瑜伽派

弭曼薩派

吠檀多派

闍伊那派

東洋哲学比較宗教

印度諸外道

印度ニ於ケル仏教外ノ哲学ハ或ハ九十五種ト称シ或ハ九十六種ト称ス然レトモ其中ニ肝要ナルハ六派ナリ。「ミマンサ」「ベダンダ」「サンクヤ」「ヨガ」「ニヤヽ」「ヴイセシカ」是ナリ。

瑜珈(yoga)

[Patañjali]Patañjali 波騰闍梨ノ創ムル所ナリ。其人ノ事蹟ハ全ク明ナラズ。ウェーベルハパタンジャリヲ以テKâpya Patamchalaノ後裔ナラント云ヘリ。カープヤ、パタンチャラノコトハVrihad Âranyaka Upanishad中ニ出デタリ。此説ハ推測ノミ。印度ニテ文法ノ大家Pâṇiṇiニ反対シテ起コリタル文法家ニKâtyâyanaナル者アリテ一書ヲ著ハス。カートャーヤーナニ反シ、パー。ニ。ニニ与シテMahâbhâsya（大註）ヲ著ハシタルパタンジャリト称スル人アリ。瑜珈派ノ祖ハ此人ナラント推測シタルモアリ。之ヲ非トスルモアリ。マクスシューレルハ之ヲ同一ノ人トシ、モニエル、ウヰリアムハ之ヲ別人トシ、ウェーベルハ不明ナリトセリ。之ヲ同一トスル人多

シ。

パタンジャリノ哲学ヲ称エタル時代ハ固ヨリ不明ナリ。然レトモ若シ文法家パタンジャリト同人ナラバ紀元前二世紀ノ人ナリ。

脚注

Bohtlingk [yoga] Anschirren, Anschirrung, Gespann, Gefahrt, Geschirr, Das Rusten, Gebrauch, ein uberaturliches mittel, zauber, Verbindung, Vereinigung, Zusammentreffen, Beruhrung, Betrug

ウェーベルハ之ヲ一世紀トセリ。然レトモChristian Lassen ハ之ヲ一人トシテ、紀元前二世紀ノ人トセリ。

其他Yâjnavalkyaヲ以テ瑜珈ノ祖トナス説アリ。ウエーベルハ瑜珈ヲ以テ数論ヨリ出デタル者トセリ。其拠ハ古来「サンクヤ」ト「ヨガ」ヲ連称スルノ習アルヲ以テナリ。然レトモ其学説ハ互ニ大ニ異ナレバ之ヲ信スベカラズ。

要スルニ瑜珈ハ数論勝論ヨリハ大イニ後レテ起リタル者ナルベシ。

[Yoga] Yoga＊トハ、沈思熟慮ノ義ナリ。一事ヲ専考スル義ナリ。バルトハ之ヲ合一ノ状態ト訳シ、ウェベルハ最上実在トノ合一トナシ、マキスシュラーハ心霊的精神トノ合一トシ、モニエル、ウヰリアムハ心意ヲ抽象的冥想（ママ）ニ依テ固定又ハ凝集スルコトトス。＊「ヨガ」ノ音訳ハ瑜誐、瑜祇、瑜祁等アリ。之ヲ訳シテ相応、観行、トシ玄応ノ音義ニハ二十三巻一丁右ニハ瑜珈此訳謂相応＊ト仁王経疏十ノ三、二十三丁ニハ瑜誐ト

脚注

＊語源 [yuj], to join 故ニ瑜珈トハ最大精神ト合一ノ義ナリ

＊瑜珈ノ目的ハ人ノ精神ガ最上精神ト合一スル法ヲ教フルニアリ。此合一 [laya] ハ精神身体ニアルトキニテモ之ヲナスヲ得ベシトス。

＊一切乗境行果等所有諸法皆名相応境謂一切所縁境此境与心相応故名境相応行謂一切行此行与理相応故名行相応果謂三乗聖果此果信中諸切徳法更相符順故名果相応

謂フハ旧ニ瑜珈ト云フ。此ニ相応ト謂フナリト瑜珈ヲ実行スル人ヲYogîト称ス。祇、祁等ノ字ヲ用ヒタルハ、此音訳ナラン。或イハ之ヲYogînト称ス。

瑜珈派ノコトハ漢訳書之ヲ論ズル者ナシ。只大日経即大毘盧遮那成仏神変加持経(Mahâvailochanâbhisambhodi)中ニ外道ヲ挙ゲテ其中ニ瑜珈我ノ名アリ。其義釈二巻七十ニ之ヲ解シテ云、経云瑜珈者、謂学定者、計此内心相応之理以為真我、常住不動、真性湛肌、唯是究境道、離於因果、不観心自性故、如是是生、以為真我、俱住此理即名、解脱也、ト。即チ其瑜珈ナルコト知ルベシ。其我ヲ加エタルハ誤ナラン。

瑜珈ハ無著（アサンガー）創ムル所ノYagacharaトハ異ナリ、混ズベカラズ。瑜珈派ノ経ハ瑜珈経(yoga-sûtra)ト称ス。パタンジャラノ作ナリ。其注釈多シ。就中Bhoja-râjâ＊ノVâcha-spati-mishra Vijinanabikhu, Nâgojibhatta＊ノ注アリ。漢訳ノ瑜珈七論ハ之ト異ナリ原名ヲYogacharya-bhûmi-sastraト云フ者ナリ。

瑜珈ノ哲学説ハ甚肝要ナラズ劣等ナリ。此学派ハ哲学ヨリモ寧ロ奇異厳酷ノ苦行ヲ以テ名アリ。其目的トスル者ハ沈思シテ我心ヲ空了シ、最大ノ精神タル自在天Îsrâraト合一セシムルニアリ。其沈思ハ人皆Chittaナル思想ノ原則ヲ有シ、量即現比写ノ三量、五戒、戯想、睡眠、追懐ニ依リテ変化ス。故ニ之ヲ変化セシメザラン為、心意ヲ不変状ニ維持スル為ニ持久的慣習、Abhyâsa、情慾抑圧ナルVairâgya、此二者ヲ実行シテ心ノ変ヲ防ガザルベカラズ。コノ情慾抑圧ハ自在天ヲ沈思スルコトÎsvara-praṇidhânaニ依ラザルベカラズ。Îsvaraヲ又、Praṇavaヲ又Omト称ス即 唵

脚注

＊又[bhojadeva]

＊[pañcavikha] モアリト

瑜珈経ハ左ノ四章ヨリ成ル。

[samâdhi] 沈思

[samâdhiprâti] 沈思ノ方法

[vibhûti] 沈思ニテ得ル不思議力

[kaivalya] 解脱

ナリOmトハAumノ異字ナリ。最神聖ナル単音(ekâkshara)ナリ。Omハ即ブラハマー、ヴヰシュ°ヌ、シヴノ一体三神ノ意味ヲ以テ之ヲ唱フレバ、神妙不思議ヲ来シ最大実在ヲ知ルヲ得ント、マヌ法典第二章第八十三及八十四節ニ云。Omナル単音ハ最上ノ実在ナリ。呼吸ノ三圧ハ最良ノ現制ナリ然レトモ如何ナル者モ？Sâritî（太陽ノ頌歌）ニ過ギタルハナシ。誠実ナルハ沈黙ニ勝ル。ベダ教ニ規定セル一切ノ儀式、梵焼サレタル供物及其他ノ供犠ハ生滅スベキモ「オーム」ナル単音ハ不滅ナリ。是レ萬物ノ主ナリ。Prajâpatiト［　］「オーム」ヲ尊ビタルコト知ルベシ。此ノ語ハ瑜珈ノ秘密語ナリ。Bhagavagita経第八章ニ云（漢訳ヲ薄加梵歌）常住ノ実在ヲ意味スル「オーム」ヲ繰リ返シ以テ最妙境ニ達スベシト。瑜珈派ニテ心意ヲ一処ニ住スル法八ナリ。即チ最大ノ実在ト心ヲ合一セントスルナリ。八戒トモ謂フベカラン。

一　耐持　yama 情慾ヲ制ス

二　勤労　Niyama 宗教儀式ヲ厳守ス

三　容止　Asana　身体ノ態度ヲ正シクスルコト

四　圧息　Prânâyâma 呼吸ヲ抑止シ又某方ニテ呼吸ス

五　禁忌　Pratyâhâra 吾人ノ官能ヲ拘束シテ外感ナカラシム

六　内察　Dhârâṇa　心意ヲ確ニス

七　禅定　Dhyâna　深察熟慮

八　三昧　Samâdhi　深思冥想ノ極ニテ禅定ノ進シタル者ナリ。又三昧地、三摩地ト書ス

瑜珈ノ目的ハ漸次此八戒ヲ修シ、終ニ禅定三昧ニ到リ、吾ヲ深思ノ中ニ没シ最上ノIsヲ冥想シ其ト冥合解脱スルヲ目的トス(Kaivalya)。之ヲ得ルハ即チPatanjaliノ

脚注

此六七八ヲ[sanyapa]ト称ス。

哲学ニテハ最大幸福ニシテ彼ノアレキサンドル派哲学ノEcstasy及東洋ノ禅学ニ似タリ。而モ瑜珈カ釈迦後ニ起リタルハ疑フベカラズ。

八戒ヲ説明センニ、

一　耐持ハ五悪ヲ避クルニアリ。

殺ス勿レ

盗ム勿レ

不浄ヲ行フ勿レ

欺ク勿レ

一切世俗ノ娯楽ヲナス勿レ

此ハ仏教ノ五戒ニ似タリ。第五ノ異ナルノミ。

二　勤労ハ五事ヲ勤ムルニアリ。

自浄　sanca　内面的ト外面的ノ二種自浄アリ。

自足　santasha　自ラ満足スルナリ

自苦　Tapas

祈願　Svâdhyâyâ　又　Java

最上ノ実在ヲ深思スルコト。

祈願トハ「オーム」ヲ唱フルナリ。「オーム」ノ他ニ種々ノ秘密語アリ。Aam, Yam, Lam等ナリ。総テ印度ノ哲学ニハコノ種ノ秘密語多シ。Om mani padni hûm Namah Anitabha Buddhaノ如シ。

三　容止　種類甚多シ。静坐ヲ主トシ、坐態ニ種々アリ。

蓮華坐　Padmâsana siddha

勇猛坐　Vîrâsana Bhadra

獅子坐　Sinhâsana Svastika

亀坐　Kûrumasana

鶏坐　Kukkutasana

拝坐　Dhanmasana

孔雀坐　Mayûrasana

等ナリ。坐法ノ外ニ腕、手、指ノ持、倶、合又印ヲ結ブ等アリ。之ヲMudra結印法ト云フ。瑜珈ニハ此等ノコト、最多シ。

四　圧息　最厳ナリ。全七十論人体五種ノ風ヲ挙リ。

波那　Prâna

阿波那　Ahâna

優陀那　Udâna

婆那　Vyâna

娑摩那　Samana

而シテ圧息スルハ最良ノ厳粛法ナリト。其法ハ一鼻孔ヨリ空気ヲ吸入シ、他ノ鼻孔ハ指ヲ以テ之ヲ抑エ、斯クシテ気ヲ肺ニ蓄ヘテ暫時ノ後之ヲ他ノ鼻孔ヨリ出ス。之ヲナシタル後ハ漸時両孔ヨリ吸入シ之ヲ蓄フルニ慣レシ人、空気ヲ内部機関、脳等ニ送ルニアリト。而

シテ之ヲ練習スレバ終ニ水中ニ潜伏シ、土中ニ蟄居シ得ト。抱朴子ノ至理篇、釈滞篇ニモ此コトヲ載ス。

五　禁忌　能ヲ抑制シ外界ノ動機ヲ避クルニ在リ。

六　内察　身体各部、心臓ノ処在、頭ノ頂上、両眉間、鼻尖ヲ注視シ、思想ヲ凝ラスナリ。

七　禅定

八　三昧　此二者ハ共ニ不思議力ニ到達セン為ナリ。其力ハ種々アリ。其一ニ八自在Mahâsiddhiアリ。八自在トハ、

一　縮小法　Animâ　身体ヲ原子ノ大ニスルナリ。

二　張大法　Mahimâ　身体ノ大ヲ大ニスルナリ。又、重量ヲ増ス後者ハYarimanト称ス。

三　軽減法　Laghimâ　身体ヲ軽クスルナリ。

四　遍達法　Prâhti　何レノ処ニモ到達スル法ナリ。

五　随意法　Prâkâmya　意ノ欲スル所ヲ達スルナリ。

[ivitâ] 六　専権法　Tsatvaｰ　一切ノ専権ヲ有スルナリ。

七　制象法　Vashtâ　一切万有ヲ支配スルナリ。

八　断欲法　Kâmâvashayitâ

八自在ニハ種々ノ異同アリ。以上ハM. Williamsニ拠ル全七十論上巻六十右ニハ一、微細、二、転妙、三、遍満、四、至得、五、本主、六、随慾、七、不繋、八、随意トセリ。

瑜珈ハ学説ヨリハ寧ロ難行ニテ有名ナリ。其行者ノ難行ハ甚シキ者アリ。方廣大荘厳経七巻ニ、釈迦時代ノ難行者ノコトヲ載ス(LalitavistaraSutra)。此経又神通遊戯経ト称ス。フーコー之ヲ佛訳ス(瑜珈ノ苦行ハウキリアムス、印度知識一〇四乃至一〇七ニアル)。瑜珈ハ此外種々ノ自在力ヲ得ベシト信ジタリ。空中ニ坐シ、一度ニ世界ヲ見、過未ノコトヲ知リ、風ノ速力ヲ得ベシト信ジタリ。バルト、ラッセン等ノ説ニテハ後世ノ瑜珈ハ古ノヨリ大ニ劣リタル者ニシテ、幻術ノ如キ者アリ。千八百三十八年、北印度パンジャーヴニテ、一瑜珈行者アリ。Runjit Singh, Sir Claude Wade、二人ノ面前ニテ四十日間土蔵中ニ封ゼラレンコトヲ請フ。依リテ之ヲ実行シ、身体ノ孔ハ蝋ヲ以テ之ヲ封ジ、Dr. McGregor之ヲ検シ、之ヲ埋ムルトキモ出ストキモ、之ヲ実検シ、且番人ヲ以テ其埋蔵所ヲ番シ、後之ヲ出シタルニ其身体ハ杖ノ如ク舌ハ角ノ如クナリシニ、後其命スル法ヲ以テ復活シタリト云フ。瑜珈ノ神秘的思想ハ後世ニモ仏教ニ混シタリ。パタンジャリハ釈迦後数百年ニ出テタルモ、其難行ハ古ヨリノコトナリ。釈迦自ラモ之ヲ試シタルコトアリシモ、後ニハ之ヲ軽ンジタリ。然レトモ其戒律ハ幾分カ其分子ヲ混ジ、後世ニ神秘的ノ教ヲ生スルニ至レリ。

瑜珈ハYujiヨリ来ス。合一スルノ義ナリ。合一トハ吾心ヲ最大ノ精神ト合スルナリ。其法ハ難行Tapas、沈思冥想Janaノ二ナリ。パタンジャリヨリ此ニ不思議ノコトヲ加フルニ至レリ。後ノ瑜珈ハ身体ヲ意志ニテ制シ、心ト体ヲ離シ、以テ解脱(Kaivalya)ヲ得ント欲ス。Asiatic Occultism, Theosophy等、オルコット等ノ主張スル仏教ハ瑜珈ヲ混ジタル者ナリ。

瑜珈ハ有神論ニシテ「サンクヤ」ト正反対ナリ。然レトモ普通ノ点ナキニ非ス。解脱ヲ目的トシ、内面的考察ヲ以テ解脱ノ方トナシ、

我心ヲ有形界ヨリ離シテ始メテ解脱ヲ得タリトスルハ、同ジ「アレキサンドリア」ノプロチヌスノ哲学ト瑜珈トハ相似タリ。ラッセンハ、Indische Alterthums Kunde 三巻ニ此ヲ比較セリ。

瑜珈ノ最大精神ハ各個精神ノ特別事情ヲ離レタル最高実在ニシテ、大初ヨリ範ヲナセル者ナリ。但シ、Schellingノ Weltseeleトハ少シク異ナリ、瑜珈ノハ一箇特殊ノ精神ニ過キス、シェリングノ如ク主観的客観的ニ非ス。却テ人性的実在ヲ有スルナリ。故ニ万有教ニ非ス、有神教ナリ。

弭曼薩派即思惟派 Mîmânsâ

ベタ経ノ儀式ヲ考フルヲ思惟派ト称シ、其派ニ属スル者ヲMîmânsakasト称ス。漢訳之ヲ声論派ト称ス。ミーマンサハ「ベダンタ」ト共ニ一派ヲナス。然レトモ二者ノ学説ハ大ニ異ナリ、之ヲ別ツ為「ミーマンサ」ヲ特ニ、Pûrva-又、Karma-mimansaト称ス。「ベダンタ」ヲUttaramimansa又Brahmamimansaト称ス。

「ミーマンサ」トハ考ノ儀ナリ。此派ハ声ノ常住ヲ主張シタルヲ以テ声論派ノ名アリ。漢訳ニ依レバ此ニ二派アリ。声論派ト声生派トナス。因明大疏二巻二十六左ニ云、声論師中、総有二種、一声従縁生、即常不滅、二声本常住、従縁所顕ト即声生派ハ声ハ本無有ナルモ縁ニ従テ生シタル後ハ常住ナリトシ、声顕派ハ本来常住ナルモ縁ニ従テ顕レ来ルトナス。此二派共ニ四派アリ。智周ノ前記上末（十九　右）ニ此コトヲ挙ゲ云フ。生四者、一計内外声常其体是一、二計内外声是常其体是多、三計内声是常外声無常其体是一、四計内声常是外声無常、其体是多ト。声顕派モ亦然リ。

思惟派ノ創唱者ハJaiminiト称ス。其伝記、年代ハ明ナラズ、只古来「サーマベダ」ノ作者ヲジャイミニナリトスルコトアリ。此二人ノジャイミニ同人ナランニハ古代ノ人ナリ。其哲学ハ最古ノ者ト称セザルベカラズ。此派哲学ノ古キコトハ此外ニモ証憑アリ。哲学ノ性質ヨリ考フレバ、声論ヲ最古トセザルベカラズ。数論ハ因明ヲ主張スルヲ見レバ「ニヤヽ」ヨリ分カレタル者トセザルベカラズ。勝論モ亦、因明ヲ応用ヒルヲ見レバ「ニヤヽ」ヨリ出テタル数論ノ一派トセザルベカラズ。全七十論ニ数論ノ伝統ヲ示シテ中ニウルカノ名アリ。此ウルカハ勝論ノウルカナラン。然ルニ「ニヤヽ」ハ声ノ無常ヲ唱フルハ「ミーマンサ」ニ対シテ起リタル者ナラザルベカラズ。「ベダンタ」ハ「ミーマンサ」ヨリ遅キハ明ナリ。「ヨガ」ハ佛教ノ後ニアレバ「ミーマンサ」ハ六派中ノ最古ニアリト云ハザルベカラズ。随源記三巻（七十四　右）ニ声論ハ之勝論ヨリ出ヅトアリ。此ハ誤ト断ゼザルベカラズ。マキス、ミューレルハ「ミーマンサ」「ベダンタ」「ニヤヽ」三派ハ正教ニシテ、教権ヲ握リタルニハ勝論、数論、瑜珈哲学トシテ次テ起リタリトナセリ。also at first three philosophical systems only we admit as orthodox(the 2 mimansas & niyaya). Their number was soon raised to six so as to include Vaiseshika Sankhya& Yoji(ancient Sanskrit Literature).ト「ベダンタ」ハ、Vedaトanta即ベダヲ目的トスルヲ名トス。声論ハベダノ永遠ヲ維持スル者ナレバ正教ナラン。勝論等ハ名ハ之ニ及セザルモ、

中ニ反対ノ思想アリ。正教ニ非シヤ明ナリ。

「ミーマンサ」教ノ経ハミーマンサ教又ジャイミニ教ト称ス十二巻アリ。「ジャイミニ」ノ格言ヲ集ム漢訳ニハ此経ナシ。因明書類中ニハ此派ノコト散見ス。

「ミーマンサ」ハ純粋ノ哲学ニ非ス。ベダ経中ノ儀式ヲ確定スルヲ目的トシタリ。即チ経中ニ撞着困難アルヲ定メントシタル者ナリ。ベダ経ノ文学起リテ数百年ノ後ニハ其教権大ニシテ、従テ其解釈其多キニ至リ疑問ヲ生シタリ。中ニ儀式ヲ考究セルアリ。意義ヲ攻究セルモアリ。甲ハ「ミーマンサ」ニシテ、乙ハ「ベダンタ」ナリ。「ミーマンサ」派ハKarma-Kaṇḍaヲ組織シ、ベダンタハJiâna-kandaヲ組織セントシタリ。即チ儀式ト教理ナリ。儀式ハ供犠ノ儀式ヲ主トス。即チ讃誦トBrahumana ナリ。但シ、Brahumaノ中ニAranyakaヲ除ク。教理ノ部ニテハ「アーラニャーカ」ト「ウパニシャド」ヲ考究ス。儀式部ハesotericismニシテ教理部ハexotericismナリ。回教ニハ此別アリ。「コーラン」ノ表面上ノ意義ハZarト称シ深義ハbatnト称ス。故ニベダンタハ哲学的思弁ヲモッテ成リ、ミーマンサハ儀式ヲ重ズ。支那ノ礼義ニ同ジ。周礼、礼記、礼ノ如キハ儀式部ナリ。荀子ノゴトキハ礼ヲ以テ最大ノ人倫トナシ以テ国家治平ノ具トナシタリ。ミーマンサノ中ニ哲学的ノ傾アルハ其儀式ノ説明少シク論理的ナルニアリ。然レトモ礼ヲ重ス

ルヲ甚ダシク、他ヲ顧ザルガ如キハ哲学的考察ニ反スルニ至ル者アリ。イースヴラノ存在ノ如キモ必シモ之ヲ否定セザルモ、ベダ経ノ外ニ信ズベキ者ナキナリ。ジャイミニニシテハベダ経其物ノミ教権ナリ。故ニ其極無神的ニ傾ケリ。John ミルハミーマンサハ徳ノミ報償ヲ与フル者トシ、神ハ之ヲ人ニ与フル能ハズ、徳ハ既定ノ儀式ヲ修ムルコトノミニアリトナセリト云フ。Prof. Banerjeaハ其Vidran-Moda-trangainニ「造物主ハ有ルコトナシ。世界ニハ維持者モ破壊者モナシ。各自ハ己レノ作為ニテ応報ヲ得レバナリ。ベタノ作者モ作者アルコトナシ。其語ハ常住其配列ハ常住ナレバナリ。「　　」其教権的性質ハ自称セリ。其無窮ヨリ確定セラレタル以上ハ如何ニシテ其ヨリ外ノ者ニ附属スル者アルベキカ」トシミーマンサヲ解セリ。即自業自得主義ナリ。印度ノVeraha Mihiraノ如キハミーマンサヲ佛教ニ比較セリ。或ハミーマンサヲ有神論トナセルアリ。Kumarîla-Bhattaノ如キ是ナリ。Prabhâkaraハ無神論トナセリ。「ミーマンサ」ハベタ経中ノ諸神ハ之ヲ否定セザルモ、ベダ経其物ガ神位ヲ有スル者ナレバ其外ニ神的実在ヲ有スベキニ非ス。

「ミーマンサ」ハ哲学派中最保守的ナル者ナリ。故ニ其無神論モ「サンクヤ」ノ無神トハ同一ニ非ス。後世ノ「ミーマンサ」派中ニハ神ノ有ルヲ信シ、儀式ハ之ニ向テナス者ト考ヘ、儀式ヲ以テ解脱ノ法トナシタル者アリ。

ミーマンサノ学説トスベキ者ハ殆無シ。只一ハ声ノ常住ニ関シテハ一説ヲ有ス。「ミーマンサ」ハ常住論ヲ執リ、ベタ経其物ハ無始無終ナリトセリ。其理由トスル所ハ、

一、声ハ一度発スレバ他人ニ意ヲ通ジ得ル。故ニシテ声無常ナランニハ、聴者其意ヲ解スル者永続セザルベシ。原因既ニ存スル。聴者何ゾ其意ヲ解スルヲ得ン。

二、声ハ何レノ場合ニモ、同時ニ多数ノ人ニ正確ニ一様ニ認識セラルレバナリ。聴者ガ一度ニ尽ク錯誤ニ陥ルト考フベキニ非ス。故ニ人々ニ聴カル、相違ナシ。

三、各箇ノ声ハ幾度之ヲ繰返スル。数量的ニ異ナラズ。

四、声ノ殄滅ヲ予量スベキ根拠ナシ。

五、声ハ空気ノ変状ニ非ス。若シサナリトセバ、聴覚ハ知覚スベキ適当ナ対象ヲ有セザレバナリ。「ニヤ、」派カ可触トナス空気ノ変動ハ聴覚ノ感スル者ニ非ス。

六、声ノ常住ナルコトハ「ベタ」経ノ本文ニ韋楼波仙、以無窮之声、云々トアルニテ証スベシ。此文ハ他ノコトニ関スルモ言語ノ常住、従テ声ノ常住ヲ証シタル者ナリ。

トナリ。ミーマンサハ声ヲ無形ノ実体トナシ、ベタ経ヲ以テ之ヲ確証シタリトシタリ。当時ノ哲学ハ皆此説ヲ攻撃シタリ。之ヲ攻撃シタル「ニヤ、」派ノ理由ハ、

一、意志力ニ依テ生スル即成果ナリ。是レ常住ナルモノニアルベカラザル所ナリ。

二、瞬間ヲ経レバ忽知覚スベカラザルニ至ル。

三、声ニ就テナスト云フ語ヲ用フ、声ヲ作スト云フガ如シ。即所作ナリ。

四、多数ノ人ガ一度ニ知覚スルヨリ見レバ、遠近ニアル各自ノ覚能ト直接ノ関係ヲ有ス。是レ唯一ニシテ万能ナルベキ者。

五、声ハ根本的形態ト変状的形態ヲ有ス。仮令ハdadhiatraノdadhyatraニ変ズルガ如シ。

六、声ハ之ヲ生スルモノノ数ニ依テ増加セラル故ニ、ミーマンサノ声ハ単ニ発言セラレ、人ノ意志ニテ生スル者ニ非ストスルハ非ナリ。一仙ノ発言ハ其発言スル所、一ノ者ヲ増スヲ得ズ。仮令ハ一仙ノ燈光ト云フモ燈光ハ増サス。

「ミーマンサ」ハ之ヲ誉ヘテ云フ、

一、ノ答エハ之ヲ見出ス能ハズ。声顕ト声生ニテ差アルコトナリ。

二、声ハ恒久ニ存スレドモ、時アリテ之ヲ知覚セザルハ発声者ガ声ト接セザルニ依ル。

三、声ヲ作ストハ、単ニ声ヲ用ヒ或ハ発スルノ謂ナリ。

四、一個ノ声ハ同時ニ多数ニ知覚セラル。一個ノ太陽ハ同時ニ人々ノ見ル所トナルナリ。声ハ太陽ノ如ク巨大ナリ。故ニ遠近幾多ノ人、同時ニ之ヲ覚スルヲ得ト。

五、yヲ以テyニ代用シタル場合ノ如キハyノ変状ニ非ス、別物ナリ。故ニ声ノ変状シタルニ非ス。

六、数多ノ人ガ増加シ得ル者ハ声ニ非ス、喧囂ナリ。

其弱点知ルベキナリ。「ミーマンサ」ノ常住論ヲ称エテヨリ、此論印度哲学ノ一大争点トナレリ。西洋中古哲学ノ名目論実体論ノ如キナリ。声論ノ重大ナリシトキ、今日ノ有神無神、唯物、唯心ノ論ノ如シ。然レトモ「ミーマンサ」ハ、之声ノ常住ニ就キ知識的探求ニ依リタル者ニ非ス。只ベダ経ノ教権ヲ維持スルノ方便ニ過ギザリシナリ。実体論者ノ三位一体論ノ如キナリ。此論争論ノ如キハ今日ヨリ判ズレバ正邪判然タルモ、ベダ経ノ教権大ナリシ為ニ此ノ如キ論モ判断ヲ誤ラシメタルニ至レルナリ。

声論ノ弱点ハ、

一、声ハ物質ノ如キ実在ニ非ス。物質状ニ起ル一状態ナルノミ。実在ハ常住ナルモ、状態ハ無常ナリ。特ニミーマンサカ声ハ空気ノ変状ニ非ストシタルハ甚非ナリ。

二、声其物ト人ノ記憶セル声トハ別物ナリ。声ハ客観世界ノ一現象ニシテ、声ノ吾心ニアル者ハ客観ノ写像(Vorstellung)ナリ。ミーマンサカ声ナキ後ニ人ノ之ヲ解シ得ルヲ以テ、声ヲ常住トシタルハ誤ナリ。声ハ生滅スルモ、人ハ其写像ヲ有シ、之ヲ以テ理会スルナリ。

三、「ミーマンサ」派ハ、多クノ人ガ声ヲ正確ニ且一様ニ解シ得ルヲ以テ常住ノ証トナスハ非ナリ。多クノ人ハ必シクモ同一ノ声ヲ正確ニ且一様ニ認識セズ。若シ声ニシテ常住ナランニハ、古人ノ声モ之ヲ聴クコトヲ得ベキナリ。

四、「ミーマンサ」派ノ各個ノ声ハ幾分繰返スモ、数量的ニ異ナル者ニ非ストシテ常住トナスハ非ナリ。声ハ繰返ス度ニ時間的ノ差アリ。数量的ノ差ナシト云フベカラズ。強弱、高低、大小ノ差アルコトハ明ナリ。

五、一度唱導セラレタル真理ノ、幾千年ノ後ニモ消滅セザルコトハ、声ノ常住ナルコトヲ示スガ如キ観アリ。「ミーマンサ」ノ本拠ハ此ニアリ。此場合ニテモ、此永存ハ声ノ永存ニ非ス。只其声ノ出シタル真理ノ永存ノミ。声ト心理(ママ)ハ別物ナリ。

六、「ミーマンサ」ハベダ経中ニVâcha nutyâyâヲ以テ常住ノ証トナスモ、証トスルニ足ラザルナリ。且此二語モ継続ノ意ニシテ常住ノ意ニ非ルヤモ知ルベカラズ。

「ミーマンサ」ハ此常住論ヲ唱エタルヲ以テ、印度哲学中ニ論理的分析法ノ発達ヲ供シタルハ大ナリ。又、ガウタマニ先テ自ラ論理ノ初歩ヲ開カザリシニ非ス。然レトモ此ミーマンサノ論理ハベダ経解釈一方法トナシタルノミ。但ガウタマハ多少ミーマンサ派ヨリ得ル所アリシナラン。論理学者ヲTarkinヲ称スルハ、之「ミーマンサ」ノ論理ニ達シタル人ノ名称ナリシナリ。

ベダンタ派

吠檀達派ト称ス。[vedânta]

第一章　立宗

第一節　六派哲学中、ベダンタ派ハ最主要ナル者ナリ。其重要ナルハ（一）ベダ経ニ基キテ起シタル正統ノ哲学ナリ。（二）印度哲学中ニ最勢力ヲ有スル哲学思想ヲ代表ス。（三）北方佛教ト普通ノ点ヲ有ス。（四）西洋哲学近世ノ思想ニ近似セル者ヲ有ス。故ニ此派ハ重要ナリ。ベダンタ派哲学ハ漢訳書中ニハ詳細ナル者ナシ。所々ニ散見ス。韋陀論師ト称ス。近世ニ之ヲ「ベダ」派ト称スル人アルモ、非ナリ。「ベダンタ」トハVedaトantaヨリ成ル。「ベダ」トハ経ナリ、「アンタ」ハ目的ノ義ナリ即チベダ経ノ目的ナリ。

此派哲学ハBâdarâyana（波達羅耶那）ノ創ムル所ナリ。或ハVyâsa（毘耶娑）ナリトモ云フ。ヴャーサトハバーダラヤナノ称号ナルガ如シ。ヴャーサトハ固有名詞ニ非スシテ著作者ノ義ナルガ如シ。バーダラーヤナノ事蹟ハ明ナラズ。ウェーベルノ考究ニテハ、某ヴャ

ーサハSukaナル人ノ父ノ名ナリ。SukaトハＨ有名ナル学者Gaudapâdaノ師ニシテ、ガウダパーダハGovindaノ師ナリ。ゴヴヰンダーハSankarâcharyaノ師ナリ。故ニ此ヴャーサニシテバーダラヤーナナランニハ、サンカラアーチャリヤハ紀元八世紀ノ人ナレバ、ヴャーサハ四五世紀ノ人ナラン。然レトモ此ヴャーサノ誰ナルヤハ明ナラズト。且ヴャーサト称シタル人ハ数多アリ。毘耶娑問経上巻三右ニ是此仙人毘耶娑ト名ク云々トアリ。此仙人ハ四毘達ノ作者ナリト。此外ニMahâbhâratanル詩ノ作者モヴャーサト称シ、Dharmasastraノ一法典ノ作者モヴャーサナリ。又ベタ経ノ通俗解釈Prânas二十八種アリ。此作者モ皆ヴャーサト称ス。故ニ此スーカノ父ナルヴャーサハ誰ナルヤトモ、最不明瞭ナリ。且ベダンタハ紀元後ニ非ス。紀元前ニ起リタルコトニハ明ナル証蹟アリ。

第二節　「ベダンタ」派ノ起、之ハ精密ナラズ。古来「ミーマンサ」ト「ベダンタ」ヲ一派トシ只、Pûrva-及Uttaramîmansaノ名ヲ以テ之ヲ分テリ。即前後二種ノ「ミーマンサ」ナル義ナリ。故ニ「ミーマンサ」ニ次キタルハ「ベダンタ」ナラン。又其研究ノ事項ニ付キテモ、「ミーマンサ」ノ「ベダンタ」ニ先チタルヲ知ルベシ。即「ミーマンサ」ハベダノ儀式ニ就キテ考究シ、ベダンタハ其教義ニ就キテ考究セリ。ラッセン亦此コトヲ説ク。Die Pûrva-Mîmansâ ist nicht nur wegen diesen Beinamens, sondern auch wegen ihres Zwecks als eine aeltere Schule zu betrachten. ト　Deussenハ之ニ異説ヲ立テ、曰フ。ジャイミニトバーダラヤナーノ二人ハ互ニ賛成攻撃セルヨリ見レバ此二派ハ同時ニ起リタル者ナラント。Beide Mîmansâs moegen gleichzeitig nebeneinander entstanden sein, sofern Jaimini und Bâdarayana sich wechselseitig, oft zustimmend oft bekaempfend citieren. ト。之ヨリ、此二人ハ全ク時代ハ異ナリシニハ非ス。互ニ知リシナラン。然レトモ其哲学ノ起リタルニ前後アリシハ疑ウベカラズ。只其時代ヲ確定スル能ハズ。ウェーベルノ推測ニシテ正シカランニハ四五世紀ニアリシトナスベシ。然レトモウェーベルノ推測ハ信ズベカラズ。紀元前数世紀ニアルナラン。「ベダンタ」ハ「ミーマンサ」ニ次ギ、「ニヤヽ」モ亦「ミーマンサ」ニ反対シテ起レリ。故ニ「ベダンタ」ハ数論ニ少シク先ツトシテ可ナラン。而シテ数論ハ紀元前数世紀ニアリ。ラッセンハジャイミニヲ紀元前七世紀ノ始ノ人トセリ。「ベダンタ」派ノ年代ハ、他ノ関係ヨリ推セバラッセンノ説ハ是ナルニ近カラン。

第三節　「ベダンタ」派ノ経ハVedânta sûtraナリ。此経ハ又Brahma-Mîmânsâ-sûtraト称ス。此ク梵天経ト称スルハ、此経ニ梵天ノコトヲ考究セルヲ以テナリ。又Sâtirak-Sûta　又Sariraka-Mîmânsâ-sûtraＸUttara-Mimansa-Sûtraト称ス二巻アリ。第一巻(Adhyâya)ハ四章(Pâdâ)ヨリ成リ、第三巻ハ二章ヨリ成ル。文辞ハ簡古ナリ。古代ニハ富豊ナル者ナリシヲ、其要領ヲ摘ミタル者ノ残レルナラン。此経ニハ多クノ注解アリSamkara Âcharyaノ注ヲ良シトス。Sankara-Bhâshyaト称スサンカラ師ハ、西南印度ノMalabarニ生ル其時代ハ一定シ難シ。紀元七百八十八年、二世紀、五世紀、六百五十年ヨリ七百四十年ノ間、十四世紀等ノ説アリ。信ズベキハ七百八十八年ナラン。種々ノ書ヲ注ス。「ウパニシャッド」

「Bhavadgîta」等ノ注ヲナス印度最大ノ注釈家ナリ。支那ノ朱子ノ如シ。サンカラハ婆羅門教ヲ復興シテ、佛教ニ対シタリ。口碑ニ依レバ、印度ノ佛教ヲ撲滅シタルハ此人ナリト。然レトモ此ク大ナリシニハ非ス。只其注釈ニ依リテ婆羅門教ヲ興シタルハ明ナリ。此ニ依テ見レバ其龍樹、馬鳴、世襲等ニ後レタルハ明ナリ。佛教ノ滅亡ハサンカラトKumarilaノ力ナリ。或ハサンカラヲ以テ「シヴ」崇拝者ナリシトシ、或ハ其化身ナリシトシ、或ハVasudeva神ノ崇拝者ナリシトス（即婆薮天）。此等ノコトハ明ナラズ。サンカラノコトハ漢訳書ニ見エズ。玄奘三蔵ニ後レタレバナラン。因明入正理論Itetri dia Nigaga Sâstraノ著者ハ商羯羅主ノ作トアリ。主トハ sûvâminニシテ、Herrノ義ナリ。故ニ商羯羅阿闍梨トハ別人ナラン。商羯羅主ハ六世紀ノ人ニシテ陳那(Dignâga)ノ弟子ナリ。陳那ハ仏教者ニシテ世親ノ門人ナリ。故ニ六七世紀ノ人ニシテ玄奘ニ先チタル者ナリ。玄奘ノ西域記ニ「マラバール」国ノコトヲ挙ゲ、其條ニ其国ニ婆羅門ノ大学者アリシコトヲ挙グ。此学者ハサンカラ阿闍梨ナルヤ否ヤ、知ルベカラズ。

ベダンタ教ハ千八百九十年、George Thibautヲサンカラノ注ト共ニ英訳セリ。Dr. Röerハ本文ト注ヲBibliotheka Indicaニ載セ、同叢書ニProf. Banerjeaヲ其一部ヲ訳ス。Ballantyneモ其一部ヲ英訳セリ。バランチンハ此外Vedanta-Sâraナル者ヲ訳ス。即要領ナリ。Jacobナル人A Manual of Indian Pantheism, Vedantasâra. ヲ著ス。其他バルト、ウヰリアム等「ベダンタ」ノコトヲ論ズWindischmannハ千八百三十三年Sancaraヲ出版ス。BruinigハBeitrage tot de Kennis van den Vedânta(Leiden 1871)ヲ著シ、DeussenノDas System des Vedanta(Leibzig 1883)ハ哲学的ニ叙シタル者ナリ。RégnaudtハLe Systeme Vedânta ヲRevue Philosophiqueニ掲グ。和漢仏書中ニハベダンタノコトナシ。此派ノ哲学ノ独逸ニ注意ヲ起シタルハ、ショペンハウエルカ其本派ナル「ウパニシャド」ヲ好ミタルヨリナリ。サンカラモ亦「ベダンタ」ヲ注スルニ、「ウパニシャード」ヲ引用セリ。

第二章　教義

第一　序論

第一節　印度古代ノ宗教、即「ベダ」経ノ宗教ハ多神教ナリ。然レトモ其中ニテ一神ガ最上ノ地位ヲ占ムルヲ以テ、三単一神教ト(Kathenotheism)ト称セラル。後ベダ経ヲ哲学的ニ考察シ始メタルハ「ウパニシャード」ナリ。此派ハ秘密教ナリ。此ヨリ万有的思想印度ニ起ルニ至ル。ウパニシャードニ数派アリ。Chandogya upanishad六篇二章一節ニ云フ、太初之時、有物存焉、唯是一也、非二也(Ekam evâdvitîyam)、ト。是レ万有一元ノ論ナリ。三篇十四章一節ニ云、総是梵天也、是成壊且生息千梵天中者、使人深察焉、ト。梵天トハBrâhmanナリ。梵天ハ人性ヲ有スル梵天王ニ非ス。人性ヲ有セズ、万有的存在ニシテスピノザノ本体ニ比スベキ者ナリ。六篇八章七節ニ云、今也此之質精微、而為萬物之根、凡所存者、皆

寄生干此、覚真也、是即汝也(Tat tvam asi)。汝トハ人モ物モ皆梵天ナレバ、汝モ是ナリト云ヘルナリ。Brihadâranyaka Upanishad 一篇四章十節ニ云、太初之時、是梵天也、梵天誰知己、曰、我是梵天也(aham Brahma asmi)、ト。即チ是即汝也ノ他ノ方面ヨリ論ジタルナリ。ahamトハ精神ニシテ、此ニテ見レバ梵天ハ精神ナリ。此ノ如ク「ベダンタ」ハ万有神論ナリ。世界ハ即梵天ニシテ、梵天ノ外ニ世界ナク、一切万有梵天中ノ者ナリ。真ノ実在ハ梵天ノミナリ。即Atosmisumusナリ。ドイセンハ之ヲ万有神論ト称スルヲ不適当ナリトナセドモ、万有神論ニハ種々ノモノアルコトナレバ、「ベダンタ」ヲ其一種トナスハ敢テ不可ナキナリ。

第二節　「ベダンタ」ノ世界観ハ数論勝論ニ異ナリ、数論ハ自性ト真我ノ二元ヲ立ツ。此二者ハ全ク独立セル者ナリ。此両者ハ独立シテ二元ナリ。勝論ニテハ四大ノ極微ヨリ世界ノ根本ヲ立ツ。多元原子論ナリ。「ベダンタ」ハ之ニ反シテ、唯一ノ人性ニ非ル梵天ヲモッテ、世界ノ根トナス一元論ナリ。故ニ之ヲa-dvaita（非二元）ト称ス。数論ニテハ真我ノ外ニ自性アリ。勝論ニテハ四大等九実ヲ実在トス。故ニ実在論ナリ。「ベダンタ」ニテハ梵天ハ心ナリ。心外無一物万有皆悉是心ナリ。故ニ唯心論ナリ。特ニ「ベダンタ」ガ空間ニアル物自依ヲ非定スル故ニ、超越的唯心論ナリ。是レカント、ショペンハウエルト一致スル故ナリ。ショペンハウエルハペルシャノ「ウプデカット」ノ仏訳ヲ愛読シタリ。即「ベダンタ」ナリ。北方仏教ハ竜樹無着ノ其根源無元論ヨリ起リ、超越的唯心論トナリタレバ、「ベダンタ」ト一致スルニ至レリ。「ベダンタ」ニテ解脱ヲ究竟ノ目的トナシ、解脱ハ知ニ依リテ得トナスハ、他ノ他ノ印度哲学ト異ナルナシ。「ベダンタ」ガ梵天ヲ実体トナシ、現象世界ヲ無明(avidyâ)ヨリ生ストナスハ、数論ト大ニ相似タリ。数論ニテハ客観世界ハ自性ヨリ無形有形ト発達ストナス。「ベダンタ」ノ十七根(五知根、五作根、五風、覚(Budhi)、我(manas))ト。五大ハ皆五唯ヨリ発達ストナスハ数論ノ自性ノ発達ニ似タリ。又我ノ精神ヲ待チテ始メテ知ヲ得トナスハ印度哲学ニ於テ皆之ヲ見ル。数論ハ内面的機関ヲ大我、真根トナス。「ベダンタ」ニテハ此三ニ思根(chitta)ヲ加フ「ニヤヽ」ニテハ四種ノ量ヲ称フ(Pramanas)。即証量(Pratyaksha)、比量(Anumâna)、譬喩量(upamâna)、聖教量(sabda)是ナリ。数論ニテハ譬喩量ヲ除キ三種ヲ加フ。「ベダンタ」ハ四ニ二量ヲ加フ。即無体量(Aû-ûpalabhi 又 abhâra)、義准量(Athâpatti)ナリ。要スルニ、「ベダンタ」ハ印度哲学ノ代表トモ称スベキナリ。

第二　本体論

第三節　ベダンタハ梵天ヲ以テ最大ノ存在トナス。之ヲ以テ哲学ヲ組織ス。梵天ニ二種アリ。人格的ノ梵天即梵天王Brahmaト無人格的ノ梵天Brahmanヲ是レナリ。梵天ハ万有的存在ナリ。甲ハ具体的ニシテ、乙ハ抽象的ナリ。「ベダンタ」ノ梵天ハ梵天王ニハ非ス。「ベダンタ」ニテハ此二種ノ梵天ヲ混同セザル為ニ、一ヲ高等梵天Parambrahmaト称シ、一ヲ劣等梵天Aparambrahmaト称ス。劣等梵天ハ属性ヲ有ス。高等梵天ハ属性ナク、無差別無形状無規定ナリ。

劣等梵天ハ之ヲ崇拝スル者ノ直観的ニ差別、形状、規定、属性ヲ附着シタルニ出ツ。然レトモ同一ノ者ニシテ、此二者ヲ兼ヌベカラズ。梵天ヲ有附属ト見ルハ無明(aridyâ)ノ然ラシムル所ナリ。高等梵天ハ真正ノ梵天ナリ。真正梵天ハ無属性(nirgunam)、無形状(nirâkâram)、無差別(nirvisesham)、無規定(nirapâdhikam)ナリ。仮令梵天ヲ人格的ニナスモ其カ為ニ其真正ノ本体ハ変スル者ニ非ス。水晶ヲ染ムルガ如シ。透明ハ染色ノ為ニ変スル者ニ非ス。

梵天ニ二種アル如ク、学術ニモ二種アリ。高等学(paravidyâ)、劣等学(apara vidyâ)ノ二種トス。真解脱ヲ得ルノ道ハ高等学ナリ。此分類ハ形而上学ト形而下学トニ分ツト同シ。

第四節　梵天ニ就キテハ「ベダンタ」ハ種々ノ観念ヲ有ス。

一、梵天ハ或ハ実在、或ハ非実在トナス。此ハ矛盾ニ非ス。非実在トハ絶対ノ非実在ニ非ス。経験内ニテハ非実在ナリ。梵天ハ経験以外ノ最大実在ナレバ、経験内ノ言語性質ヲ以テ名状スベカラス。「ベダンタ」経一巻四章十五節ニ、非実在ハ絶対的非実在ニアラズトナリ。其サンカラアチャリア注ニ、実在ト云フ名称ハ通常名目ト形状ニ依テ分化セル者ヲ意味シ、非実在ハ未ダ分化セザル前ノ実在ヲ云フ。即梵天ハ第二ノ語意ニ依リテ非実在ナリ。即世界創造ノ前ヲ謂フナリ。梵天ヲ非実在トナスコトハ既ニ「ウパニシャード」ニアリ。Chandogya Up.三篇十九章一節ニ云フ、是レ太初ノ時ニ当リ非実在ナリト。無規定ノ実在ハ恰ト非実在ト異ナルナシ。ヘーゲルノ純粋ナル実在ト純粋ナル絶無ハ同一ナリ。(Das reine Sein und das reine Nichts is also dassalbe(Wissensch. d. Logik BdI))ト云ヒシハ、「ベダンタ」ノ梵天ノ思想ヲ説明シテ餘アリ。

二、「ベダンタ」ニテ梵天ヲ光明トシ、日月星辰ヨリ燈火ニ至ル迄皆自ラ光ヲ発スルニ非ス、梵天ノ力ヲ待チテ始メテ光アリト、ベダンタ経一巻三章二十一節ヨリ二十三節並ニ四十節ニ説ケリ。ウパニシヤド此コトヲ説ク。Mundaka Up二[ ]二[ ]十[ ]ニ云フ、太陽ハ彼処ニ輝クニ非ス。月モ星モ此等ノ電光モ輝ニ非ス。此光ハ猶此ニ劣ル。若シ梵天ニシテ輝クトキハ何物モ之ニ従テ輝ク。其光明ニヨリ一切光明ヲ得ト。此コトハKatha Up. 五章十五節ニ此コトヲ説クサンカラノ注一巻三章二十二ニ云フ。凡ソ知覚ニ得ラル、者ハ只、梵天ノ光明ニ依リテ知覚セラ。日月モ其中ニ輝クナリ。「」梵天ハ自然的ニシテ他ノ光明ヲ待チテ知覚スルニ非ス。梵天ハ一切他ノ物ヲ表現ス。然レトモ他ノ物ニ依リテ表現セラル、ニ非スト。

三、梵天ハ精気ナリ(âkâsa)。ベダンタ経一巻一章二十二節ニ精気ハ梵天ナリトアリ。同一巻三章四十一節ニ、精気ハ名目及ビ形状ト異ナル一種ノ者ヲ指シ□□カ故ニ梵天ナリト。即チ精気ニハ名目形状ナシ。梵天亦然リトナス。Chandogya Up. 一巻九章十一節ニ云フ、此世界ノ本源ハ何ナリヤ。彼答フ、精気ナリ。如何トナレバ此等一切ノ実在ハ精気ヨリ起ル。又精気ニ帰ル。精気ハ此等ヨリ大ナリ。精気ハ此等ノ静止スル所ナリト。一切ノ現象ハ精気ヨリ出テ、精気ニ帰ルトナスナリ。サンカラハ精気ハ梵天ナルコトヲ古書ニ依リテ

証セリ。精気ハ空間ナル義モ有ス。此クスレバ空論師ニ似タリト云フベシ。

四、梵天ハ一切ノ原因ナリ。「ベダンタ」経一巻一章十節ニ云フ、ベダンタノ本文ノ見解ガ一様ナルカ故ニ梵天ヲ原因ト見做スベキナリト。即チ各種ノ「ウパニシャード」皆此コトニ一致セリ。故ニ原因ナリトナスナリ。kaushîtaki up. 三章三節ニ恰モ焚火ヨリ火花ガ如何ナル方向ニモ進行スルガ如ク、自己ヨリ波那(prâna)ハ進行シ、各其所ニ向ヒ波那ヨリ諸神、諸神ヨリ世界ト、Taittirîyaka up. 二章十一節ニ其自己即梵天ヨリ精気起レリト。Chandogya七篇二十六章一節ニ総テ是レ自己ヨリ起ルト。Prasna Up. 三章三節ニ此波那ハ自己ヨリ生セリト。此ノ如ク梵天ハ万有ノ根源ナリ。

五、梵天ハ不可視ナリ。ベダンタ経一巻二章二十一節ニ云フ、不可視等ノ属性ヲ有スル者ハ梵天ナリト。サンカラハ単ニ不見トナサス、不可知的実体トナセリ。此ハウパニシャードニ基クMundaka Up. 一章一節ニ、知識ヲ高等劣等ノ二種ニ分テ論ジテ云フ。高等知識ハ不可滅的ヲ解会スルヲ云フ。其不可見不可撮無属無耳目無手足常住遍達精美ナル者ハ不死ナリ。是レ知者ノ万物ノ母ト見做ス所ナリト(同)。此ハ老荘ニ近シ。同書二篇一章一節及至四節ニ云フ、是レ真理ナリ。恰モ焚火ヨリ火花ヲ生スルガ如ク、火ニ似タルノ実在ハ千倍起リ来ル。友人ヨ、各種ノ実在ハ不可滅的ヨリ出テ復彼ニ没ス。其天上的ノ人格ハ無形状ナリ。外ニモアリ、内ニモアリ。生セラレタルニ非ス。呼吸ナク心意ナク純粋ナリ。高等ノ普及的ヨリモ高等ナリ。彼ヨリシテ呼吸、心意一切ノ覚能精気空気光明水及一切ノ支撑者タル地ハ生セズトモ。其頭ハ火ナリ。耳目ハ月日ナリ。耳目ハ四維ナリ。彼ハ実ニ万物ノ内面的自己ナリト。此譬喩ノ中ニ深奥ノ哲学思想ヲ有ス。梵天ハ唯一ノ真理即不変者ナリ。不増不滅不生不滅ナル者ハ只梵天ノミナリ。此本体実体ヨリ無数ノ現象ヲ生滅ス。現象ハ生滅無常本体ヨリ出テ、本体ニ帰入ス。本体ナル梵天ハ人格ヲ有セズ、人ノ如ク心ヲ有セズ、呼吸ヲ有セズ、萬有ノ内外ニ遍在ス。而シテ万有皆梵天ヨリ来リタル者ナリ。世界ハ梵天ニ外ナラズBrihadâranyaka Up. 三篇八章十及十一節ニ云フ、Gârgîm、不朽的ヲ知ラズシテ此世界ヲ去ル者ハ奴隷ノ如ク可憐ナリ。然レトモガールギーヨ、不朽的ヲ知リテ此世界ヲ去ル者ハ婆羅門ナリ。ガールギーヨ、梵天ハ見ルベカラザルモ見ツ、アルナリ。聞クベカラザルモ聞キツ、アルナリ。知覚スベカラザルモ知覚シツ、アルナリ。知ルベカラザルモ知リツ、アルナリト。「ベダンタ」ハ此等ノウパニシャードニ依リ梵天ヲ不可知的トナス。

六、梵天ハ全知ナリ。ベダンタ経第一巻一章五節ニウパニシャードノ中ニ思想ヲ世界ノ原因ニ附属シセムルト云フコトアリト。即チ世界ノ大因ナル梵天ハ思想ヲ有ストス。十一節ニハ全知ノ梵天ハ世界ノ原因ナリトアリ。故ニ梵天ハ全知ナリ。

Chandogya Up. 六篇二章三節ニ、是レ思惟セリトアリ。Aitaroya Âranyaka Up. 二巻四篇一章二節及Prasnâ Up. 六章三節ニモ、彼思

惟セリトアリ。Mundaka Up. 一篇一章九節ニ、梵天ヲ以テ一切ヲ感ジ一切ヲ知ルト云フコトアリ。即チ全知ナリ。サンカラモ亦「全知ノ梵天ハ一般的原因ニシテ知識ヲ有セザル自性ノ類ノ如キハ原因ニ非スト注セリ。之ニ反シテ数論ニテハ自性ヲ原因トナス。

七、梵天ハ常住不滅ナリ。ベダンタ経一巻三章十節ニ云フ、梵天ハ不死ナリ。精気ニ至ル迄一切ノ者ヲ支撑スルカ故ニト。即梵天ハ不変ナリ。Brihadâranyaka Up. 三篇八章七節及八節ニ云フ、ガールギガ然ラバ精気ハ何ニ依リ経緯ノ如ク織成セラルルカ。ヤージニャワルキヤ答フ、ガールギーヨ、ブラーハバナスハ之ヲ不死ト名ツク(Akshâra)ト。

八、梵天ハ住居ナリ。梵天ハ自存ニシテ一切万有ハ依存也。ベタンタ経三章一節二節ニ天地等ノ住居ハ梵天ナリ、是レ其自己ノ名称アルガ故ニ、又脱離セル者ノ帰スル所ノ称スルガ故ニト。Mundaka Up. 二篇二章五章ニ云フ。彼ノ中ニ天モ地モ宙モ組成セラル。心意モ亦一切ノ覚能ト共ニ然リ。只彼ノミヲ我トシテ知レリ。而シテ他語ヲ去レリ。彼ハ不朽ナル者ノ端ナリト。是レ希臘ノγνωτεξ ιαυτον ニ似タリ。

九、梵天ハ妙楽(Ânanda)ナリ。ベタンタ経一巻一章十一節ニ云フ、妙ノ楽ヨリ成立スル所ノ自己ハ最上ノ自己ナリト。Taittirîyaka Up. 二章五節ニ云フ、他ノ内面的自己ハ妙楽ヨリ成リ、此悟性ヨリ成ル自己ハ妙楽トハ異ナリト。サンサラ之ヲ注シテ云、妙ノ楽ヨリ成ル自己ハ最上ノ梵天ナリト。我人ノ最深ノ自己ハ即梵天ナリ。Mundaka Up. 二章七節ニ云フ、何人カ能ク呼吸シ来ルヤ。若シ其妙楽カ精気中即真境中ニアラザリシナラバ、如何トナレバ、只彼ノミ能ク福祉ヲ生シ得レバナリ。同書二章八節ニ云フ。彼ハ彼ノ妙楽ヨリ成ル所ノ自己ニ到達スト。同二章九節、其梵天ノ妙楽ヲ知ル者ハ勝ル、所ナシト。Brihadâranyaka Up. 三篇九章二十八節ニ云、梵天ハ知識ト妙楽ナリ、各自ノ精神ハ最深ノ内面的自己ト合一シテ始メテ妙楽ヲ得ト。而シテ、各自ノ精神ハ五皮(Pancha-kasa)ニ依リテ最大ノ精神ト遮断セラル。恰モ葱ノ幾重ノ皮ヲ有スルガ如シト。五皮トハ、第一、滋養皮(Anna-mâya)即チ食物ニテ維持セラルノ皮ニシテ粗身ナリ。第二、息皮(Prâna-maya)ハ呼吸ヨリ成ル。第三、悟皮(Mano-maya)ハ心意ヨリ成ル者ニシテ動作ノ機関ト相関係ス。各自ノ精神ハ此悟皮アルニ依リ、判断等ヲナス。第四、知皮(Vijnanâya)ハ単ニ知識ヨリ成リ、知識[　　]ス。各自ノ精神ハ始メテ知皮ニ依リテ[　　]。以上ノ三皮ハ細皮ヲナス。第五、妙楽皮(Ananda)ハ妙楽ヨリ成リ最深ナリ。始メノ四皮ハ妙楽ヲ包ム。各自精神ハ線ノ如クニシテ最深ノ部ヲ通過ス故、之ヲ線的精神(sûtraâtman)ト称ス。又息的[　](Prâinâtman)ト称ス。各自ノ精神ニシテ妙楽ヲ得ンタメニハ、最深ノ部ヲ通過シテ妙楽皮ニ到達ス。

十、梵天ハ呼吸ナリ。ベタンタ経一巻一章二十三節ニ云、同一ノ理由ニヨリテ呼吸ハ梵天ナリ(prâna)。同一巻一章二十八章ニモ、呼吸

ハ梵天ナリトアリ。同一巻三章三十九節ニモ同意ノ文アリ。梵天ノ呼吸ナルコトハ Chandogya Up. 一篇十一章四及五節ニ、然ラバ何レカ神ナリヤニ答ヘテ、呼吸ナリトアリ。Kaushîtaki Up. 三章第二節ニ云フ、余ハ呼吸ナリ、余ヲ有覚的自己トシテ生命トシテ不朽トシテ考察セヨ。生命ハ呼吸ナリ、呼吸ハ生命ナリ、不朽ハ呼吸ナリ、呼吸ハ不朽ナリ、呼吸ガ此身体中ニ存スル間ハ生命ハ慥ニ存スルナリ。呼吸ニ依リテ彼ハ不朽ヲ他世界ニ得、知識ニ依リテ真証ノ概念ヲ得。余ヲ生命及不朽トシテ考察スル者ハ、此世界ニ於テ十分ノ世命ヲ得、又天上界ニ於テ不朽及不滅ヲ得ト。以上、梵天ニ関スル概念ヲ概括スレバ、

一　実在
二　光明
三　精気
四　原因
五　不可知的
六　全知
七　常住不滅
八　住居
九　妙楽
十　呼吸

梵天

第五節

ベダンタ派ハ梵天ヲ種々ナル点ヨリ考察シテ、種々ノ観念ヲ有セリ。以上ノ十ハ之ヲ尽クセル者ニ非ス。他ノ点ヨリ考察セン。

一　世界的主義トシテ
二　精神トシテ
三　世界的及精神的主義トシテ

一　ベダンタ派ハ梵天ヲ世界的主義トナス。此中二三点ヲ分ツ。

(一) 造物主トシテ、ベダンタ経一巻一章廿三節ニ梵天ヲ材料的原因トナス。サンカラノ注ニ依レバ、梵天ハ只ニ材料原因タルノミナラズ、亦運用原因ナリ。曰ク、梵天ガ同時ニ世界ノ運用原因タルコトハ、此ヲ除キテ他ニ指導スル実在ナキ点ヨリ決論スルヲ得ベシ。土塊金片ノ如キ尋常ノ材料原因トモ、陶器及装飾トナランニハ陶工金工ノ如キ外面的運用原因ニ依ル。然レトモ材料原因タル梵天ノ外、材料原因ノ拠ルベキ他ノ運用原因ナキニ依ルナリト。此ノ如ク梵天ハ造物主ナリ。Taittirîyaka Up. 二章七節ニ云フ、太初ノ時是無有ナリ。無有ヨリ有ヲ生シ、自ラ生シル者ハ其自己ナリ。故ニ之ヲ自生ト称スト。即梵天ノ自生作用ヲ叙シタル者ナリ。Mundaka Up. 三篇一章三節ニ云フ、造工ナリ、天主ナリ、其源泉ヲ梵天中ニ有スル人ト。同一篇一章六節ニ云フ、是レ智者ノ万物ノ母ト見做ス所ナリト。此ノ如ク梵天ハ造物主ナリ。

(二) 支配者トシテ［　］経一巻二章十八節ニ云、諸天等(Devas)ニ於ケル内面的支配者ハ梵天ナリ。其属性ハ支持セラルガ故ニト。Brihadâranyaka ka Up. 三巻七章一節ニ云、其内面ノ支配者ハ内面ニ於テ此世界及他ノ世界及一切ノ実在ヲ支配スト。同三巻七章三節

ニ云、地ノ中ニ住スル者、而シテ地ト異ナル者、地ノ知ラザル者、其体ハ地ナリ。而シテ内面ニ於テ地ヲ支配ス。彼ハ汝自身ナリ。内面ニ於ケル支配者ニシテ不朽ナリト。梵天ハ不可知ナルモ冥々ノ内ニ一切万有ヲ支配ス。

(三) 世界ノ転滅者トシテベダンタ経一巻二章九節ニ云、食者ハ最上ノ自己ナリ。動ク者モ動カザル者モ其食ナリト称スレバナリト。食者トハ万有ヲ食フ者即転滅者ナリ。而シテ此ハ梵天ナリ。Kattha Up. 一篇二章二十五節ニ云、何人カ能ク彼ノ在ル所ヲ知ラン。婆羅門ト刹利(Kshattriya)ハ彼ノ食物ナリ。死其自身ハ香料ナリト。彼トハ最上ノ自己、即梵天ナリ。ベダンタ派ニテハ此ノ如ク梵天ヲ造物者トシ支配者トシ、転滅者トナス。Brahma, Vishnû, Sîva 三者ヲ兼タル如キ者ナリ。

第六節

ベダンタ派ハ一方ニ梵天ヲ世界的主義トシ、一方ニハ精神トナス。ベダンタ経一巻四章一九乃至二十二節ニ此箇人精神ノコトヲ載ス。個人ノ精神ハ死後最上ノ精神ト合一スル者トナセリ。又最上ノ精神ハ個人ノ精神トシテ存在ストナセリ。Chandogya Up. 八篇十二章三節ニ云フ、此ノ如クニシテ、其清明ナル実在ハ此身体ヨリ上昇シ最上ノ光明ニ近クヤ否ヤ、其固有ノ形状ニ依テ現ハルト。是レ最上精神ト個人精神ト同一ナル者トセルナリ。個人死セバ其精神ハ、河水ノ大海ニ帰入スルガ如クニ、最大精神ニ帰入ス。関尹子ニモ此論アリ。Mundaka Up. 三篇二章八節ニ云フ、流水ノ河水ニ没シ、其名称形状等ヲ失フカ如ク、此ノ如ク智者ハ名称ト形状ヨリ脱離シ、大人ヨリモ大ナル神霊的実在ニ到ルト。差別ヲ生スルハ名称ト形状ノ為ナリ。故ニ此二者ナキニ至ラバ、最大精神ト合一シテ無差別ナルニ至ル。是レ此最大精神ト個人精神ト之同一ナレバナリ。ショペンハウエルノPrincipium Individuationis、亦此ニ基ク「ベダンタ」派ノ名称ト形状トハ即是レナリ。個人精神ト最大精神ハ同一ナルモ全ク同一ナルニモ非ス。個人精神ニハ輪廻アリ。Bhâmatîノベダンタ経ノ注ニ云、火ヨリ生スル火花ガ火ノ性質ヲ分取スルガ故ニ、火ト全ク異ナルニ非ルガ如ク。而シテ又其場合ニ於テ火ト区別スルコトモ相互ニ区別スルコトモ出来サルカ故ニ、火ト全ク無違ナルニ非ルカ如ク。此ノ如ク個人ノ精神モ亦、梵天ノ結果ニシテ絶対的ニ梵天ト異ナルニ非ス。若シ然リトセバ、彼等ハ知識ノ性質ヲ有セザルベケレバナリ。若シ又梵天ト同一ニシテ全知ナラバ、教訓ハ彼等ニ取テ不必要トナルベケレバナリ。此ノ如ク個人精神ハ幾分カ梵天ト異ニシテ、幾分カ無異ナルナリト。

第七節

ベダンタ派ハ梵天ヲ以テ世界ノ主義トシ、之ヲ個人ノ精神トナセリ。且進ミテ梵天ヲ精神的主義トナス。ベダンタ経一巻二章一節乃至八節ニ此コトヲ載ス。梵天ハ最上ノ実在ニシテ、万有一切ノ現象ハ皆其中ニ存ス。梵天ヲ離レテ一物アルコトナシ。此ト同時ニ梵天ハ我ノ中ニアリテ小宇宙ヲナス。我精神ハ梵天ナリ。我ハ梵天ノ中ニアリテ、小宇宙ヲナス。梵天ハ我ノ中ニアリ。彼ハ大宇宙ナリ。

故ニ世界的主義ニシテ精神的主義ナリ。約翰伝十四章二十節ニ云フ、爾在我、而我在爾ト。暗合ト云フベシ。ベダンタ派ノ如キ梵天ノ観念ハ Chandogya Up. 三篇十四章三節ニ云フ。彼ハ心中ニ於ケル我精神ノ米粒ヨリ小ニ、大麦ノ粒ヨリ小ニ、[　　]ノ種ヨリ小ニ、粟若クハ粟ノ心ヨリ小ナリ。彼ハ心事ニ於ケル我精神ノ地ヨリ大ニ、宙ヨリ大ニ、天ヨリ大ニ、此等一切ノ世界ヨリ大ナリト。即梵天ハ我ニ在リテ小ナルモ、彼ニ在リテハ大ナリトス者ナリ。Katha Up. 二篇四章十二、十三節ニ云フ、拇指ノ大サナル人アリ。自己ノ中心ニ立チ、過去未来ノ主タリ。従テ恐ルヽ所ナシ。是レ即彼ナリ。母指ノ大ナル其人ハ煙ナキ光明ノ如ク、過去未来ノ主ナリ。彼ハ今日モ明日モ異ナルコトナシ。是即彼ナリト。茲ニ人ト云フハ Purusha ナリ。母指ノ大ナル人トハ即個人ノ精神ヲ指ス。此個人精神ハ即過去未来ノ主ニシテ、最大精神タリ。Ka [　　] 二 [　] 六 [　] 十七節ニ云フ、母指ヨリ大ナラザル人、即内面的自己ハ常ニ人心中ニ住スト。Svetâsvatara Up. 三章十三節ニ云フ、内面ニ住スル所ノ常ニ人心中ニ住スル所ノ拇指ヨリ大ナル人ハ心胸、思想、心意ニ依テ知覚シ得ベシ。之ヲ知ル者ハ不朽トナルト。此ノ如ク梵天ヲ大ニシテハ世界的主義トシ、小ニシテハ精神的主義トナシ非一非ニナル者ナリ。ベダンタハ一方ニテ天外ノ光明トシ、一方ニテハ心中ノ光明トナス。ベダンタ経一巻一章二十四乃至二十七節此コトヲ載ス。Chandogya Up. 三巻十三章四節ニ云、今此天上ニ輝ク所ノ光明ハ一切ヨリ高ク、如何ナル者ヨリモ高ク最高世界ナリ。之ヲ越エテ他世界アルニ非ス。此光明ハ人中ノ光明ト同一ナリト。ベダンタ派ハ又我眼球ニ於ケル人ヲ梵天トシ、日月雷ニ於ケル人ヲ梵天トナス。即梵天ヲ人影トシテ写像シ、之ヲ大ニシテハ日月雷ニアリテ存ストシ、之ヲ小トシテハ人ノ眼球中ニアリトナス。ベダンタ経一巻二章一三節ニ云フ、眼ノ中ノ人ハ梵天ナリ。其人ノ属性ト梵天ノ性質ト併合スルガ故ニト。Chandogya Up. 四 [　] 十五 [　] 一節ニ云フ。眼ノ中ニ見ユル人、其ハ自己ナリ。此ハ不朽ナリ無畏ナリ。此ハ梵天ナリト。月日等ヲ梵天トスルコトハ同書四章十一節乃至十三章ニ之ヲ載ス。其中ニ太陽中ニ見ユル人、彼ハ我ナリ。我ハ彼ナリトアリ。其次ニ月、雷ノ中ノ人ヲ挙グ。

ベダンタ派ハ梵天ト個人精神ト我心中ニ同居ストナス。ベダンタ経一篇二章十一節ニ云フ、洞中ニ入リタル二者ハ個人ノ精神ト最上ノ自己ナリ。二者ハ知識的自己ニシテ、従テ同一ノ性質ナレバナリト。然レトモ此二者ハ全ク同一ナルニモ非ス。然レトモ此二者ヲ二ニ別ツニモ非ルナリ。Katha Up. 一巻三章一節ニ云フ、二者アリ。彼等自身ノ事業ノ世界ニ於テ彼等ノ応報ヲ飲ミツツ、心中ノ洞ニ入リ最高点即心中ノ精気ニ住セリ。梵天ヲ知ル者ハ彼等ヲ陰影及光明トナスト。高等梵天ハ光明ニシテ個人精神ハ陰影ナリ。高等梵天ハ死生ノ外ニアリ。個人精神ハ無明ノ為ニ廻輪ス。此二者ハ共ニ心中ニ存ストナス。Mundaka Up. 三巻一章一節ニ云、二個ノ鳥アリ。離ルベカラザルノ朋友ニシテ、同一ノ樹ニ就ク。彼等ノ一ハ甘果ヲ食ヒ、他ハ食ハズシテ之ヲ見ルト。甘果ヲ食フトハ個人ノ精神ナリ。此二者ハ共ニ心中ニ住ス。個人ノ精神ト最上ノ精神ト全ク同一トスレバ、個人精神ハ有限ニシテ輪廻ヲ逃レザルコト解シ難ク、又全ク之ヲ異

ナリトスレバ、梵天遍在ト矛盾ス故ニ、ベダンタ派ハ此両者ハ或ハ一ナルガ如ク又二ニナルガ如ク説ク。

第八節　梵天ノ観念ハ上述ノ如シ。次ニ其存在スル証ヲ挙ケンニ、第一、梵天其自身ハ不生不滅ニシテ萬物ノ本源ナリ。「ベダンタ経二巻三章九節ニ云フ、然レトモ不生ハ実在ナリ、出来得ベカラザルヲ以テト。即梵天ニハ生滅ナシ。常住不滅ノ梵天中ニ、万ノ現象ハ生滅ス。Chandogya Up. 六巻二章二節ニ云フ、其有ル者ハ如何ニシテ其有ラザル者ヨリ生スルヲ得ルカ。否、友人ヨ、只其有ル者ハ初アリキ。只一ノミ。二ナカリキシ。Sve. Up. 六章九節ニ云フ、彼ハ原因ナリ、覚能ノ諸主ノ主ナリ。而シテ彼ニ於テハ父モナク主モナキナリト。梵天ハ他ノ者ニ生セラレズ、他ノ者ヲ生ス。要スルニ梵天ハ世界万有ノ第一原因ナリ。是レ宇宙学上ノ証明ナリ。

第二、無精神的物体ハ、自ラ己ヲ生スル能ハズ。此等ハ精神的実在ヲ待チテ初メテ生ス。瓶ノ如キモ陶工ヲ待チテ生ス。世界モ亦精神的ノ原因ヲ有ス。是レ精神的神学ノ証ナリ。

第三、梵天ノ存在ハ、個人ノ精神ガ梵天ナルコトニテ証スベシ。我ハ梵天ニ外ナラズ。何レノ人モ、己自ラノ存スルコトハ許サヾルベカラス。我在ラズトハ云フベカラズ。然ルニ我ハ即梵天ナリ。故ニ梵天ハ存ス。是レ心理学上ノ証明ナリ。

第九節　ベダンタ派ニテハ梵天ハ究畢ノ目的ナリ。

第一、ベダンタ派ハ梵天ヲ以テ冥想ノ対象トナス。若シ梵天ヲ冥想スレバ幸福ヲ得。prasña Up. 五章一乃至四節ニ云フ。Saivya Satyakâma、彼ニ問フテ曰ク、若シ人間中ノ或者ガ死スル迄「オーム」ナル単音ヲ冥想セバ、彼ハ茲ニ於テ何ヲ得ベキカ。彼答エテ曰クオ、サイヴヤ、サトヤカーマ氏ヨ、「オーム」ナル単音ハ最上ノ梵天ニシテ又劣等ノ梵天ナリ。故ニ之ヲ知ル者ハ同一ノ方法ニ依リテ、両者ノ一ニ到達スルヲ得。若シ彼ガ一元素即「ア」ヲ冥想セバ、只之ガ為ニ開発セラレ、死後速カニ地ニ達スルヲ得。梨倶讃誦(Rig-Samhita)ハ彼ヲ人類ノ世界ニ導ク。彼茲ニ於テ克己、敬神、信仰ヲ得テ、高尚トナル。若シ彼二元素即「アウ」ヲ冥想セバ、「ヤジウ」讃誦ニ依テ蘇摩世界（即月）ニ導カレ、彼蘇摩讃誦ニ於テ高尚トナリ再ビ帰ル。若シ又彼レ三元素即「アウム」ニ依リテ最上ノ精神ヲ冥想セバ、彼ハ光明ニ達シ太陽ニ達ス。蛇ガ其皮ヲ脱セル如ク、其悪ヲ免カル彼ハ「サーマ」讃誦ニ依リテ梵天世界ニ導カレ、遍在的最上精神ヲ見ルト。茲ニ最上精神トハ高等梵天也。要スルニ梵天ヲ冥想スルハ究畢ノ目的ニシテテ、幸福ヲ得ルノ道ハ此外ニナシ。

第二、梵天ハ解脱者ノ帰スル所ナリ。Mundaka Up. 二巻二章五節ニ云フ、彼ノ中ニ天モ地モ宙モ組織セラレ、心意モ一切ノ覚能ト共ニ亦然リ。只彼ヲ自己トシテ知レリ。而シテ他語ヲ棄テヨ。彼ハ不朽ノ橋ナリト。現象世界ハ世滅界ナリ。其本体ナル梵天ノミ不朽ナリ。解脱者ハ生滅ヲ脱シ不朽ニ入ルナリ。即梵天ニ帰入ス。Mundaka Up. 二巻二章八節ニ云フ、若シ彼ノ至高至深ナル者ヲ見ルトキハ、心胸ノ鎖ハ絶チ、一切ノ疑ハ解ケ、一切ノ毫ハ滅スト。Katha Up. 二巻六章十五節ニモ亦云フ、若シ一切心ノ連絡ハ地上ニ於テ絶タレ

タルトキハ、合死ハ不合死トナリ、教訓ハ茲ニ終ルト。梵天トノ合一ハ最上ナリ。Mundaka Up. 三巻二章八節ニ云、流水ノ海中ニ没シテ其名称ト形状トヲ失フガ如ク、智者ハ名称ト形状ヲ離シ、偉大ナル者ヨリ偉大ナル実在ニ至ルト。梵天ハ解脱者ノ帰入スル所ナルコト明ナリ。

第三　梵天ハ到達シ得タル全一ナリ。Chandogya Up. 七巻二五章一及二節、此コトヲ説キテ曰ク。実ニ無限ハ下ニモ上ニモ後ニモ前ニモ左ニモ右ニモアリ。無限ハ実ニ一切是ナリ。次ニ無限ノ解釈ハ即我ナリ。我ハ下ニアリ、我ハ上ニアリ。我ハ後ニ前ニ右ニ左ニアリ。我ハ総テ是ナリ。次ニ無限ノ解釈ヲ自己トナス。自己ハ下ニ上ニ前ニ後ニ右ニ左ニアリ。自己ハ総テ是ナリト。梵天ハ遍在ニシテ唯一ノ本体ナリ。各自ノ個体消滅シテ梵天ニ帰入シタル後ハ、唯一ノ無限トナリ了セン。

第三　宇宙論

第十節　ベダンタ派ガ世界ノ本体タル梵天ヲ叙述シタル以上ハ、世界ハ観念ヲ叙セザルベカラズ。此世界ハ如何ニシテ生シ、如何ニ規定セラレ、又本体ト何等ノ関係ヲ有スルカ。此等ハ宇宙ニ就キテノ考察ノ基ナリ。

ベダンタ派ノ宇宙論ハ三段ニ分カル。

造化論
因果論
因一論

是レナリ。

造化論ノ第一問題ハ、此世界ハ造化ヨリ成ルカ否カノ問題ナリ。ベダンタ派ハ造化論ヲ主張ス。何者ノ造化シタル所カ。曰ク、梵天ノ造化セル所ナリト。ベダンタ経一巻一章二節ニ云ク、梵天ハ此世界ノ成住壊ノ生スル所ナリト。梵天ノ造化ナルコトハ明ナリ。然レトモ、原因ニモ材料原因ト助成原因ノ二アリ。材料原因トハ物質其物ヲ生スルノ謂ナリ。助成原因トハ既ニ存セル材料ヲ変動スル原因ナリ。今ベタンタ派ノ梵天ヲ世界ノ原因トナスハ、此中ノ何レニアリヤヲ考フルニ、梵天ハ材料原因ニシテ又助成原因ナリ。世界ノ物ハ梵天ノ自身ヨリ生スル所ニシテ、之ヲ助成スルモ亦梵天ナリ。梵天ハ然ラバ何ノ目的ニ依リテ此造化ヲナセルカ。若シ梵天ハ目的アリテ造化ヲナセルナランニハ、其全足ト矛盾ス。目的ナシトスレバ造化ナシトセザルベカラズ。又ソノ全知ト矛盾ス。故ニ梵天ハ何ノ動機モナク、戯ニ世界ヲ造化セリトナス。梵天ガ世界ヲ造化スルニ器機ヲ要セス。蜘蛛ノ網ヲ自ラ出スカ如ク、外面ノ助力ヲ待タスシテ世界ヲ造化ス。アナキシマンデル、アナキシメネスモ亦世界ノ成住壊空ノコトヲ説キ、ストア派モ亦然リ。列子、邵康節モ然リ。邵ノ如キハ十二萬九千六百年ヲ世界ノ一年トナセリ。

第十一節「ベダンタ」ニテハ、世界ハ梵天ヨリ流出ストナス。初ニ精神アリ。精神ヨリ精気ヲ生シ、精気風ヲ生シ、風火ヲ生シ、火水ヲ生シ、水土ヲ生シ、地草木等漸次流出ス。是レ又一箇ノ分出論ナリ。Taittiruya Up. 二章一節ニ云、其自己即梵天ヨリ精気ヲ生シ、精気ヨリ風ヲ生シ、風ヨリ火ヲ生シ、火ヨリ水ヲ生シ、水ヨリ地ヲ

生シ、地ヨリ草木ヲ生シ、草木ヨリ食物ヲ生シ、食物ヨリ種子ヲ生シ、種子ヨリ人ヲ生スト。此精気トハ空間ノ謂ナリ。空間ハ勝論ニ於ケルガ如ク、一実体ナリ。而シテ単ニ空間ノ否定ニハ非スシテ、実在ナリ。Chandogya Up. 六［　］二［　］三節乃至四節ニ云フ、彼思惟スラク、我数多ナルベク発達スベシ。即水ヲ作レリ。此故ニ何レノ人モ熱ヲ感スルトキハ汗ヲ出ス。即水ハ火ヨリ生シタレバナリ。……。其水思惟スラク、吾多数ナルベク、発達スベシト。即食物ヲ作為セリ。此故ニ若シ雨フルトキハ、食物多ク生ス。人ノ食フ所ノ食物ハ水ヨリ生スレバナリト。勝論ニテハ空間ヲ九実ノ一トナス。空間ハ常住不滅ナリ。ベダンタニテハ之ニ反シテ、精気ハ梵天ヨリ生シタル物ナリ。即空間ハ生ノ始アリ。故ニベダンタ派ハ勝論派ノ空間論ヲ攻撃シタリ。故ニ此二者ノ論点ヲ比較スルノ必要アリ。

カナーダノ空間生ノ理由ハ、

第一　結果タル空間ト其原因トノ間ニ如何ナル関係アリトスベキカ。凡原因ニ三種ノ別アリ。和合因縁(samavâyi-karana)、不和合因縁(a-samavâyi-karana)、助勢原因(Nimitta-karana)、是レナリ。織物ニテ絲ハ和合因縁ナリ。絲ノ結合ハ不和合因縁ナリ。織工ハ助勢原因ナリ。和合因縁ハ単純ニシテ数多ナル実体ヨリナル。然ルニ空間ノ和合因縁ナルベキ単純ニシテ数多ナル実体ハナク、又之ガ不和合因縁タルベキ者モナシ。故ニ助勢原因モ固ヨリ存スベキ理ナシ。

第二　凡ソ生セラレルベキ者ニ就キハ、例セハ火ノ如ク、其未生ノトキ已生ノトキヲ区別シ得ベシ。然ルニ空間ニ就キテハ、此二ヲ別ツベキナシ。創造ノ前ニ空処ナシトスルコト能ハス。

第三　空間ハ遍達セリ。地水等四大トハ原体的ニ差アリ。故ニ之ニ生ノ始アリトスベカラズ。

第四　空間ハ古典ニモ不死、遍在、常住トナセリ。

カナーダハ此四種ノ理ヲ以テ空間ヲ九実ノ一トナシ、不生不滅トナセリ。

サンカラアーチャリアハ空間ハ生ノ始アリトス。思ヘラク、凡ソ生シタル者ハ瓶ノ如ク分解シ得ベシ。生シタルコトナキ者ハ之ヲ分解スベカラズ。精神ノゴトキハ生シタル者ニ非ス。故ニ分解セズ。然ルニ空間ハ分解シ得ベシ。故ニ知ル、空間ハ生シタル者ナリト。然レトモ此論タル誤レリ。空間ハ分解シ得ベキ者ニ非ス。

サンカラアーチャリアハカナーダヲ駁セリ。

第一　原因ハ必ツ単純ニテ数多ナルヲ要セス。糸及其結果ハ単純ナルヲ要セス。其助勢原因ハ譬エバ織器ノ如ク同様ナリ。若シ単ニ和合因縁ノミニ就キテ云フモ、必ズシモ単純ナルヲ要セス。羊毛モ牛毛ト似テ単純ナル糸ヲ作リ得ベシ。若シ又原因「　」トスレバ、此ハ自明ニシテ答言ヲ要セズ。原因ハ数多ナルヲ要セス。カナーダノ原子ノ如キハ、各自ラ動ク者ニシテ数多ナラザルモ可ナリ。若シ一個ノ実体種々ノ状態ニアレバ、是レ前者ノ結果ナリ。故ニ原因ハ数多ノ要素ヨリ成ルヲ要セズ。実体ハ単純ナルアリ。数多ナルコトモアリ。譬エバ地ト種子トガ植物トナルハ、数多ナルナリ。乳ノ酸乳トナルハ単純ナリ。古典ニヨルニ、数多ナル世界ハ空間等ト共ニ単純ナル梵天ヨリ生ストアリ。

第二　空間ニ就テ、創造ノ前後ヲ別ツベカラズト云フハ非ナリ。今ハ空間ハ物体ニテ満テルモ、此等ハ創造ノ前ニハナカリシ者ニテ、既ニ此別アリ。古典ニモ梵天ヲ以テ無空間トナセリ(Anakâśam)。

第三　空間ハ地等ト根本的ノ差別ヲ有スルノ故ヲ以テ、生ノ始ナリトスルハ非ス。凡ソ古典ト矛盾スル場合ニテハ、生ノ始ナシトスルハ非ナリ。何トナレバ生シ来ラズトハ、結論ヨリ生スベキモノナリ。空間ハ無常ノ性質ヲ生スルヲ以テ、生ノ始アリ。故ニ空間ハ瓶ト同シク、生ノ始アリトナスベシ。且空間ノ遍達ナルコトハ証明アルコトニ非ス。

第四　古典ニ空間ヲ不死トナセルハ、単ニ比較的ニ云ヘルノミ。梵天ニ関シテ、彼ハ空間ノ如ク常住ナリ遍在ナリト云フハ比喩ノミ。恰モ太陽ハ矢ノ如ク光ルト云フノ類ノミ。

此如クサンカラハ煩瑣的考察ニ富ムモ、其考察古典ニノミ依ルヲ以テ其論ニ弊ナシトセズ。

ベダンタ派ニテハ空間ハ精神ヨリ生シタリトシ、地水等四大モ同シク次第ニ生シタリトナス。然ラバ其生ハ如何ニシテ生シタリヤト云フニ、ベダンタ派ニテハ何レノ行動モ知識ナクンバ能ハズトハ其原則ナレバ、四大ハ知識ナキ者ナルニ、此等ガ行動スルハ梵天自ラ四大ニ変化シテ現出シタルノミ。故ニ四大ハ行動ス。梵天ハ一切行動ノ原因ナリ。Brihad Up. 三篇七章三節ニ云、彼ハ知ノ中ニ住シテ知ト異ナリ。知ハ彼ヲ知ラザレトモ其体ハ即知ナリ。彼ハ知ヲ内面ヨリ観察ス。彼ハ汝ノ精神ナリ。汝ヲ内面ニ於ケル指導者ナリ、彼ニ於ケル不朽者ナリト。万有ハ無精神ナルモ梵天ヲ行動セシム。ベダンタニテハ世界ハ分出ヨリ成ルトス。梵天、精気、風、火、水、地、草木ハ漸次ニ分出シタルナリ。易繫辞ノ大柱両儀四爻八卦ニ似タリ。然レトモ世界ニハ成住壊空アリテ、無限ニ之ヲ復起ス。

此ノ如ク劫ノ終ニ地ハ水トナリ、水ハ火トナリ、火ハ風トナラン。而シテ風ハ精気ニ帰シ、梵天ニナリ了ス。

第十二節　ベダンタ派ノ因果論　世界ハ梵天ニ外ナラズ。然レトモ梵天ハ直ニ世界ニ同シカラズ。梵天ト世界ハ因果ノ関係ヲ有スルナリ。然レトモ此二者ハ帰スル所一ナリ。因果ハ単ニ現象ヲ規定スベキ者ナルニ、此学派ニテハ本体ト現象ノ間ニ因果ノ関係アリトナセリ。然レトモ因果ト結果ハ畢竟同一ナルヲ以テ、梵天ト世界ハ帰スル所一ナリシ論セリ。

(一) 若シ因存スレバ果ヲ知覚シ得ベシ。因ナケレバ果ヲ覚ユベカラズ。例エバ土ハ瓶ニ存シ、糸ハ織物ニ存ス。土ナクンバ瓶ナシ。糸ナクンバ織物ナキナリ。此因アルヲ以テ、此果ヲ知リ得ルナリ。牛ヲ以テ馬ヲ知リ得ザルハ、其間ニ因果ノ関係ナキヲ以テナリ。故ニ此二「　」

(二) 果ハ因ノ中ニ存ス。世界現セサル前ニ世界ハ本体中ニアリ。沙ハ油ヲ生セス。而シテ油ハ沙ノ中ニ存セズ。是レ因果ノ関係ナキヲ以テナリ。果因ノ中ニ存ストスレバ、果ハ因ニ同一ナリトモ、果トナリテ因ノ中ヨリ出デタル後ニモ同一ナリ。故ニ世界ハ之梵天ノ中ニアリシナリ。

（三）因ハ始メハ非実在ナリ。此非実在トハ只性質ノ異ナルヲ指スノミ。果ハ始ハ展開シテ名状形状ヲ有スルモ、之ハ此等名状ヲ有セズ、因ト同一ノ状態ニアリシナリ。即因果之一ナルモ、其開発ニ差ヲ生スルナリ。

（四）酸乳ハ只乳ヨリ出デテ、瓶ヨリ出デズ。瓶ハ土ヨリナリ、乳ヨリ成ラス。若シ因果中ニ存セストスレバ、此ノ如キコトアルベキコトナシ。即チ一切ノ果ハ何レノ因ヨリモ生スルコトヲ得ン。何レノ因モ一定ノ力ヲ有シ、此力ニ依リテ一定ノ果ヲ生シ、他ノ果ヲ生セズ。故ニ因果ハ全ク異ナル者ニ非ス。

（五）果若シ開発ノ前ニナクンバ、開発トハ即作者ナクシテ生スルコトナラン。然レトモ何レノ作用モ作者ナカルベカラズ。瓶ノ成ルニハ作者ハ瓶ニ非ス、又陶工ニ非ス。土ナリ。何レノ作用モ、非実在ナル果ヲ実在トナスコトヲ得ス。故ニ果ハ皆因ノ中ニアリテ、因自ラ果ヲ生スルナリ。

（六）果因中ニ存スルガ故ニ、果ハ因ト同ジク原動者ヲ要スルガ如キモ然ラズ。原動者ノ動作ハ因果ノ形状ニ［　］シ、果ノ形状ハ因中ニ存スルコトヲ確実ニスルニアルノミ。而シテ原動者ハ因ノ外ニアラズ。因即原動者ニシテ、自ラノ作用ニテ果ト開発スルナリ。

［（七）］　因果同一ナルコトハ生滅者ノミニ限ルトスルハ非ナリ。何トナレバ乳ハ人ノ眼前ニテ酸乳トナリ、種子ハ植物トナル。是レ皆因中分子ノ積集ヨリ現状ヲ開発スルニ過キス。滅スルモ、亦分子ノ分散シテ非現状トナルノミ。虚無実有トナリ、実有虚無トナルニ非ス。此クスレバ少年ト老年ハ全ク別ナルカ如キモ、是レ変形ニ過キス。

（八）因果中ニ有セサレバ、原動者ハ客位ナクシテ作用ヲナスガ如キモ然ラズ。客位ハ因中ニ存スルニモ非ス。果ハ因ハ自ラ起過シテ延及スルニモ非ス。

ベダンタハ此クノ如ク、因果之一ナリトス。果ハ其開発ノ前ニ因中ニ存ストナス。即因中有果論ナリ。数論ト同ジ。而シテ勝論ノ因中無果論ニ反対ス。此ヨリ梵天世界ノ同一ヲ証シタリ。

第十三節　世界ハ迷誤(Mâya)ナリ。真ナル者ハ梵天ノミナリ。然ラバ迷誤ノ生スルハ無明(Âvidyâ)ナリ。何ノ為ニ迷誤ハ生スルカト云ヘバ、過去ノ業ヲ消却セン為ナリ。此ノ如ク個人ノ精神ハ無限ニ輪廻ス。此輪廻死生ノ大海(Samsâra)ヲナス。世界ノ錯雑セルハ畢竟二要素ニ分チテ考案シ得ベシ。原授者(Bhoktar)、被授者(Bhogyam)、是レナリ。原受者ハ個人ノ精神ニシテ、苦痛ヲ受クル者ナリ。非受者ハ前世ノ応報ニシテ、個人精神ノ受クベキ苦痛ナリ。世界ハ此二者ヨリノミ成ル。吾人ノ経験的ノ立脚地ニアル以上ハ、此二者ハ世界ヲナスモ、形而上ヨリ観スレバ此二者ハ非真実ニシテ世界ハ梵天ト一ナルコトヲ知ルベシ。Chandogya　六［　］四［　］八乃至十六節ニ万有一如ノ説アリ。[tat tvam asi]ノ語、此間ニ多シ。即チ梵天ト個人ノ同一ヲ論ジタルナリ。Brihadâ. Up. 四巻四章十九節云、是唯心意ニ依リテノミ知覚スルヲ得、其中ニ少シノ数雑モナシ。其中ニ雑ヲ知覚スル者ハ死ヨリ死ニ行クト。悟者ハ唯一ノ梵天ノ外、雑世界ヲ知リ得ベカラズ。原受者ハ被受者ノ梵天以外ニ世界トナリテ、成立セルハ迷誤ナリ。譬フレバ土塊ノ如シ。其変状ハ土

塊ニ非ス。只実語上ノ虚妄ナリ。世界ニアリテモ梵天ノミ真実ナリ。吾心モ梵天ナリ。是ハ自証的ノ真理ナリ。個体的精神アリトスルハ謬見ノミ。縄ヲ以テ蛇トナスノ類ナリ。精神ハ個体的ニ異ナラズトスレバ、個体精神ヨリ成レル世界観ハ破レ、唯一ノミ真トナリ、数多ハ虚妄ナルコトヲ明ナルニ至ラン。要スルニ唯一ノミ自在ニテ、数多ハ無明ヨリ生ス。然レトモ此主義ハ啻ニ知覚等ノ経験的行為ヲ絶滅スルノミニ非スシテ、又ベタ経ノ教旨ヲ滅スル者ナリ。只進テ解脱論ノ教則ヲモ滅セントス。何トナレバ、解脱論ハ師ト弟子トノ両者アルヲ要ス。此虚忘ナル立脚地ニ立テル唯一ニ関スル教ハ、真ノ教ナルベカラズ。一切経験的行為ハ、真相ニ於ケル知識ヲ得ル迄ハ真実ナリトス。此点ニテハ、一切夢中ノ現象ハ醒ノ後迄ハ真実ナルニ同ジ。経験的行為ハ固ヨリ真ニ非ルモ、其真ニ非ルヲ悟ル迄ハ真実ナリ。各自ハ其元梵天ト同体ナリシコトヲ忘レ、経験的我ヲ以テ自己及其性質ト認ム。是レ己ガ梵天ト同一ナルコトヲ知ル迄ハ真実ナリトナサヾルベカラズ。一旦梵天ト同一ナルコトヲ知ルヤ、此ハ虚妄トナルナリ。恰モ夢ノ醒メタルガ如シ。蛇ト見誤リタル縄ハ人ヲ咀フコトナシ。然レトモ夢中ニ蛇ナル因ヲ知覚スルト同ジク、其果タル負傷ヲ知覚スル者ナリ。只其果ハ真実ニ非ス。非真実ノ教訓ニ依リテハ、真実ノ梵天ヲ知ルベカラズ。結果ハ真実ニ非ルモ、其知覚ハ真実ナリ。醒覚ノ後ニ果ハ非実ナルモ、其夢中ニテ知覚シタルコトハ実在ナリ。其対象ハ非実ナリシモ、知覚ハ確実ナリシナリ。故ニ夢中ノ知覚ハ之ヲ否定スベカラズ。夢ハ非実ナルモ、時ニハ実事ノ予報セラル、コトアリ。Chandogya Up. 五篇二章九節、Aitarya Up. 三篇二巻四章十七節云、夢ノ中ニ黒歯ヲ有スル黒人ヲ見ルトキハ、死ノ前兆ナリ。占夢家ハ夢ニ依リテ吉凶ヲ予言ススルハ、人ノ知ル所ナリ。此ニ依リテ見レバ、非真理ニヨリテ真理ヲ知ルコトアリ。恰モ発音ナラサル文字ニ依リテ発音ヲ知ルニ同ジ。故ニ現象世界ハ真実ナラザルモ、精神本体ハ実在ニシテ異状ヲ起スベキ者ニアラズ。精神ニ与ヘタル教訓ハ現象世界滅スルモ滅スルコトナシト。唯一ノ知識ハ最終ノ知識ナリ。唯一ハ一切ヲ含有シテ餘ス所ナケレバナリ。此ノ如キ知識ハ古典ニモ其例アリ。之ニ到達シ得ルコト疑フベカラズ。此知識ハ無明ヲ除却スルヲ以テ無用ニ非ス。此知識ハ虚偽的ニ非ス。何トナレバ、他ノ知識ハ此ノ如ク無明ヲ除却スル能ハザレバナリ。此唯一ノ知識ハ一切変化ヲ離レタル最上実在即梵天ナリ。解脱ハ変化ノ知識ニテ得ラル、者ニ非ス。梵天ニ依テノミ得ラル。梵天ハ公開教ニテハ人形ナルモ、内秘的ニハ無属性ノ最上実在ナリ。

第一四節　宇宙論ノ終ニ之ニ関スル難点ヲ挙ケン。

（一）因果論ニ就テ梵天ト世界ハ根本的差異ヲ有ス。梵天ハ精神的ニシテ純粋ナリ。世界ハ非精神不純粋ナリ。此根本的ニ異ナル者ノ間ニ、因果ノ関係ハ有シ得ベキヤ。之ニ答フルニ、経験ニ徴スルニ精神的ノ人類ヨリ毛爪ノ如キ非精神的ノ者ヲ生シ、又塵ノ如キ非精神ヨリ虫ノ如キ者ヲ生ス。此等ニテハ形状ノ差ヲ有スルモ、共ニ地ヨリ生スル者ナリ。梵天モ世界モ普通ノ点アリ。即共ニ存在ナリ。故ニ此二者ハ根本的ニ異ナラズ。若シ二者全ク相対合セズトスレバ、因カ幾分カ自ラ延長スルニ非ンバ、因果ノ関係ヲ生スル能ハズ。若

シ又二者ノ差異全体ニ渉ルトスレバ、梵天ヲナセル実体ハ自然ヲナセル実体ニシテ、普通ナラザルベカラズ。若シ又此自然界ニ幾分カ精神ノ欠クルトスレバ、精神ヨリ非精神ヲ生スルモ怪ムニ足ラズ。古典ニ依ルモ創造ノ前ニ絶無ナリ。故ヲ以テ梵天ハ結果ナリト思惟スベカラズ。世界ハ創造ノトキニアリシナリ。即原因的自己ノ中ニ存シタルナリ。

(二) 若シ世界ガ梵天ヨリ生シ、梵天ニ復帰スルナランニハ、世界ハ其物資的分支的分割的非精神的不浄的ノ性質ニ依リテ、梵天ヲ不浄ニスルナラン。故ニ梵天ヲ世界因トスルハ非ナリト。

答云、経験ニ徴スルニ、果ノ因ニ復ルニ当リ、因ハ其果ノ為ニ変セラル、コトナシ。瓶ヲ土ニ帰スルモ、果ハ其因ヲ変ズルコトナシ。果因ニ帰スルニ当リ、若シ果ノ性質ヲ有スレバ、真ノ陥没ニ非ス。真ノ復帰ハ此ノ如キ者ニ非ス。果因同一論ヨリ見ルモ、果ハ因ニ同シキモ、因ハ必シモ果ニ同シカラズ。世界梵天ヲ汚サンニハ、常ニ之ヲ汚サヾルベカラズ。必ズシモ復帰ノトキヲ待タズ。恰モ幻術者ノ幻術ノ為ニ目ヲ動サル、コトナキガ如シ。梵天モ亦生死大海ノ為ニ動サル、コトナシ。

(三) 世界既ニ無差別ノ梵天ニ帰シタル後、原授者ト被授者ノ別ヲ生スト主張スト雖トモ、然レトモ此ノ如キ新規ノ分別ハ出来ベカラズ。

答云、熟眠若クハ冥想ノ間ハ精神ハ其根本的唯一ニ帰入スルモ、覚醒ノ後ハ無明ヲ脱セザル為ニ、個体的存在ヲナスニ至ル。世界ノ梵天ニ帰スルモ、熟睡ノ如シ未ダ無明ヲ失ハズ。故ニ無明ニ規定セラル、分支ハ依然トシテ存シ、再ヒ世界ノ開発ヲナスニ至ルナリ。

(四) 世界梵天ニ帰入シ又開発ストスレバ、一旦解脱シタル者モ再ビ無明ニ陥ラン。

答云、解脱者ハ完全ナル知識ニ依リテ、個体的存在ヲ規定スベキ虚偽知識ヲ脱却シタル者ナレバ、此ノ如キ憂ナシ。

唯一ト数多ニ関スル難点。

梵天開発シテ数多トナルニハ、其全部世界トナルカ一部世界トナルカ。全部世界トナルトスレバ、梵天ノ本体ハ為ニ滅セザルベカラズ。然ラバ世界ノ外ニ無一物ナリ。又一部世界トナレリトスレバ、梵天ハ分割セラレタル者ナリ。此ハ古典ニ反ス。梵天分割セラル、トスレバ、常住ニ非ス。空間ニ規定セラル、者ハ、時間ニモ規定セラルバナリ。梵天ハ全部世界トナル者ニ非ス。Riga-Veda讃賞十篇十一章三節云フ、彼ノ一部分ハ一切ノ実在リ、三部分ハ天上ニ於ケル不死ナリト。古典ニ熟睡ヲモッテ梵天ニ陥没ストナスハ、開発セル梵天ノ謂ニ非ス。開発シタル梵天ハ熟睡ヲ待チテ陥没スル者ニ非ス。梵天ハ知覚ノ[　　]モ開発[　　]。

然レトモ梵天ガ一部ノミ世界トナレルニ非ス。梵天ハ分割スベカラス。此ハ古典ニ明ナリ。梵天ハ全部世界トナレルニモ非ス。一部世界トナレルニモ非ス。現象世界ノ数多ハ無明ノタメニ起ルナリ。無明ガ分解スベシトナスモ、其為ニ本体ノ分割スルニ非ス。梵天ハ分割セズ。眼病者二個ノ月ヲ見ルモ、月ハ真ニ二個アルニ非ス。

梵天世界ヲ創造スルニ何ノ勢力ヲ有スルトスレバ、其誰一ト撞着セサルヤ。数多ノ境界ハ無明ヨリ生スルナリ。[　　]

三章十九［　］ニ云、手ナケレトモ取リ、足ナケレトモ走リ、眼ナケレトモ視、耳ナケレトモ［　］キ、知ラルベキ者ハ知ル。然レトモ誰モ彼ヲ知ルコトナシト。梵天ハ此ノ如ク自足ニシテ、幾何ノ器ヲ要セザルナリ。梵天ハ数多ニ非ス。

第三　倫理上ノ難点　神ハ造化主ニ非ルベシ。若シ然リトスレバ神ハ不正義、不慈悲ナリト云ハサルベカラズ。種々ナル害悪ノ創作者ナリト云ハザルベカラズ。

造化ハ新ニ一切ヲ造化スルノ謂ニ非ス。其人ノ前世ニ於ケル作法如何ニ従テ、之ヲ作ルノ謂ナリ。即チ前世ノ作法ヲ現世ニ償ハシムルナリ。故ニ造化ハ助勢的ナリ。身体ハ植物ノ如ク発生シ発達シ衰滅ス。然レトモ全ク滅尽シテ少シモ跡ヲ止メサルニ非スシテ、種子ノ存スルアリ。人ニアリテハ善悪ノ作法ハ即種子ナリ。前世ノ善悪ニ従ヒ、之ニ対スル新生ヲ得、幸、不幸モ之ニ規定セラル。人類ハ此ノ如ク無始ヨリ輪廻ストナス。故ニ造物ハ新造化ニ非ルナリ。

若シ神、造化主ナリトスレバ、各自ノ善悪ハ如何ニシテ生スルカ。答ヘテ云フ、梵天ハ自由ナリ、如何ナルコトヲモナスヲ得。梵天ニハ禁戒モナク、命令モナシ。従テ善悪ナシ。善悪アルハ梵天ニ非ス、各自精神ノミ然リ。然ラバ各自ノ精神ハ何ニ依リテ生ス。曰ク、無明ヨリ生ス故ニ、一旦得スルトキハ各自精神ハ梵天ニ帰入シテ一切平等トナル。

第四　心理論

第十五節　精神ハ知識的ナリ。勝論派ノ精神トハ大ニ異ナリ。精神ハ之発生シタル者ニ非ス、最上不変ノ梵天ガ各自ノ精神ト発現セルノミ。最上不変ノ梵天ハ知識的ナリ。故ニ各自精神ハ知識的ナリ。然レトモ知覚器関ナクンハアラズ。此等ハ精神カ特殊ノ印象ヲ得ル門ナリ。精神即梵天ナル故ニ之生滅ナシ、生滅ハ身体ニ関スルコトノミ。精神ノ所謂生滅ハ真ノ生滅ニ非ス。生トハ身体ト合スル謂ニシテ、死トハ之ト離ルヽノ謂ナリ。故ニ精神ハ物質ノ生滅ニ伴ハザルヲ知ル。然ラバ精神ハ梵天ヨリ生スルハ、如何之ヲ証スルニ、第一、Mun［　］一篇一［　］三［　］ニ、若シ梵天ヲ知レバ一切ヲ知ルヲ得トアリ。即梵天以外ニ実在ナシ。

第二、梵天ト精神トハ根本的ニ異ナリ、梵天ハ一切ノ災難即生滅トシ、然ルニ精神ニハ之レ有リ。第三、世界ニアル分割的ノ者ハ変状的ナリ。精神ハ善悪ヲナシ苦楽ヲ感ジ、各個ノ自体ニテ同ジカラズ。分割的ナリ。第四、古典ニ精神ハ火花ノ火ヨリ生スルカ如ク、梵天ヨリ生ストアリ。

第四点ニ答フ。第一、［　　］。

第二、精神梵天ハ根本的ニ異ナルトスルハ規定ニ関シテノミナリ。無明ヲ脱セル精神ニハ輪廻ナシ。第三、精神自ラ分割的ナルニ非ス。S［　　］六章十一節、彼ハ唯一ノ神ナリ。一切ノ実在中ニ潜伏シ、一切ニ遍達シ、一切ノ実在中ニ於ケル自己ナリ云々ト。精神ノ数多ナル表面ニ止ル覚等ニ依テ規定セラル、ハ、空間ノ樽等ニ規限セラル、ニ同ジ。古典ニ精神ノ生滅ヲ云フハ、単ニ規定ノ生滅ヲ云フノミ。第四、多クノ古典ニハ精神ノ生スルコトヲ説カズ。此ノ如ク精神ハ梵天ニシテ不生不滅ナリ。所謂精神ノ生滅ハ其規定

ノ生滅ノミ。

第十六節　精神ト梵天ノ関係ハ二様ニ説明ス。公開教ニテハ一部ト全部ノ関係トナシ、秘密教ニテハ同一トナス。一部ト全部ノ関係トナスハ真意ニ非ス。真ニハ一切万有ハ梵天自ラナリ。梵天ノ外ニ精神ナシ。精神ハ梵天ノ一部ニモ非ス、変状ニモ非ス。異物ニモ非ス、全ク同一ナリ。譬ヘハ一個ノ太陽万水各其影ヲ映スカ如シ。数多ノ太陽アルニ非ス。人或ハ云ハン、若シ精神梵天ノ一部ナレバ、梵天ハ精神ノ苦痛ヲ感セサルヘカラズ。自体ノ一部苦メハ、自体全体ハ之ヲ感スルカ如クナラン。梵天ノ苦痛ハ各自ノ精神ヨリ大ナラザルベカラズ。若シ斯ノ如クナランニハ、吾人ハ梵天タランヨリハ各自精神タラント。此ハ大誤ナリ。各自精神ハ無明ノタメニ身体ニ自己アリトス。苦痛ハ此迷ノ為ニ生ス。梵天ニハ無明ナシ、故ニ苦痛ナシ。吾人ノ苦痛ハ幻影ノミ。此幻影ハ身体ト己ヲ別タサルヨリ生ス。自体等ノ規定ハ、無明カ名称ト形状ヲ生シタルヨリ起ルナリ。要スルニ苦痛ハ自己以外ニ延久及ストナス虚偽的想像ナリ。子孫朋友ノ死ノ為ニ自ラ苦痛ヲ感スルハ、此等死者ノ己ニ属ストナスカ為ナリ。若シ万有知識ニ依リ身体ハ己ニ非ルヲ知ラバ、迷ヲ脱シテ身体ノ苦痛ナシ。太陽ノ光指ヲ照ストキ、指直ケレバ直ク、曲ナレバ曲ナリ。然レトモ太陽ノ光ニハ曲直ナシ。樽ヲ動カスニ其樽中ノ空間動クカ如キモ、空間ハ不動ナリ。太陽ノ水上ノ影動クモ太陽ハ動カス。個人精神苦痛ヲ感スルモ梵天ハ之ヲ感セス。故ニ個人精神ノ迷誤ヲ脱却シテ、吾即梵天ナルヲ知ラシムルニハ[tat tvam asi]ニ若カス。然レトモ一切実在中唯一精神アリトスレバ、命令ト禁戒ハ如何ニシテ出来得ルカトノ問アラン。精神自体ト結合セル以上ハ、即此身体ヲ我トナス以上ハ、命令禁戒ナクンバアラズ。此二者ハ無識ニ基キ、我ト非我ヲ区別シタル者ナリ。万有的知識ヲ有スル者ニ対シテハ何ノ用モナシ。此境ニアル者ハ最高ニシテ命令禁戒ヲ要セス。義務ト云フカ如キハ迷誤ナリ。万有知識ヲ得タル者モ身体ヲ非セサルニ非ス。然レトモ此人ハ既ニ身体ノ迷誤タルヲ知ル。識者ニハ義務ハナキモ、如何ナルコトヲモナシ得ベシトスルニ非ス。如何ナルコトヲモナサシムルハ迷誤ナリ。然ルニ識者ハ既ニ此ノ如キ迷ヲ有セス。然レトモ又尚他ノ類ナキニ非ス。若シ精神唯一ナラバ、各自ノ応報ハ如何ニシテ出来得ベキカ。各自精神ハ死後一体ニ帰シ後、新存在ヲナスニ当リ、復多体ヲナストキハ、各自ノ作法ト各自ノ応報トハ混スベキニ非ルベシ。此疑ニ答フ云フ。第一、精神ハ梵天ト一体ナル故遍在ナリ。然レトモ茲ニ遍在ト云フハ、原受者タル精神カ如何ナル所ニモ到達シテ一切ノ身体ト結合セルヲ云フニ非ス。各自精神ハ規定ヲ有セザル者ナシ(Upâdhi)。規定ハ如何ナル所ニモ到達セル者ニ非ス。故ニ各自精神モ同ジク遍達ニハ非ス。故ニ作法ト応報ト混スルコトナシ。第二、各自精神ハ最上精神ヨリ発現セル浮象ニ過キス。譬フレバ水中ノ太陽ノ影ノ如シ。其一影ハ動揺スルモ、其他共ニ動クニ非ス。此ノ如ク一個ノ精神ト作法ト応報トハ、他ノ精神ニ関係ヲ及ボス者ニ非ス。浮象モ輪廻モ作法ト応報モ無明ニ基ク。無明ヲ除ケバ、自ラハ梵天ト一体ナルコトヲ知ルニ至ラン。茲ニ至リ作法ト応報ハ無意義トナリ了セン。此ニ答中、規定ニ依リテ説明

シ、後者ハ無明ヲ以テセリ。規定ト無明ノ関係ハ如何無明ハ吾人過去ノ罪業ニ依リテ存ス。然レトモ無明ノ元ハ有識ニシテ後ニ無明トナリタルニ非ス。無始ヨリ無明ニシテ、未ダ有識ノ域ニ達セサルナリ。此点ニテハ耶蘇教ノ先天罪業論(Erbsunde)ト似テ同ジカラズ。無明ハ廻輪ヨリ起ルニ非ス。輪廻ハ却テ無明ヨリ生ス。世界ハ各個ノ精神ハ無明ノ為ニ生ス。故ニ世界、各個ノ精神ハ積極的実在ナルガ如クニシテ其実ハ消極的非実在ナリ。無明ノ結果ニシテ幻影ニ過キス。此ノ如キ非実在ナル世界及各自精神ハ無明ノ規定ニ依リテ生スル所ニ係ル。只規定ニ依リ、始メテ梵天ヲ人性的トシ世界トシ各自精神トナシタルニ過ギス。此等一切ハ規定ニ基キ、規定ハ無明ニ基ク。無明ハ即規定ノ原因ナリ。此ノ如ク梵天ヨリ規定ニヨリテ此等ヲ生スルモ梵天ハ此カ為ニ変セラル、者ニ非ス。水晶ヲ紅色ニ染ムルモ変更セラル、ナキカ如シ。

第十七節　精神ト身体トノ関係　精神ハ十分ニ延長ナキ者トハナサズ。勝論派ト同ジク精神ヲ極大トス。之ニ反スル説ニ二種アリ。一ハ精神ヲ極微トナシ、一ハJaina派ノ説ニシテ精神ヲ身体大トナリトス。各自精神ハ最上梵天ニ異ナラズ。故ニ精神ハ梵天ト同ジク遍達ナラザルベカラズ。Brehadâranyaka Up. 四篇四章二十二［　］ニ云ク、彼ハ知識ヨリ成立スル。其大ナル未生ノ自己ニシテ心胸ノ中ニ於ケル精神タル「パナ」ニ囲繞セラルト。若シ精神極微ナランニハ、全身ノ感覚ヲ有セサルベシ。只触覚ト連絡アリト云フコトハ十分ノ解釈ナラズ。足ニ痛アルハ触覚一般ト連絡スルモ全身ニハ之ヲ感セス。若シ精神ノ知識性全身ニ到達ストスレバ、微トナスベカラス。知識性ノ精神ニオケルハ、性質ノ物質ニ於ケルガ如キ者ニ非ス。熱光ノ火ノ本質ナルカ如ク、知識性ハ精神ノ本質ナリ。然レトモ一方ニ精神ヲ身体大ナリトスルモ非ナリ。身体大ナランニハ有限ナリ。一切有限ナル者ハ必ス無常ナリ。且身体ノ大ハ一定セズ。人類ノ精神応報ノ為ニ象ニ入レバ、象身ノ大ナル為ニ之ヲ充タス能ハサルベシ。又蟻ニ入レバ、之ニ入ル能ハサルベシ。同一ノ人ニテモ年ニ依リテ身大ヲ異ニス。之ガ為ニ精神モ変更セザルベカラズ。是レ不合理ナリ。故ニ精神ハ極大トナスノ外ナシ。然ラバ何故古典ニハ之ヲ極微トナセルカ。此ハ輪廻ノ間ニハ、精神ハ覚ノ性質ノ族仁ナレバナリ。覚ノ性質トハ愛悪苦楽等ヲ指ス。輪廻中ト外ノ精神ハ之ヲ分タサルベカラズ。輪廻外ノ精神ハ行為モナク受感モナク、永久自由ナリ。輪廻中ノ精神ハ覚ノ性質ノ規定ヲ得テ、精神ノ性質トナルナリ。茲ニ於テ精神ハ始メテ覚ノ大サトナス。此故ニ古典ニハ精神ヲ極微トス。Svtâsvatara Upanis. 五章五節ニハ精神ヲ一毛線ノ一方分一トシ、九節ニハ針尖ノ大トナス。精神ヲ極微トスルハ真空ノ意ニ非ス。身ニ云ハヾ、精神ハ極大ナリ。最上精神ハ無明ニ基ク規定ノ為ニ、各自精神トナル。此ノ如キ規定ハ特ニ覚ノ規定ヲ指ス。然ラバ精神覚ト離ルレバ如何。之ニ答フ。万有知識ニ依リテ輪廻ヲ脱却スル迄ハ精神ト覚ハ結合シ、其結合アル間ハ各自精神ハ存ス。最上実在ヨリ言ハヾ各自精神ハナク、梵天ノミ実在ナリ。然レトモ万有知識ヲ得スシテ、輪廻中ニアル上ハ精神ハ覚ト結合ス。此結合ハ之無明ヨリ起リタル者ナル故ニ、万有知識ノ外ニ之ヲ除クノ法ナシ。

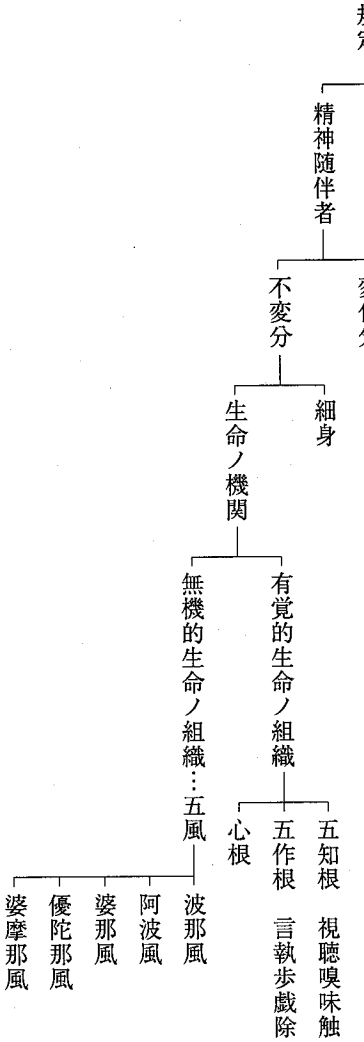
故ニ一旦之ヲ得レバ、吾ト梵天ノ一体ナルコトヲ知ラバ、結合ハ自ラ除カレン。Svetâ-svatara Up. 三章八節ニ云フ、暗黒ノ外ニ太陽ノ如キ光輝ヲ有スル大精神アルヲ知ル。真ニ之ヲ知ル者ハ不死トナル。之ヨリ外ニ道ハナキナリト。精神ト覚トノ結合ハ死ト熟睡中ニハ将成的ニ存シ、生ト覚醒中ニハ現実的トナル。故ニ此結合ハ将成的或ハ現実的ニ存シ、全ク滅スルコトナシ。要スルニ覚ハ規定ナリ。此規定ノ為ニ各自精神生ス。覚トハ然ラハ如何。或ハ之ヲ意ト同一トシ、或ハ之ヲ別トス。然レトモ之ト同一視シテ不可ナキカ如シ。若シ精神ト覚能ト知識ヲ得ベキ者ナランニハ、常ニ知識ヲ得ン。若シ両者之ヲ得ズトスレバ、知識ハ一モ得ラレサルベシ。精神ハ常住ナリ。覚能ハ一度ハ作用ヲ有シ、一度ハ有セサルト云フ如キ根拠ヲ有セス。故ニ精神ト覚能ノ間ニ一ノ媒介ヲ予想シ、其媒介ノ所不所ニ依リテ知覚ノ有無ヲ生ストセサルベカラス。而シテ意ハ此媒介タリ。

B[　　]一篇五章三節ニ云フ。余ノ意ハ他ニアリキ故ニ余ハ見サリキ、余ノ意ハ他ニ見リキ故ニ聴カサリキト、ベダンタ派ハ古典ノ意ヲ以テ精神ト覚能ノ媒介ヲセリ。

第十八節　心意現象ノ研究ヲナセバ、必ズ意志自由ノ疑問ヲ生ス。精神ハ梵天ト一体ナル故ニ常住、純粋、聡明、自由ナリ。然レトモ規定ニ制約セラレタル精神ハ如何ト云フニ、自由ト必然トハ別物ナラズ。人類ノ行為ト受感ハ彼自分ノ内部ノ原因ヨリ生ス。然レトモ此二者ハ梵天ニ従属ス。恰モ植物ノ種子雨ニテ発達スルモ其種子ノ性質ハ雨ニ規定セザレサルカ如シ。人類ノ行為ト感受トカ其内部ノ原因ヨリ起ル点ヨリ云ハヾ、必然ナリ。梵天ハ材料原因ニ非ス、寧助勢原因ナリ。過去ノ作法如何ニテ、各自ノ運命ハ梵天ニ定メラル。シャカラ云フ、精神ノナシタ善悪ハ不平等ニ之ニ従ヒテ、神ハ其相応スル所ノ果報ヲ不平等ニ分ツ。然レトモ恰モ雨ノ如ク単ニ助勢原因ニ過キス云々。仮令行為者ハ神ニ従属スルモ、神カ［　　］ヲシテ行為セシムルニ当リテハ、精神ノミ独リ行為スト。ベダンタハ此ノ如ク自由ト必然ヲ合一セリ。

第十九節　知識ノ点ヨリ云ハヾ、各個ノ精神ハ唯一ノ精神ニシテ、遍達、遍在、常住、不変ナリ。此精神ノ外一物ナシ。然レトモ無識ノ点ヨリ云ハヾ、恰モ月ハ一ナルモ眼病者ハ二個ノ月ヲ見ルカ如ク、一個ノ太陽万水ニ映スルモ影ハ幻影ナルカ如ク□［　　］梵天ノミ存ス。此梵天無識ノ為ニ数多トナリテ現ス。数多ヲ大別シテ三種トナル。（一）人性的ノ神ニシテ因果応報ヲ司ル者。（二）因［　　］ノ劇場タル世界。（三）無始ヨリ輪廻スル所、各個ノ精神是ナリ。各個ノ精神ハ元全知全能ノ梵天ナレトモ、自己ノ本性無識ノ為ニ蔽ハレ、己自身ハ梵天ナルコトヲ知ラス。此ノ如キノ自知ヲ蔽塞スル者ハ、即無識ニシテ此無識精神ヲ主客両観ニ分チテ、其間ニ遮断ヲナス。此ク無識カ精神ヲ分離スルトキハ、精神ハ主観トシテ不完ナル知識的能力トナリ。客観トシテハ不完全ナル対象トナリ、其主観ハ亡者ノ如ク、其欠セル視力ハ慈悲ニテ回復スルヲ得。其客観ハ規定ノ然ラシムル者ニシテ、［　］モ火ガ火ノ中ニ蔽ハル、ガ如ク、精神ノ［　　］セラレテ潜伏スルナリ。各個ノ精神ヲ［　　］

スル規定ハ、大別シテ三トス。（一）粗身(deha, Sthûlaśarîram)。此ハ元素ヨリ成リ、死ノ時ニ精神之ヲ棄テ去ル。（二）精神ノ輪廻ニ随伴スル者之ヲ二小別ス。(1)変化分。此ハ如何ナル生命ノ後ニモ曽テナクシテ、新ニ精神ニ随伴シ来ル倫理的確定。(2)不変分。此ハ二種ノ別アリ。(イ)細身(Sukshmaśarîram, bhîta âsraya)。此ハ元素ノ細分ニシテ身体ノ種子ヲ出ス分ナリ。(ロ)生命ノ機関(Prânas)。之ヲ二種ニ分ツ。(ハ)有覚的生命ノ組織。(3)無覚的生命ノ組織。其有覚的組織ハ三種ノ部分ヨリ成ル。(i)五知根(Buddhi indriyani)。即視聴嗅味触ノ五感。(ii)五作根(karma indriyani)。即言、執、歩、戯、除、(iii)心根(manas)。即有覚的生命ノ中心機ニシテ、五知根五作根ヲ支配スル者即意ナリ。其無覚的生命ノ組織ハ口風(Mukhya Prana)ヨリ成ル。口風ハ生命ニ必須ナル呼吸ナリ。五種アリ。(i)波那風(Prâna)。(ii)阿波那(Ahâna)。(iii)婆那風(Vyâna)。(iv)優陀那風(udâna)。(v)婆摩那風(samâna)ナリ。生死ノ枢機ハ五風ニ属ス。



波那トハ狭意ニテハ口風ナリ。最狭意ニ云ハヾ口風中ノ波那風ナリ。弘意ニ云ハヾ、生命ノ機関ニシテ、五知根五作根心根五風ヲ包括ス。此等機関ハ解脱迄ハ精神ト離スベカラサルモ、其実此等ハ直ニ精神ニ非ス。寧ロ非精神ニ属ス。世界ヲ劇場トシ、心ヲ俳優トスレバ、五大ハ舞台ニシテ生命ニシテ、生命ノ機関ハ芸人ノ衣装ノ如シ。此ノ如キ機関ハ五大ト根本的ニ異ナルヤ否カニ付テハシャンカラモ一定ノ説ガナキガ如シ。然レトモ此モ亦五大ト同シク、梵天ヨリ生シタルコトハ確ナリ。生命ノ機関ハ細身ト同シ。輪廻アル以上ハ精神ト分カレス。仮令精神植入ニ入ルモ細、身ハ之ニ随伴ス。此場合ニアリテハ、五智根五作根心根ハ発達シ難シトス。輪廻ハ無始以来アリ。故ニ生命ノ機関ハ無始ヨリシテ、精神ニ伴ハサルベカラズ。仮令各個ノ精神ハ梵天ノ中ニ没シ、又ハ其中ヨリ出ツルトスルモ、精神ト其機関ハ将成的ニ存ス。故ニ精神ノ出没ハ実在ニ非ス。又五感ノ如キハ死後如何ニナルカト云フニ、此ハ滅尽シテ其能力ノミ存ス。今日ノ解剖学者ノ、脳髄ヲ中央機関トシ之ニ附属スルニ知覚運動ノ神経ヲ以テスルカ如ク、ベダンタハ心根ヲ中央トシ、五知根ト五作根ヲ之ニ附属ス。精

神ハ常ニ認識ス。感覚的機関ハ其時ニ応ジテ異ナルベキ根拠ヲ有セス。故ニ精神ト［　　］ノ間ニ心根ナル機関ナクンバ、常住ノ知識ノミナルカ如クハ全ク知識ナキカナラザルベカラス。心根アリテ此両者ノ間ニ存シ、或ハ注意シ或ハ注意セサルニ依リテ、精神ノ自覚ト非自覚トヲ生ス生命ノ機関タル五知根五［　　］心根ハ最微ナリ。最微トハ微細ニシテ、有限ナルヲ云フ。然レトモ、極微ノ大ニ非ス。若シ生命ノ機関粗身ナラバ、人死シテ精神身体ヲ脱スルニ当リ、傍立者之ヲ見得サルベカラス。又若シ無限ナランニハ、脱スルコトモ去ルコトモ帰ルコトモナカルベシ。無限ハ遍在ナレバナリ。故ニ生命ノ機関ハ有限ノ微細ナラザルベカラス。生命ノ機関ハ五官及言執等ノ能力ニシテ精神ニ附属ス。死スルトキハ身体ハ灰滅スレトモ、機関ハ依然トシテ存シ、恰モ植物ノ種子ノ如ク再ビ発現スルノ素ヲ有ス。

口風ハ元来、口中ノ風ノ義ナリ。ベダンタ派ニテハ寧ロ重要ナル生命ニ必要ナル風ナリ。故ニ主要風ト云フベシ。呼吸ノ如キハ此ノ一部ナリ。口風モ元ヨリ梵天ノ作リシ所ナルモ、一切機関中ニテ口風最古ク作ラレ最貴キ者ナリ。他ノ機関ハ口風ノ性質トシテ之ニ附属セルナリ。然レトモ口風ハ各個精神ノ如ク身体ノ主ナルニハ非ス。口風ハ寧精神ノ宰相タルニ過キス。視聴等ノ覚門ハ臣僕ナリ。他ノ点ニテハ口風ハ各種ノ機関ニ異ナラズ。集合的ノ物ナリ。即同室ノ分子ヨリ成レリ。又非知識ナリ。然レトモ何ノ対象ヲモ有セス。故ニ口風ハ第十二ノ機関トスベカラズ。全身ヲ保持シ、栄□トシ、活動スル者ナリ。口風ニ五種アリ。波那、阿波那、婆那、優陀那、婆摩那是ナリ。シャンカラニ依レバ、波那風ハ外向ノ呼吸ナリ。阿波那風ハ内向ナリ。婆那風ハ身体ノ極力ニ依リ呼吸ヲ抑止スルトキ、生命ヲ維持スル能力ナリ。優陀那風ハ死スルトキ、精神ヲ身体ヨリ分離スル能力ナリ。摩風ハ消化力ナリ。口風ト十一根トハ根本的ニ異ナリ。（一）他一切機関ハ睡眠スレトモ、口風ハ然ラス。（二）口風ノ他ハ尽ク死ヲ免レス。即疲労ナリ。（三）生命ノ［　］ヲ来ス者ハ、口風ナリ。（四）一切ノ機関ハ対象ヲ有ス。口風ハ然ラズ。（五）古典ニ此等ハ其性質トナルトアルハ、他機関ハ口風ニ従属セリトノ意ナリ。ベダンタ派ハ各種ノ機関ヲ機械的ニナシ、公開教ノ梵天及諸神ノ支配ニテ運用ストナス。死スルトキハ諸神其補助ヲ廃ス。輪廻スル精神ニ四種ノ状態アリ。（一）覚、（二）夢睡、（三）熟睡、（四）死、是ナリ。眩暈ハ第五ノ状態ニ非ス。覚ニアリテハ、精神ハ心胸ノ中ニ住シテ心根ト連絡ス。十根及心根ニテ全身ヲ治ム。此ノ如ク精神ハ其作用ヲナシ知識ス。夢睡ニアリテハ十根休止シ、心根ノミ作用ヲナス。精神ハ、心根及心根中ニ没入シタル十根ニ囲マレ、血液ニテ全身ニ遍在シ、覚中ニ得タル現象ヲ夢トシテ見ル。熟睡ニアリテハ、精神ハ一切ノ規定ヲ離レ、心胸ノ精気中ニテ梵天ト結合ス。醒ムルコトハ各自ノ確定性ヲ帯ヒテ来ル。

第五　輪廻論

第二十節　ベダンタ派ノ輪廻論ヲ叙スルニ先チ、一般ニ印度人ノ死後ニ関スル観念ヲ観スルヲ要ス。

（一）最古即チリグベダノ時代ニハ、輪廻ノ観念ハ発達セス。善人ノ精神ハ耶摩[yama]ノ光明点ニ至リ、祖先ト共ニ幸福多キ生命ヲ送

リ、不善人ハ下界ノ暗星処ニ至ル。何レモ再ビ地上ニ帰ルコトナシ。

(二) ウパシャードノ時代ニ始メテ、輪廻ノ観念ヲ生ス。而シテ死後三種ノ行路アリトス。有識者ハ神的道路ヲ経テ、高キヨリ高キニ移リ、終ニ梵天中ニ入リ、再帰スルコトナシ。有功者ハ祖先ノ行路ヲ経テ月ノ光明略ニ入リ、彼処ニテ其功績ノ応報ヲ受ケテ後、再帰身体ニ入ル。其生命ハ前生ノ論理的性質ニテ異ナリトス。無識無功ノ者ハ死後月世界ニテ幸福ヲ受クル如キコトナク、劣等ノ動物若クハ植物トシテ生ル。

(三) ベダンタ派ニテハ公開教ト内秘教ニテ説ヲ異ニス。内秘教ニテハ、精神ハ即梵天ニシテ現象世界ハ幻影ナリ。故ニ之ヲ知ルトキハ、万有知識ニシテ此人ニハ輪廻ナシ。此知識ヲ有セサル者ハ輪廻ヲ免レス。故ニ公開教ニハ輪廻ノ説アリ。ベダンタ派ハ古典ニ基キテ、一切ノ機関ハ死スルニ当リ次第ニ陥没ストス。Chandogya Up. 六篇八章六節ニ云フ、若シ人ノ此処ヨリ去ルトキハ、其言ハ心根ニ陥没シ、其心根ハ口風ニ陥没シ、其口風ハ火ニ陥没シ、其火ハ最上実在ニ陥没スト。ベダンタ派ハ之ニ基キテ死後ヲ説カス。言ハ心根ニ陥没シ、心根ハ口風ニ、口風ハ其人ノ個体的精神ニ陥没シ、神ハ火ニ陥没スル者トナス。其言トハ十根ヲ合セテ云フ言ナリ。其口風精神ニ陥没ストセルハ、古典ニ背戻スルニハ非ス。何トナレバ其Chandogya Up.ノ文ニハ見レザルモ、他ノウパニシャードBrehadâranyaka四篇三章三十八節ニ、死スルトキ一切ノ口風ハ精神ニ陥没ストアリ。精神ハ其中ニ没シタル有覚的及無覚的ノ組織即十一根及口風ト共ニ去ルニ当リ、物質的基本ヲ要ス。若シ基本ナクンバ、生命アル者ハ成立スル能ハサルハ経験之ヲ証ス。細見(Sukshma śarîram)ハ此根本ナリ。細身ハ元素ノ精微ナル者ヨリ成リ、身体ノ種子ヲ組成ス。後又各種ノ元素ヨリ成ル所ノ身体ヲ得ンカ為ニハ、死スルトキ精神カ総テ身体ノ種子ヲ帯ビテ去ラサルベカラス。此ノ如キ種子ハ単ニ火ニ止マラス、一切元素ノ種子ナリ。古典ニハ細身ヲ水トナス。是レ水ハ一切ノ原素ヲ含有セルノミナラズ、又一切原素ヨリ成ル身体ニハ必ツ水之ガ要部ヲ占ムルヲ以テナリ。細身ハ血脈ニ依リテ到達シ、精美ナル者ナリ。サレド延長ヲ有ス。従テ移動性ヲ有ス。而シテ透明ナリ。故ニ身体ヲ脱スルニ何ノ障礙ナリ。人ハ之ヲ見ル能ハス。平常ノ体温ノ如キハ細身ニ依リテ存ス。故ニ生アレバ身ハ温ナルモ、死セハ冷ナリ。細身ハ精微ナルヲ以テ、身体負傷スルモ共ニ負傷セス。火ト[　]ヨリ成ル細身ハ各種機動ノ支撐者ニシテ、万物知識ニ依リテ解脱スル迄ハ離レズ。精神ノ輪廻スル間ハ細身ト結合ス。此結合ハ無明ヨリ生スルヲ以テ、万有知識ヲ得レバ之ヲ脱スルコトヲ得。Chandogya Up. ニ其火ハ最上実在ニ陥没ストアルハ、各個ノ精神真ニ梵天ニ合一スルノ謂ニ非ス。只熟睡等ノ中ニ於ケルト同ジク種子ハ存シテ継続シ、細身ハ之ニ付随ス。細身ハ無始ヨリ精神ニ伴随シ、其精神万有知識ヲ得テ解脱スル迄ハ分離セス。公開教ノ知識ハ精神ヲ神的行路ニ依リ、劣等梵天ニ道クモ、細身ヲ脱セシムル能ハス。細身ハ生命ニ必須ナル機関ヲ生スル種子ナル故ニ、之ヲ脱セサル間ハ輪廻ス。印度人ハ不死ニ就テ二種ノ観念ヲ有ス。死後、尚生命トヲ有シ、各種ノ身体ヲ経過シ

テ止マサル者アリトシ、之ヲVyatirekaト称ス。一ハ既ニ全ク解脱シテ死生ナキ者、之ヲAmritatvamト称ス。細身ヲ脱セサル者ハ不死ナルモ、未タ生死ヲ脱セス。真実ノ不死ハ一定ノ所ニ繫着スルヲ要セス。又他所ニ去ルヲ要セス。物資的基本ヲ須ヒス。公開教ノ不死ハ全ク無明ヲ脱セサルヲ以テ、単ニ比較的ノ不死ニ過キス。或ハ他処ニ去リ、物質的支撐者ナル細身ヲ要ス。細身ナクンバ、他処ニ去ル能ハズ。

第二十一節　各種ノ機関精神ニ陥没シタル後、精神ハ其位置ナル心臓ニ入ル。此時心臓ノ一端光輝ヲ放ツ。精神ハ此一端ヨリ脱シ、或ハ眼ヲ経、或ハ頭等ヲ経テ去ル。Brehâdaranyaka 四篇四章二節ニ云。彼ガ心臓ノ一端ハ光輝ヲ放ツ。其光輝ニ依リ、自己ハ或ハ眼ヲ経、或ハ頭骨ヲ経、或ハ自体ノ他ノ部分ヲ経テ去ルト。心臓光ヲ放チテ道ヲ照ラス迄ハ、識者ト無識者ノ間ニ異ナルアルモ、此ヨリ後ハ両者其道ヲ異ニシ、識者ハ頭ヨリ去リ、無識者ハ他ヨリ去ル。Chandogya Up. 八篇六章五節ニ云、心臓ノ血脈ハ凡一百一種アリ。其一ハ頭ノ頂ニ到達セリ。若シ之ヲ経テ去レバ不死トナル。他ハ種々ノ方向、実ニ種々ノ方向ニ向ヒテ去ルノ用ヲナス。Kata Upa. 二篇六章十六節ニモ同シキコトヲ載ス。頭ニ到達セル血脈ハ第一百一ノ血脈ニシテ、Sushumanâト称ス。此ハ識者ヲ神的行路ニ導ク者ナリ。神的行路ニハ如何ナル段階アルカ、之ヲ云ハズ。祖的行路ニハ七種ノ階段アリ。煙、夜、月ノ蔵スル半月、廻ノ短縮スル半年、祖先界、精、月世界ナリ。他世界即彼岸ノ観念ニ就キテハ錯雑セリ。之ヲ三種ニ分タン。一、有識者ハ死後神的行路ヲ経テ梵天ニ入リ、二、作法者ハ死後祖的行路ヲ経テ月世界ニ入リ、三、無識無作法ノ者ハ第三処ニ到ル。第三処トハKaushi Up.一［　］二節ニ云、既ニ此世界ヲ去ル者ハ月世界ニ至ル。サレバ無識無作法ノ者モ月世界ニ至ルガ如キモ、月世界ニ到ル者ハ作法ノ応報ナリ。故ニ応報ナキ者ハ月世界ニ至ルモ、何ノ目的モナカラン。月ニ達スル者ハ作法者ニシテ無作法者ニ然ラズシテ、「ヤマ」ノ懲戒所Samyamanamニ至リ、其罪業ノ為苦ヲ受ケテ後、再ビ此世界ニ来ル。Kata Up. 一篇二章六篇、死後ハ愚人ノ知ラサル所、富有ノ迷ニ迷ハサレ、彼為ラク是即世界ナリ。他ノ世界アルコトナシ。此ノ如クニシテ幾度トナク我支死ノ下ニ堕落シ来ルト。是レ即地獄ノ責罪ナリ。地獄ノ性質種類等ハ詳ナラズ。無作法者ノ行ク所ナルハ疑ナシ。無作法ノ苦痛ニ反シテ、作法者ハ作法ノ応報ヲ受クトナス。Brehadaranyaka、Chandogyaニ依レバ、月ニ於ケル善人ハ諸神ノ食物ナリトナセリ。作法者月世界ニ至リ、神ニ食ハル、者ナランニハ、快楽ニ非ルベシ。然レトモ其食物トハ相交リテ快楽ヲ得ルノ意ナリ。Chand. Up. 三篇六章一節ニ云、諸神ハ食ハス又呑マス。彼等ハ只甘露ヲ見テ楽シムトアリ。

第二十二節　応報ニ二種アリ。彼岸ニ於ケル応報及地上ニ於ケル者、是レナリ。若シ彼岸ニテ報ヲ受クレバ、再ヒ地上ニ受クルノ要ナカルベシ。然レトモベダンタ派ニテハ彼岸ニ於ケル者ノ餘分アリトナス。Chandogya Upa. 二篇十章五節、Brahadâranyaka Up. 六篇二章十六節、四篇四章六節ニ、応報ハ彼岸ニ於テ尽キルカ如ク記セリ。

然レトモベダンタ派ハ以為ラス。作法ハ月世界ニテ快楽ニ依リテ次第ニ消耗ス。作法ノ水的状態ハ作法ノ帰無ノ苦痛ノ火ニ依リテ、恰モ霜ノ月光ノ為ニ解クルカ如ク融解シ、残余ノ存スル中ニ下界ニ下ル。生ル、ニ当リ家族財産等ノ異動アルハ、彼岸ノ応報ニ残余アルヲ以テナリ。故ニ作法ヲ二種トス。一ハ彼岸ニテ応報ヲ受クベキ者ト、一ハ地上ニテ応報ヲ受クベキ者ナリ。甲ハ地上ノ作用ニシテ乙ハ彼岸ニ於ケル応報ノ残余ナリ。若シ残余ナケレバ、地上ニテハ応報ノ受クベキナシ。地上ニ於ケル作法ハ、直ニ地上ニテ応報ヲ受クベキ者ニ非ス。応報ニ残余アルトキニハ、解脱ハ不可得ナルカ如キモ、万有知識ヲ得レバ残余ハ生滅ス。精神地上ニ返リ来ル順序ハ、万物カ梵天ヨリ分出スルニ同ジ。初ニ精気、火、水、地トナリテ、分出スルハ万物ノ順序ナリ。精神ノ地上ニ帰ルハ、精気ニ入リ、風ニ入リ、煙ニ入リ、凝テ雲トナリ、注テ雨トナリ、植物ヲ栄養シ、食物トナリ、男身ニ入リ精液トナリ。其作法如何ニテ対合スル。子宮ニ入リ、自体ヲ得テ生シ来ル。精神カ此ク順序ヲ経ルニ当リ、種々ノ物ニ化スルニハ非ス。精神ハ単ニ旅客トシテ此等ニ寓ス。精神ハ快楽ヲ得ル為ニ、月世界ニテハ水的身体ヲ有ス。水身ハ快楽ノタメニ消耗シ、終ニ精気ニ類セル状態ニ変化シテ、精気ノ中ニ寓ス。其風、煙、雲、雨等ノ階段ヲ経ルモ、同シク精気カ化シテ其物トナルニ非ス。其物ニ類似スル状態ニ変スルナリ。此ハ其過去ノ作法ヲ償却スル為ニ、植物トナルナリ。植物ニハ又植物ノ精神アリ。月ヨリ下ル精神ハ之ニ寓ス故ニ、植物精神ノ苦楽ハ其与リ知ラザル所ナリ。

第六　解脱

第二十三節　解脱ハ迷誤ノ現象世界ヲ離レ、万有ノ実在世界ナル梵天ニ帰入スルナリ。故ニ解脱ハ梵天ナリ。人ノ精神ハ其実梵天ト同一ナルモ、無始ヨリ無明ノ為ニ蔽遮セラレ、其梵天ト一体ナルヲ知ラズ。一旦、万有知識ヲ得テ自己即梵天タルコトヲ覚ラバ、解脱ナリ。解脱ハ化シテ他ノ状態トナルニ非ス。只己ノ実相ヲ覚知スルナリ。故ニ解脱ハ知識ノミニシテナシ得ラル。作法功徳ニテ得ベキ者ニ非ス。一切ノ作法ハ其善ト悪トヲ問ハズ。次回ノ生命ニテ之ヲ償却セザルベカラズ。故ニ作法ハ周囲ノ何タルニ関セス、解脱セス、必ツ輪廻ス。仮ニ一切作法ヲ止ムレバ、他ノ生命ヲナスベキ材料ナリ。死後解脱スルヤノ疑アレトモ、此ハ然ラズ。幾身ノ生命ヲ過テ、償却スベキ作法ノ存否如何ニ確ニ知ルベカラズ。仮令悪作法ハ儀式ニテ滅シ得ルトスルモ、善作法ハ其応報ヲ受ケザルベカラズ。且其儀式ハ悪作法ヲ滅スルモ、同時ニ未来ニ受クベキ積極的応報ヲ受クルヤ知ルベカラズ。発動及受感スル自然ノ傾向継続スル以上ハ、生涯一切ノ作法ヲ避クルハナシ能ハズ。何トナレバ作法ハ此ノ如キ自然ノ傾向アルヲ以テ生々止マズ。故ニ万有知識ニテ自然ノ傾向ノ除カル、迄ハ、解脱ハ望ムベカラズ。恰モ解脱ハ作法ニテナシ得ザル如ク、道徳的改善ニテナシ得ベカラズ。改善ハ改善者ニ於テ道徳ヲ附加シ、又ハ過ヲ減スルコトナリ。解脱ハ善ヲ加フルニテ得ベカラズ。解脱ハ何ノ附加ヲモ要セス。梵天ト一ナルニアレバナリ。過ヲ滅スルニテモ解脱シ得ス。恒久ノ梵天トナルトナルニアレバナリ。

解脱ハ自己固有ノ素質ナルモ蔽遮セラル、カ故ニ、鏡ノ光ガ磨クコトニテ得ラル、如ク、自己ノ活動ニテ得ラル、ノ疑アリ。解脱ハ此クシテ得ス。自己ハ活動ノ対象ナラザレバナリ。活動ノ対象タルニハ之ヲ変更セサルベカラズ。自己対象タラバ、変更シテ常住ニハ非ルニ至ラン。故ニ自己ヲ対象トスル活動ナシ。若シ対象アリトスルモ、自己ニ関係ナキコトナリ。故ニ此活動ノ為ニ自己ガ改善セラル、コトナシ。

第二十四節　数勝ト同ジク、ベダンタニテハ解脱ハ知識ノミニテ得、然ラバ解脱ヲ得ル知識ハ如何。ウパニシャードニテ得ラルベキ精神ニ関スル知識ナリ。此種ノ知識ハ作法ニ関係ナクシテ、自ラ解脱ヲナスニ足ル者ナリ。知識ハ知力ノ作用ナレバ、作用ナリヤト云フニ然ラズ。作法ハ作法者ノ意志ニ依ル。故ニ其意志ニテハ或ハ為シ、或ハ為サヾルベク自由ナリ。知識ハ然ラズ、必然ナリ。主観的ニ規定シ得ベカラズ。人ノ一所作ニ関セズシテ、対象ナル客観ニノミ関ス。知識ノ結果ハ作法ノ結果ニ同ジカラズ。作ノ［　］果ハ応報ヲ未来ニテ受ク。知識ノ結果ハ現在ニアリ。一旦万有知識ヲ得レバ、即チ解脱ナリ。Mundaka Up. 三篇二章九節、其最上ノ梵天ヲ知ル者ハ梵天トナルト。Mundaka二篇二章八節、其最高最深ノ者ヲ見ルトキハ胸中ノ鉄鎖ハ破レ、一切ノ疑ハ解ケ、一切ノ作法ハ滅スト。此他此ニ類スルコト多シ。故ニ最上ノ実在ヲ知ルト。其果ナル解脱トハ直接ノ関係ナリ。其間ニ間接ナル者ナシ。梵天ノ知識ト解脱ハ同時ニ起ル。解脱ハ吾人ノ実相実在ヲ知ルコトニテ、親シキヲ加フルニハ非ス。之ヲ妨クル者ヲ除クコトノミ。其障ヲ除クハ万有知識ニ依ル。此ノ如キ知識ハ得意ノ知識ニシテ、客観ニ関スル普通ノ者トハ大ニ異ニシテ、知識ノ主観ニ関スル知識ナリ。即チ知識本主ノ知識ナリ。経験的知識ハ外面ニ向フ者ナレバ、内面的自己ト離ル、コトヲ得。精神ノ知識ヲ得ル為ニ、経験的知識ハ障ナリ。古典ハ外面ニ向フ知識ヲ内面ニ転セシム。然レトモ万有知識ノ如何ナル者ナルヤハ、古典ト雖モ対絶ニ記セス。Kata 二篇一章二十三節ニ云フ、其自己ハベタニ依ルモ、悟性ニ依ルモ、又学問ニ依ルモ、得ベカラズ。自己ガ選択スル者ハ彼ニ依リテ自己ハ得ラルベク、自己ハ彼ニ其実在ヲ現示ス。サレバ知識的精神ハ学問思弁ニテ得ベカラズ。凡ソ意志ノ求冀ハ此ノ如キ知識ニ到達スル応報ニ非スシテ、現象世界ニ属ス。之ヲ除カサレバ、知識ヲ得ベカラズ。知識ヲ得ルニ当リ資トナル者ハ二アリ。一ハ作法、一ハ冥想、是ナリ。解脱ハ作法ニテハ得ベカラズ。然レトモ作法ヲ知識ヲ得ルノ助ヲナス。宗教的冥想モマタ然リ。

第二十五節　同一体ニシテ世界ハ迷誤ニ過ギタルヲ暁得スルヲ万有知識(Samyagdarśanam)ト云フ。若シ一旦是ヲ得レバ、感覚世界ハ忽然トシテ滅シ、知覚、知覚ヨリ起ル苦痛モ滅ス。一切ノ作法ハ此ノ如キ人ニテハ、何ノ効用ヲモ用セス。作用ハ快楽ヲ増進スルカ、若クハ苦痛ヲ減スルヲ以テ目的ス。快楽ト苦痛ハ肉体ニ関スル者ナレバ、之ナキ者ニハ関係ナシ。肉体ノ迷誤ナルヲ看破シタル者ニハ苦楽ナシ。一切ベタノ教エモ功ナキニ至ル。ベタノ訓ハ此目的ノ為

ノ方法ニシテ、此目的ニ達シタル者ニハ無用ナリ。苦楽ヲ有スル者ニハ無用ナリ。苦楽ヲ有スル者ハ未タ万有知識ヲ有セス。身体ヲ自己ナリト信シ、自己ノ梵天タルヲ知ラズ。万有知識ヲ有スル者ニハ苦楽ナク、罪業滅ス。Chandogya U. 四［　］五［　］三［　］ニ、恰モ水ノ荷葉ニツカサルカ如ク、悪行ハ識者ニツカズト。然レトモ独リ善ノミハ解脱者ニ付クヤノ疑ナキニ非ス。善作法モ亦滅スナリ。其理由、五アリ。（一）善作法モ亦結果ヲ来シ為ニ、知識ノ結果ヲ防グ。（二）古典ニ拠レハ、知識ヲ得レバ善悪共ニ滅スト。（三）精神ハ作者ニ非スト云フコトヨリ起ル作法ノ転滅、［　］善悪共ニ同一ノ価値ヲ有ス。（四）悪作法ノミヲ挙クル所ニモ善モ之ヲ含有ス。何トナレバ其結果ハ知識ニ比スレバ、劣等ナリ。（五）古典ニ此橋ハ昼夜、［　］、死モ苦痛モ善作法モ悪作法モ超過セス。一切ノ罪過モ此ヨリ引キ返スト。故ニ善悪共ニ一切ノ作法ハ滅スルナリ。然レトモ作法ハ解脱ト同時ニ直ニ滅セス。作法ノ未タ果ヲ結バサル者ハ滅スルモ、将ニ果ヲ結バントスル者ハ之ヲ終ル迄ハ滅セス。若シ直ニ滅ストスレバ、死ヲ待タスシテ直ニ滅セサルベカラズ。故ニ幾何ノ生存ヲナシテ餘レル果ヲ終ラバ、梵天ト同一スルニ至ラン。

［第］二十六［節］　無識者ノ精神ハ死スルトキ身体ヲ脱シ無限ニ輪廻スルモ、識者ノ精神ハ身体ヲ去ラズ。精神即梵天ニシテ、梵天ト同一ナリ。無差別中ニ入ル。［　］六［　］六［　］ニ云フ。彼ノ流氷ハ大海ニ向テ流テ、既ニ大海ニ達シテ其中ニ没ス。其名称ス形状ハ、滅シテ只大海ト云フベキノミ。恰モ此ノ如ク精神ノ方ニ向テ進ル達観者ノ十六部分ハ既ニ精神ニ達シ、其中ニ没シ、其名称ト形状ハ滅シテ、只精神ト云フベキノミ。是レ彼ノ無細分不死ノ者ナリト。十六部分トハ、身体ヲ成セル十六種ノ部分ナリ。識者ハ死シタル後ハ最上ノ光明界ニ入リ、自己ノ状態ヲ得ル。其状態トハ即チ最上ノ精神ノ謂ナリ。Chan 八［　］七［　］一［　］罪過ナク、年齢ヲ離レ死ヲ離レ、［　］悩ヲ離レ、飢渇ヲ離レ、其願望ト其決断トハ真実ナル自己、是人［　］ノ求スベキ所、是レ人ノ知ルヲ要スベキ所ナリト。是レ解脱者ノ状態ナリ。ジャイミニハ之ニ善知ト善能ヲ附加シ、Audulomiハ此ノ如ク属性ノ多キヲ非ナリトシ、此等ハ皆一切ノ罪悪ヲ離レタリト云フニ過キス。積極的ニハ知識的ナリト云フノ外ナシトス。バーダラヤナハ、此両説ハ内秘ト公開ノ両者ヨリ調和スベシトス。凡ソ梵天ニ高等ト劣等ノ二アリ。之ニ関スル学問ニ公開ト内秘ノ二アリ。識者ハ其内秘教ニ依リテ識ヲ得レバ、即身解脱ヲ得。尊信者ハ十四階ヲ経テ、初メテ解脱スルヲ得。故ニ此解脱ヲKramamukti階級解脱ト称ス。其十四級トハ、第一、老焔即チ火天界。第二、昼。第三、月ノ滅スル半月。第四ハ火ノ滅スル半年。第五、年。第六、諸神界。第七、風天界。第八、太陽。第九、月世界。第十、電光。第十一、ワロナ界。第十二、印陀羅界。第十三、波闍波堤界Prâjapatilaka。第十四、梵天界是レナリ。而シテ其梵天ハ劣等梵天ナリ。劣等梵天ハ常住ニアラズ。終ニ滅スルトキアリ。其滅スルトキ最上梵天トナル。

第三批評

第一章　ベダンタ派ハ或点ニテハ数論派ト類似セリ。特ニ其五作根五知根心根五風ヲ以テ、吾人身体ノ組織ヲ説明セル点ハ全ク同シ。然レトモ全ク異ナリ、勝数論ハ両「　」ヲ建テ一ヲ心我、一ヲ自証トス。此二ハ自存的主義ニシテ、他ノ者ヨリ生セラレタルニ非ス。心我ハ他ノ者ヲ生セズ。自証ハ他ノ物ヲ生ス。真我ノ外ノ一切ノ無形有形ハ、尽ク自証ヨリ生シタル者ナリ。ベダンタ派ニテハ自証ニ対スル者ナシ。実在者ハ我ノミナリ。自己ノミナリ。精神、即梵天ノミナリ。一切現象ハ無識ヨリ生ス。譬エバ浮幻泡影ニシテ実在ニ非ストナス。数論ハデカルトノ二元論ニ類ス。ベタンタ派ハヘーゲルノ絶対唯心論ニ類ス。ベタンタ派ハ勝論ト大ニ組織ヲ異ニス。勝論ニテハ我ハ九実ノ一ノミニシテ、且我ハ数多ナリ。ベタンタノ我ハ此ノ如クナラズ。万有実在タル梵天ハ全ク之ニ異ナリ。又我ノ外ニ実在ナキナリ。勝論派ニテハ、地水等ハ我ト同等ノ実在ナリ。ベダンタ派ハ其解脱ヲ目的トスル点ニテハ、他ト異ナルコトナシ。只其解脱ノ方法ハ必シモ同シカラズ。数論派ニテハ真我物質ヲ知リ、物質ノ己レト異ニシテ己ニ劣レルコトヲ知リ、之ニ厭離シテ解脱ス。勝論ニテハ六句義ニ依リ、一切特殊ノ性質ヲ離ルヽヲ解脱トス。ベダンタ派ハ万有知識ニ依リ、世界ノ迷ニシテ無ナリト知ルヲ解脱トス。然レトモ此三者共ニ解脱ハ知識ニ依リテ得ベク、道徳ニテ得ベカラズトナスハ一ナリ。

第二章　ベタンタ派ハ知識ヲ以テ解脱ノ唯一ノ法トナス。基督教ノ信仰ト大ニ異ナリ、ベダンタ派ハ知力ヲ関鍵トシ、基督教ハ意志ニヨル。ベダンタ派ニテハ、世界ハ迷誤ニ外ナラズト暁得スルヲ目的トス。基督教ニテハ万有ノ真理ハ暁得スベカラズトナシ、望ヲ未来ニ属ス。ベダンタ派ハ道理ノ推究ニ依リテ道理ヲ得ント欲シ、基督教ハ先ツ、信仰ヲ主トス。ベダンタ派ハ各個ノ精神ハ差別ヲ有スルモ、其実ハ無数ナルニ非ス。唯一ノ精神ニ外ナラズトス。[aham brihma asmî] 故ニ[tat tvam asi]ナリ。此ク観シ来レバ一切無差別ナリ。基督教ニテハ個人利己ノ意志ヲ変ジテ、万人同愛ノ義ヲ弘ムルニアリ。故ニ個体我ヲ愛ノ無差別中ニ置カントス。ベダンタ派ハ自知ニ依リテ無差別ニ帰シ、基督教ハ克己ニテ無差別ニ帰スルヲ以テ、其方法同シカラズ。只ベダンタ派ニハ二種ノ解脱アリ。即身解脱ハ万有知識ニ依リテ得ベキ者、階級解脱ハ信仰ニテ得ベキ者ナリ。基督教ハ此劣等梵天ノ尊信者ノ解脱ニ似タリ。基督教ノ神ハベダンタノ[aparam brihma]ニ似タリ。ベダンタ派ハ万有神教ナリ。

第三章　ベダンタ派ノ実在ハ万有精神ノミナリ。世界ハ非実在ナリ。人ノ迷誤ナリ。故ニ物質ハ人ノ迷誤ニテ成立シ主観的ナリ。此ノ如キハカント、フィヒテ、ショペンハウエル、主観的哲学ノ共ニ一致スル所ナリ。此等ハ皆、客観ハ主観所生ナリトス。ショペンハウエルノ如キハ、大ニベダンタニ得ル所アリ。カントハ先天唯心ト経験実在トヲ調和セントシタル者ナレバ、無宇宙論ニハ非ス。ベダンタハ無宇宙ナリ。世界ハ客観ニシテ生滅ヲ免レス。生滅スル者ハ、実ニ生滅セサル者ニ依リテ存スルナリ。凡ソ生スルトハ、皆勢力ノ発見若クハ物質ノ結合ニ外ナラズ。滅モ亦然リ。生滅アルモ其起本タル物質及物質ニハ変ナリ。然ルニ吾人ノ知識的対象タル者ハ此生滅ニアリ。生滅ノ起本ハ之ヲ認識スル能ハズ。此等ハ感覚ノ印象ヲ与

ヘズ。故ニ対象タラズ。吾人ノ物質及勢力ノ観念ハ現象界ヨリ概括シタル結果ノミ。然ラバ物質及勢力其物ヲ観スレバ、即チ世界ノ本体ヲ観スルニ至ラン。本体ニ到シテ而シテ後、現象ハ此本体ノ発現ニ外ナラズトナスハ、自然ナリ。然ルニベダンタハ此ノ如キ物質勢力ヲ観セス。自己ノミヲ実在トシテ一切現象ヲ迷誤トナス。迷誤トハ其実在セザルモ存セサルガ如ク現スルカ、若クハ本体ノ如クニ現セサルヲ云フナリ。迷誤ト云フコトヲ知ルニ至リタルハ、一旦誤認スルモ、直ニ因果研終ノ不斉合ヲ知ルヲ以テ泡沫幻影トナスベカラズ。本体ノ発現ノミナリ。ベダンタ派ニテハ或ハ云フヲ得ン。吾人、万有知識ヲ得テ後、身体ノ規定ヲ受クルハ逆理ナリト。然レトモ此ハ自家ノ教理ニ戻ル者ナリ。Brehadâ. 四[ ]五[ ]十三[ ]死後亦意識アルコトナシト。死後意識ナシトスレバ、奚ゾ一切現象ノ幻影ナルヲ得ン。故ニ本体ハ意識中ニテハ実在トモ非実トモ断言スベカラズ。過境的（トランセンデント）ナレバナリ。

第四節　ベダンタノ世界ヲ迷誤トスルハ、自家撞着ニシテ其大弱点ナリ。ベダンタハ梵天ノミヲ実在トシ、他ハ迷誤トス。然ラバ迷誤ノ生スル所以ハ如何。ベダンタ派ハ此点ヲ説明セズ。迷誤ハ無始ヨリ存在トナス。無始ノ迷誤ハ何者ノ迷誤ナリヤ。個人精神ノ迷誤ト云フノ外ナシ。然ルニ此精神ハ梵天ニ外ナラズ。梵天以外無一物トスレバ、無始存在ノ迷誤モ亦梵天ノ中ニアラザルベカラズ。梵天ハ無始ヨリ迷誤ヲ有ストセザルベカラズ。無始ヨリ迷ヘル実在ハ、最上トナスベカラズ。ベダンタハ迷誤之無有ナルモ、之ガ実有トナスコト、即迷誤ナリト云フヲ得ン。然レトモ迷誤ヲ実在ト迷誤スル傾ハ、梵天中ニアル者タルニ至ラン。故ニ梵天ハ無明ナリ。迷誤ノ傾ヲ有ストセザルベカラス。是レ自家撞着ノ甚シキ者ナリ。梵天ハ全智ナリ。ベダンタ経一、一、十一ニ云フ、全智ノ梵天ハ世界ノ原因ナリト。然ルニ梵天無始ヨリ迷誤ヲ有スレバ、全智ト称スベカラズ。又全智ノ精神何ノ解脱ヲ要セン。又ジャイミニノ如ク、梵天全能ナラバ迷誤ヲ打破スルニ於テ何カアラン。此等ノ難点ハ到底ベダンタノ立脚地ニテハ円満ニ解スベカラズ。特ニベダンタガ空間時間ヲ迷誤トナス非ナリ。十一節ニアルシャンカラノ空間ニ関スル論ノ薄弱ナルヲ以テ知ルベキナリ。空時ハベダンタ派ノ考フル如ク、迷誤ニ非ス。此両者ハ吾人ノ観念トシテハ後天的ニナルモ、其物ハ先天ナリ。吾人主観所生ニ非ス。無始ヨリ現象成立ノ図式トシテ客観的ニ存ス。

第五節　唯物論カ無形ノ現象ヲモ唯物ニ帰スルカ如クベダンタ派ハ唯心ノ極端ニ走リタリ。此極端唯心論ハ実際ニ弊ヲ遺スコト多シ。世界ハ全ク迷誤トスレバ、物質ノ学ハ終ニ迷誤ノ学タルニ至ラン。物質学ハ啻ニ其発明ノ結果ガ人世ヲ益スルノミナラズ。人ノ迷信妄想ヲ打破シ。確実ナル世界観ヲ作ルニ必要ナリ。然ルニ破羅門教ニテハ之ヲ無用トシテ、物質ノ講究ナシ。且此世界ハ自己ノ世界ニ非ス。他世界ヲ求ムルノミニ至レリ。此結果ハ世ノ物質的繁栄ヲ害スルコト甚大ナリ。破羅門教ノ中心ハ実ニベダンタノ哲学ニアリ。

第十三章　闍伊那学派

第一項　立宗

第一節　六種学派ノ外ニ「ジャイナ」「サノルバーカス」等ノ諸派アリ。

[jaina]トハ[jina]ノ［　］語ニシテ、「ジナ」トハ最勝ノ義ナリ。漢訳ニハ耆那ヲ「ジナ」ニ当ツ。「ジナ」ハ陳那ニ似タリ。然レトモ全ク別ノコトナリ。「ジャイナ」派ノ創称者ヲVardhamâna（婆陀摩那）ト云フ。「ジナ」トハ此人ノ尊称ナリ。「ジイナ」派ノ経ヲKalpa Sutra（劫波経）ト云フ。其始ニヴルトハマーナノ伝ヲ載セタレトモ其説怪誕ナリ。ヴルトハマーナハ紀元前七世紀印度Videhâ（毘提訶）国ノ首府Vaisâli近郊ニ生ル。刹利族ナリ。父ハSidhartha（悉達多）、母ハTrisalâト云フ。兄弟各一人アリ。兄ヲNadivadhana、弟ハSudarśanâト云フ。釈迦ト同時代ナリ。父母死シ、兄ノ家ヲ継続スル迄ハ、父母ノ家ニアリシモ二十八歳ノトキ出家シ十二年ノ間難行セリ。Âcâranga Sutra（阿闍蘭伽経）一巻八篇ニ依レバ、ヴルトハマーナハ其苦行ニ当リ、先ツ衣ヲ脱シ、裸体トナリ、一切世間ノ娯楽ヲ捨テ、沈思冥想ノミヲコトトシ、独リ解脱ヲ求メテ屈辱ニ遭フモ之ヲ忍ム。曾テLâdha国ニ至リシトキ、土人之ヲ虐待シ、之ヲ打擲シ、chuchuヲ以テ犬ニ嗾マシ、土塊ヲ投シタリ。或時其静座セルニ当リ、土人ハ其肉ヲ切リ、髪ヲ抜キ、塵芥ヲ以テ之ヲ埋没シタルモ、皆之ヲ耐忍シテ一言ヲ発セザリシト。食セス飲セサルコト久シキニ度リ、六月ニ及ベリト。十二年ヲ過ギテ大イニ万有知識(Kevala)ヲ暁得シタリ。此ヨリ種々ノ尊称ヲ得タリ。後、Mahâvîra（摩訶毘羅）ト称セラル。大英雄ノ義ナリ。カルパ経ニ云フ、彼ハ［　］ノ一角ノ如ク、単独ニシテ歩行セリト。十二年ハ独居、人ニ交ラズ其後、Sâla樹ノ下ニテKevala万有知識ヲ得タリ。故ニ最勝ノ名アリ。総テ解脱者ハジャナ派ニテハ最勝ト称ス。ヴルトハマーナハ、後三十年ハ伝道ト教会組織ニ従事ス。其外戚ニ王族アリ。其保護ニ依リテ大ニ布教ノ便ヲ得タリ。カルパ経ニ依レバ、ヴルトハマナハ[pâpâ]ナル小村ノHastipâla王ノ史室ニ死シタリト。又家ニ在ルコト三十年、苦行十二年、伝道三十年ナリト。ヴルトハマーナノ死シタル年ニハ諸説アリ。Barthハ五百二十六年、Kernハ三百八十八年ニ死セリトス。

第二節

ヴルトハマーナト釈迦ト事蹟教義ニ於テ、符号ノ点少ナカラズ。両者共ニ同時代ナリ。摩迦陀国王頻毘沙羅(Binbisâra)ハ釈迦ノ時ノ人ニシテ、釈迦ニ迦蘭陀竹園(Karanda venurana)ヲ奉リシコトアリ。又ヴルトハマーナノ親族ニシテ、之ヲ保護シタリト共ニ刹帝利族ナリ。釈迦ハ王子、ヴルトハマーナハ王族ナリ。釈迦ノ妻ハ耶輸陀羅(yasodharâ)ト云ヒ、ヴルトハマーナノ妻ハyasodaト称ス。釈迦ノ異母兄ニNandaアリ。ヴルトハマーナノ兄ヲNandivardhanaト云フ。釈迦ノ俗名ヲSiddharthaト云ヒ、ヴルトハマーナノ父ハ同ジクSiddharthaナリ。釈迦、ヴルトハマーナ共ニベタ経ノ教権外ニ別門ヲ開キ、仏教徒トジャイナ派ハ同一ノ地BeharノGujaratヲ以テ聖地トス。釈迦ノ尊称ハヴルトハマーナニ同ジク、Jina, Buddha, Sarvajna（一切智）、Mahâvîla等ナリ。基教ハ同ジク無神教ナリ。二

者共ニ其教徒ニ崇拝体トナル。此ノ如ク類似ノ点多シ。此ニ依リテ二者ノ同一ナルヲ疑フ者アリ。然レトモ此ヨリ二者ノ同一人ナルヲコトヲ断言スベカラズ。其相違ノ点ヲ掲クレバ、釈迦ハKavilavastuニ生レ、ヴルトハマーナVaiśâliノ近傍ニ生ル。釈迦ノ父ハ首図陀那、母ハ摩耶、ヴルトハマーナノ父ハSiddhartha、母ハ兜利奢羅ナリ。釈迦ノ子ハヴルトハマーナトハ名ヲ異ニス。釈迦ノ母ハ其生ル、トキニ死シ、ヴルトハマーナノ母ハ成長ノ後迄生存シ、釈迦ハ父ノ存生中ニ出家シ、ヴルトハマーナハ両親ノ死後、親権者ノ同意ヲ経テ出家ス。釈迦ノ苦行ハ六年、ヴルトハマーナノ苦行ハ十二年。釈迦ノ苦行中ニハ六人ノ伴侶アリ、ヴルトハマーナハ一人ニテ苦行ス。釈迦ハ正覚ノ後、苦行ノ無益ナルヲ信シ、ヴルトハマーナハ之ヲ必要トス。釈迦ハ通常仏陀、又如来ト称スルコト多シ。ヴルトハマーナハ耆那、摩訶毘羅ト称ス。釈迦ハ四十五年説法シ、ヴルトハマーナハ三十年伝道ス。釈迦ハkusinâgara（狗尸那、掲羅）ニ死シ、ヴルトハマーナハパーパニ死ス。然レトモ両徒々旨ノ類似セルコトハ拒ムベカラズ。「ジャイナ」ハ仏教ヨリ分離シタル者ナルベシ。ウェーベル、ラッセン、バルト皆之ヲ称ス。

第三節　「ジャイナ」派ノ起原ハ十分ニ明ナラズ。「ジャイナ」経ニテハ仏教ト同時代ナリ。此ニハ異説アリ。一ハヴルトハマーナヲ釈迦以前トスル者Colbrook, Stephensonアリ。コルブルークハヴルトハマーナヲ釈迦ノ師トス。今日ハ、此説ヲ奉スル人ナシ。二ハ同時代トス。「ジャイナ」経「カルパ」経之ヲ証ス。ヘルマン、ヤコビハ訳ジャイナ教序論ニ於テ二者同時代ナルコトヲ詳論ス。ケルン、オルデンベルヒモ之ニ一致ス。但シヴルトハマーナヲ先輩ス。三ハ「ジャイナ」ヲ仏教ヨリ後トス。ウヰルソンハ「ジャイナ」派ハ紀元後二世紀ニ起リタリトシ、後八世紀、仏教ノ衰ヘタルトキニ起リタリト修正ス。Benfeyモ曽テ十世紀仏教ト婆羅門教ト衝突シタルトキニ起リタリトナセリ。ウェーベル、ラッセン、バルト等ハ仏教ノ分離セリトス。Buhlerハヴルトハマーナハ釈迦ト同時代ナリ。其実名ハ実ハ、Nirgrantha Jnâtiputraナリ、即チ「ジナーナ」族ノ克己者ナリト。

第四節「ジャイナ」派ハベンガーリノ南Biharニ起リ、Jodhpurヲ経テ、西方ニ播シ、グジャラット等ニ及ブ。曽テシヴ崇拝者ノ為ニ苦シメラレタリ。今ハ四五百万ノ信者ヲ有ス。大別シテ二派アリ。Yatis（克己派）及Śravâkas（聴講派）是レナリ。僧伽ト声聞ニ似タリ。克己派ハ二派ニ分ツ。Śvakâmubaras（白衣派）、Digambaras（空衣派）是レナリ。黒衣派ハ開祖。死後二三百万ニシテ白衣派ヨリ分離シタル者ナリ。白衣派ハ優等ナリ。空衣派ハ異端ナリ。佛教ノ大小乗ノ如シ。漢訳仏書ニハ空衣派ヲ尼犍子ト称ス。又尼処子、尼乾子、尼乾陀子、尼犍爛徒子、眠犍陀弗咀唯、大薩遮尼乾子トアリ。薩遮トハsatyaナリ。弗咀唯ハputrasナリ。唯識疏一本七十二左、一本八十九左、涅槃経巻五二十七右、華厳経音蔵巻四十九右、翻訳各義集巻二三十二右、註維摩経三五右、倶舎論支記巻九四十四左、空衣派ハ今日ニテハ食時衣ヲ腰迄脱ス。常ハ雑色ノ衣ヲ着ケ、孔雀羽ヲ携フ古ハ裸体ナリシ如シ。観仏三昧経八巻六丁右ニ当ニ慚

愧ヲ［　　］尼犍子ノ如ク、身ヲ出スベシトアリ。

尼乾子ハ歴山大王ノ時ヨリ、希臘人ニ知ラル。希臘人ハ之ヲ Γυμνοσοφισται ト称ス。或ハ云フ、此ハ裸体派ニ非ス。粗衣ノ義ニシテ、印度哲学者一般ノ称ナリト。後二三世紀ノ頃歴史嘶ノ史家 Hesychius、之ニ γεννοι ou γυμνοσοφισται ト字書ニ加ヘ裸体派トナセリ。羅馬ノキケロモ此コトヲ称ス。In Indiâ ü, qui sapientes habetur, nudi aetatem agunt, et nuves luemalemque vim perferunt seire delore. ト。

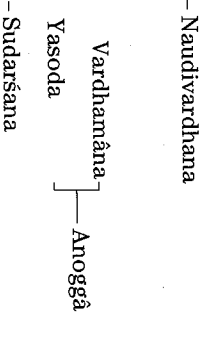
空衣派ノ裸体ハ、ヴルトハマーナノ行為ニ倣ヒタル者ナリ。「カルパ」経ニ依レバ、ヴルトハマーナハ出家ノ始一年一月ハ衣ヲ着ケタルモ、後ハ裸体トナリ。報謝ハ手［　］ヲ以テ受ケタリト。宗徒中之ニ倣イタル者アリ。後ニ一派ヲナス。即仏者ノ所謂露形外道ナリ。倶舎光記二十六巻二十六丁、此語ヲ載ス。空衣派ハ又 Muktâmbarasノ名ヲ受ク。「ムクター」ハ娼ノ意ナリ。又、Vivâsanas（毘婆沙那派）ト称セラル。裸体ノ意ナリ。此派ニハ毛髪ヲ抜クノ習アリ。白衣派モ亦同ジ。故ニ両者ヲ抜髪派(Lunchatakeśa)ト称ス。此モヴルトハマーナガ出家スルニ当リ、毛髪ヲ抜キタリト云フニ倣フナリ。註維摩三巻四丁以下ニ六種外道ヲ数フ。Purana Kâsyapa, Maskarin Samjaya Vâiratti, Arjita Kesakambala, kakuda kâsyâyana, Nirgrantha Jnâtiputraヲ挙グ。羅什ノ註ニハ尾乾陀ハ［　］ナリ。提若ハ母ナリト。ビュレルハ之ヲヴルトハマーナノ実名トナス。「ジャイナ」派ノ分類ヲ挙グ。

闍伊那派
- 聴講派
- 克己派
  - 白衣派
  - 空衣派

玄奘西遊記十巻七左ニ三摩咀吒国ノコトヲ載ス。其中尼犍子ノコトヲ記シテ云フ、天祠百所異道雑記露形尼乾、其徒特盛ト玄奘ノ入竺ハ七世紀ナリ。三摩咀吒ハ東方ニアリ。

第五節　ジャイナ派ニテハ世界ノ時代ヲ上向期、下向期(Utsarpiñ, Avasarpiñ)ニ分ツ。何レモ六級ノ時アリ。上向期ノ六級トハ、一悪悪、二悪、三悪善、四善悪、五善、六善々ナリ。下向期ハ善々ヨリ悪々ニ終ル。上向期ニハ人齢体量次第ニ増加ス。下向期ニハ之ニ反ス。吾人ハ今下向期第五級期ニアリ。邵康節亦此種ノ説アリ。十二万九千六百年ヲ一元トシ、一元ヲ十二会ニ分ツ。前六会ヲ息トシ、後六会ヲ消トス。今ハ後六階ノ始ニアリトス。世ハ上下向期ヲ終レハ一時代ハ充ツ。過去ノ上向期ニハ二十四者那出テ、皆神位ニ上ル。未来ニハ二十四ノ者那出現セン。今出現シタル者那二十四人ハ勒娑婆Rishabha又Vrishabha、阿逸多Ajita、三婆伐Sambhava、阿毘難陀那Abhinandana、須摩底Sumati、波頭摩波羅伐Padmaprabha、須波栗溼縛Supârśva、戦達羅波羅伐Candraprabha、布溼波檀達Pushpadanta、私多羅Śîtala、室黎耶斯Śreyas又ハ、Śreyansa、婆須補闍Vâsupûjya、毘摩羅Vimala、阿難多Ananta、達摩Dharmma、僧底Santi、宮兜Kunthu、阿羅Ara、摩利Malli、年尼須勿羅多Muni-

sverata、尼弭Nimi、涅弭Nemi、波栗溼婆那達Pârśvanâtha又Pârśva、婆陀摩那Vardhamâna、是レナリ。皆、耆那ナリ。又Tîrthakaras又Tîthankarasトモ称ス。二十四耆那ノ中、波栗溼婆ト婆陀摩那ノミ人ニシテ、他ハ虚構ナルベシ。然レトモ百論疏上ノ中十七左ハ、ジャイナ派ノ伝説ニ拠リ、勒娑婆ヲ以テ尼樓(ママ)子ノ始祖トス。云フ、勒娑婆者茲謂苦行仙其人身有若与楽二分計若現世合受尽苦楽法自出、諸説之経名尼健子有十万偈云々ト。ジャイナ派ノ伝説ニテハ、勒娑婆ハ身五百弓ノ長ニシテ八百四十万年ノ寿ヲ有ス。次ノ耆那ハ之ニ劣リ、漸次身長ト寿ヲ減ズト。第二十三耆那波須婆ハ真ノジャイナ派ノ始祖ナルベキモノモ、未ダ十分ニ一派ヲナサス。ヴルトハマーナニ依リテ大成一派ヲナシタルナリ。波須婆ノ伝ハ劫波経ニ出ツ。Viśâkhâ 毘舎迦ニ生ル父ハベナーレス王Aśvasenaニシテ、母ハVânâナリ。第一ノ弟子ヲÂryadathaト称ス。アーチャランガ経二巻三篇十五章十六節ニ云フ。尊敬スベキ克己者ノマハビーラノ父母ハパールスバノ崇拝者ニシテ沙門ノ継続者ナリト。ヴルトハマーナノ第一弟子ヲIndrabhûtiト称ス。カルパ経ニ依レバ、ヴルトハマーナハ一万四千ノ沙門(Śramana)ヲ有シ、インダラブッーチ其長老タリ。三万六千ノ比丘(Bhikshuni)ヲ有シ、Candanâ其長タリ。ヴルトハマーナノ系図ヲ挙ク。



第六節　ジャイナ派ノ経文ハJaina-Sutrasナリ。「ジャイナ」ヲ禅那ト混スルハ非ナリ。禅那ハdhyânaナリ。冥想ノ義ナリ。ジャイナ経ハ五十全種アリ。単ニ「スータラース」トモ称ス。或ハSidhantas(悉檀達)トモ称ス。二種ノ彙類アリ。一ハ劫波部ト阿含部ト分ツ者。劫波部ニ五種、阿含部ニ四十五部ノ経アリ。二ハ八種ニ分ツ。十一部ノAnagas、十二部ノUpangas、四部ノMûla sutras、五部ノKalpa、六部ノCeddas、十部ノPayannas、一部ノNandi-sûtras、一部ノAnuyoga-dvâra-sutaトスル者ナリ。此中ニ四種ノ註解アル者アリ。「ジャイナ」経ハ梵語、プラークリット、ニテ記ス、六十万偈(slokas)ヲ有ス。Âcâranga-及Kalpa-sutraハ諸経中最古ノ者ナリ。共ニ英訳アリ。ヘルマン、ヤコビノ訳ナリ。「アーチャランガ」経ハ教義ノ叙述ニシテ上巻下巻アリ。「カルパ」経ハヴルドハマーナ、パースヴー、ルジュブハー、上座部諸僧ノ伝ヲ蒐メタル者ニ、終ニ克己派ノ戒律ヲ載ス。「ジャイナ」経ハヴルドハマーナノ自ラ編シタル者ニ非ス。其死後衆徒ノ結集ニ成ル者ナリ。ヴルドハマーナハ自ラノ著述ナシ。「アーチャランガ」経ノ始ニ云フ、「我左ノ言論ヲ尊敬スベキマハービラヨリ聞ケリ」ノ語アリ。即如是我聞ナリ。経ノ結集ノ年代ニ就キテハ伝説ニ依レバ、二回ノ会合即チ第一回婆羅

毘Valabhiニテハ提婆提Devarrdhi会頭トナリ、悉壇多ヲ作ス。第二回摩偸羅Mathûraノ会合ニハ索建提羅Skandila会頭トナリ、悉檀多ヲ修正ス。ヴラビノ会合ハ紀元四百五十四年ナリ。此ハ不明ナリ。ヤコビハ之ヲ紀元前四世紀ノ末三世紀ノ始トセリ。是レ「ジャイナ」派ノ起基後二百年ナリ。筆記ノ類ハ此前ニ存シタリシヲ、集口碑ヲモ参考シテ結集シタル者ナリ。

第二　教義

第一節　「ジャイナ」派ニ従エバ世界ハ無始無終ニシテ、常住不滅ノ四大原子ヨリ成ル。而シテ世界ニ三種ノ別アリ。下、中、上三等ナリ。此外ニ無数ノ地獄極楽アリ。一切ヲ二諦ニ分ツ。活動精神(Jîva)、無活対象(Ajîva)トス。提婆ノ外道小乗涅槃論ノ有命、無命、是レナリ。活動精神ニ三種アリ。円満精神Nidtyasiddhaハ耆那ノ如キ者、解脱精神Baddhâtmanは是レナリ。無活対象ハ七若クハ九諦ニ分ツ。要スルニ心ト物ハ別物

- 一切
  - 活動精神
    - 円満精神
    - 解脱精神
    - 撃縛精神（ママ）
  - 無活対象

「ジャイナ」ノ心物ハ心我、自性ニ似タリ。然レトモ精神ハ身体ト同一大ヲ有ストナス。是レジャイナ派自家ノ新見ナリ。精神ハ知識的ナルモ、無活対象ニ着シテ迷誤ノ中ニアリ。無限ニ廻輪スルハ是執着ノ為ナリ。故ニ知者ハ迷誤ヲ解脱シテ、涅槃ニ達セント欲ス。涅槃ニ達スルニハ三宝(Triratna)、即正信(Samyag- darśana)、正和(Samyag-jnana)、正行(samyag-caritra)ヲ守ラザルベカラズ。正信トハ深ク耆那ヲ信ズルコトナリ。正知ハ教義ヲ知ルコト正シキナリ。正行ハ厳ニ五戒ヲ守ルナリ。五戒ハ不殺(Ahinsâ)、不欺(Sunrita)、不盗(Asteya)、禁欲(Brahmacarya)、一切世間上ノ物ヲ棄ツルコト(Aparigraha)是レナリ。

（いそまえ　じゅんいち　　日本女子大学助教授）
（たかはし　はら　財団法人国際宗教研究所研究員）